
senso

結城 カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s e n s o

【Nコード】

N 6 7 2 1 S

【作者名】

結城 カイン

【あらすじ】

架空の世界の学園ダークファンタジー。

サマシティの通称「天の王」と呼ばれるスクールへ「クレド」と言う少年が転入してきた。

ごく普通という「アーシュ」は彼の世話係に…

異形の転入生 1

sensoryシリーズ「異形の転入生」その1

> i 2 2 6 9 3 — 2 7 3 <

サマシティの一角にある古いインデペンデントスクールである通称「天の王」と呼ばれるこの学校は、半分が通学する生徒と、残りの半分が別棟から寄宿する生徒達の巣となる。

この学校には独自の教育観念があるが、通わせる親がすべてを把握しているかどうかは…知ったことではない。

噂によると「一流の名門校」と言うネームバリュウが欲しいが為に、我が子を入学させようと必死になるそうだ。

確かにこの学校からの卒業生には言わずもがな…有名な方は多い…のかも知れない。

さて、俺の紹介だが…なんてことはない。

至って真面目なふつうの生徒である。

皆は「アーシュ」と呼ぶ。

ここでは真の名は特別な儀式の限り、呼ぶことはない。

だから、ただの「アーシュ」で結構。

俺がここへ連れて来られたのは生まれて間も無くだったそうだが、勿論俺が覚えているわけもなく、この学校の一番下の保育クラスで愛情深く育てられた。

ここで育てられるのは、なまじ世間一般の普通の家庭で育てられるよりも、意味合い的には数段救われるものだ。勿論適応力は必要になるが…

様々なお伽噺はこの地でもいくらかもあるが、身近な話となると

そう多くもない。

その中の幾つかを語ることは、口下手な俺でもできるだろう。
だから、この話から始めようか。

14歳の短い秋の始まりの頃だ。

「夏の終わりの嵐」が過ぎ去った或る朝、ひとりの転入生がやってきた。

名を「クレド」と、言う。

教壇に立ち、先生に紹介される姿を見て俺は眉を顰めた。
色々な意味合いを含めて…

「おい、アレは…どんな感じだ？」

後ろの席の「ロア」が俺に聞く。

「さあ…何も？」と、すつとぼける。

「アーシュ」

先生が俺の名を呼ぶ。

「はい、先生」

「クレドが慣れるまで、君に彼の世話係を申しつける」

「…はい」

先生の命は絶対であり、その決定に間違いはないから、俺の意思など関係なく、命令は申し渡された。

クラス中の生徒が俺を見て、ニヤニヤしている。

俺はそれを見無視し、席を立て、彼「クレド」の前に立ち、握手を求めた。

彼は少し恥じらいながら、俯き加減に俺の手を握った。

「よろしく、お願いします…アーシュ」

「こちらこそ、よろしく、クレド」

眼鏡越しでも良く見えるすりガラスのようなピンと張ったかわいい薄羽根を恨めしそうに眺めて、「さて、このお守りはちと俺には荷が重いんじゃないのか？」と、口を動かさずに、俺を見ている先生に訴えたのだ。

このニュースは暇を持て余した生徒たちの苦々しい好意により、またたく間に校内に広がった。

運が良いことにクレドの羽根は誰も彼も見えるわけではないらしい。

絡まれる機会は少ない方がいいに越した事はない。

どっちにしろ…利口な奴はこういう類には関わらないものだ。だから、仕掛けてくる奴は下等な虫けら共に決まっている。

「虫けらとは言いすぎだよ、アーシュ」

寄宿舎の俺の真向かいの部屋の「ベル」が、俺の部屋で煙草をくゆらせ、俺を笑う。

「虫けらを虫けらと言って何が悪い」

「虫けらも使い様によっちゃ、役に立つことも、まああるってことだ。それより…『クレド』の羽根は気に入った？」

「…」

自慢の金髪を指で後ろに撥ね、ベルは俺の耳に近づく。

「クレドは『彼』に似ているよね」

「どこが？」

「美しいプラチナのやわらかい髪…」

「あいつの方が透明だ」

「素直で純情そうな顔…」

「あいつは素直でも純情でもない」

「それは俺も知っている。ついで瞳もマラカイトグリーン…」

「あいつはあんな色じゃない」

「光に透かせばそう見えなくもなかった。何より俺の隣りで眠る『彼』は極めて…美しかった」

「…」

眼鏡越しにガンつけても相手がベルじゃ、効果は薄い。

「折角のお恵みだ。ものにすりやいいのに。気を使うことはない。どうせ『彼』には、わかるものか」

「気を使つてなんかいるものか。俺はクレドには興味がない。第一…あいつとは似ても似つかない」

「ふゝん、おまえがそう言うのなら、構いはしないが…ま、気が向いたら、俺にも貸してくれよ」

「貸さないよ」

「じゃあ、おまえでよろしく。たまには遊んでくれよ。アーシユのネコ毛の橡くわみの髪、気に入っているんだ」

コバルトブルーの目の玉を軽く瞬かせ、俺の頬にキスをする。

「言つてろ」

その顔を軽く跳ね除ける。

同情したふりをするベルを部屋から追い出し、ひとりになった俺はベッドに横になった。

ベル…あいつめ、余計な事を言いやがる。

今夜の夢は絶対にあいつが俺を翻弄するに決まっている。

セキレイ、セキレイ…俺のかわいい子…

あいつがここを出てからもうすぐ一年になる。

戻ってくる約束は、最初から充てになどしていない…

異形の転入生 2

最初の予想通りクレドはすぐに襲われた。

無能な者にとつて、聖堂の天使のように見えなくも無いクレドは、恰好のアニユスディなのだろう。

昼食の終わった昼下がりに、裏庭の鉄塔の影でベルと一服しているところへ、委員長のヴィーが血相を変えてやってくる。

「ア、アーシュ…探したよ」

息を切らせてヴィーは俺を見る。

「どうした、委員長。まあ、落ち着きなよ。どうだ？君も一服するかい？」

「そうだね、頂くよ…」って、言ってる場合かつ！君の大事なクレドがベガ達に連れ去られたぞ」

いつものノリ突っ込みを笑う暇もなく、ヴィーはとんでもない事を言い出す。

「…え？」

「いつもの仲間を引き連れて、クレドと一緒に体育館に行くのを見たっていう奴がいた」

「あら、あいつら手加減ないからなあ、急いでいかないと間に合わないかも。クレドに何かあつたら世話役のおまえの評価が直滑降だぞ。だから俺が言つたろ。転入生から目を…」

「ああ、うつせえよっ！」

ベルの皮肉を最後まで聞く気はなかった。

俺はそれこそ飛ぶ勢いで体育館へ急いだ。

世話役というのは世話をしている生徒の行動の一切の責任を負うってことだ。

付かず離れずクレドの傍には居たつもりだったが…

昼食と一緒に取り、その後、クレドは図書室で自習するからと…
別れたんだ。

たった一時間程度だ。まさかの一大事。

体育館の中はシンと静かだった。

中を突っ切って俺は男子更衣室へ向かった。

ドアへ近づくと、唸るような声と壁奥からドンという音が響く。
ドアノブを捻ったが中から鍵を掛けられていて、開かない。

「クソッ…こんなことで俺は退学なんてなりたくねえぞ」

精一杯の力を振り絞ってドアノブを回す。

ありがたいことに時代物の錆付いたドアノブがぎぎと鳴り、なんと開いた。

薄暗い更衣室の中には、案の定予想通りの光景が広がっていた。

即ちクレド以外のクサレガキ共が床に叩きつけられていたのだ。

俺は急いでやられた奴らの状況をひとりひとり確認した。

…助かった…六人全員、命に別状はない。

「ごめんなさい…アーシュ」

部屋の隅に隠れていたクレドがひっそりと姿を見せる。

「こんな風に痛めつける気はなかったんだけど…急に襲ってきたから怖かったの」

唸り続けている奴、気を失っている奴…まあ、二、三本の骨は折れているかもしれないが、こいつらにはいい薬だろう。

「クレドは手加減って奴を覚えなきゃならないな」

恐縮するクレドに俺はニコリと笑う。

「…本当にすいません」

「ま、いいさ。死ななかつただけで充分。もし、ひとりでも死なせていたら、俺も君も即退学だよ、クレド」

「…うん。こんなに弱いなんて思わなかったもの」

「まあ、彼らは対象者ではないから…」

「え？」

「いや、こつちの話。じゃあ、ここから出て、先生を呼んでくれる？一応こいつらの後片付けをしなくちゃね」

「わかりました」

先生を呼んで、保健室へベガ達を連れて行つた。

何があつたのかはひと目で見ればわかることだったが、ベガは札付きの不良のプライドでクレドからやられたとは決して言わなかつた。

その心根に免じて、俺は後でこつそりとお礼を言つた。

「ベガ、礼を言うよ。君のおかげで僕もクレドもお咎めなしだ」

「…」

「君も勉強になつただろう。外見で判断すると、とんでもない制裁を及ぼすつて…」

ベガは何も言わず、三角巾で吊られた左腕から中指を立てて、背中を向けた。

「ねえ、クレド。どうやってやつつけたの？」

「うん、僕、前に居たところでボクシングを習っていたから…それを使つてしまったの」

そう言いつつ、クレドは両手の拳を顔の前に構える。…サマになつていとお世辞にも言えない。

「…でももしこのことが知れたら先生に怒られるね」

両手を下げてシュンとする。雨に濡れた子犬そのもの。

「きつと…わからないさ」

「そうだね。ずっと遠くに離れたんだもの」

瞬く間にぱつと明るくなるクレドを見て、まるで春の天気のようにだと笑つた。

この事件をきっかけにクレドへの脅威はすっかり無くなり、俺も

少し肩の荷が降ろせた気がした。

クレドの家は校舎の裏手にある白いレンガの二階建ての館だ。

半月前、引越されたばかりで、その後にクレドが住んでいる。俺はクレドに誘われて、家へお邪魔した。

引越しの片付けが終わっていないというクレドだったが、部屋に入ってもガランとしている。

「まだ荷物は来ていないの」

「そう…家族は？」

「うん…お母さんがあまり具合が良くないから…僕だけ先にここへ来たんだ」

「…」

チェストの上の額にはクレドとその家族と思われる写真が飾られている。

覗き込む俺に、クレドは親切にそれを俺の手に渡して説明し始める。

「これが弟のジルと妹のロダ。双子なんだ。かわいいだろ？」

「うん」

「お父さんとお母さん…こちらに引越したのはいい病院があるって聞いたんだけど…お母さん、早く来ればいいのに」

「そうだね」

俺はその写真を見て、ある事に気づいてしまった。

それを聞いていいのか…躊躇ってクレドを見つめた。

「気が付いた？」

「…うん」

バツが悪くて思わず目を逸らした。

「君には見えるんだね。僕の羽根が…」

「…」

「じゃあ、この写真のみんなのもの？」

「見えるけど…」

「僕だけ…違う、よね」

「…」

そう、家族五人の写真の中で、クレドだけ羽根が違っていた。

「僕はできそこないなんだ」

「え？どこが？」

「だって、僕の羽根は羽毛ではないもの。綺麗じゃないよ。…異端なんだ。昆虫の翅^{はね}なんて…かつこ悪いよ…」

「蜻蛉も甲虫も綺麗だよ。それに飛べることに変わりはない…だろ？」

「…そうかな…家族で僕だけ違うなんて…なんだか惨めになる」

「それで親の態度が弟たちと違うなら問題だね」

「そんなことは無い！お父さんもお母さんも優しくてかわいがってくれて…僕は愛されているもの…」

「それじゃあ問題はないじゃないか。羽根の形なんて気にすることもない。クレドの羽根、ピンと張ってて綺麗だぜ。俺は好きだよ」

「…ホント？」

返事をする代わりに、俺は泣きそうなクレドの頬にキスをした。
まだ会えない家族の代わりの慈愛のキスだ。

異形の転入生 3

3、

クレドは従順そうな外見と違って、かなりのいたずらっ子だった。女生徒のスカートの裾を風でたくし上げたり、生徒の探し物をいち早く見つけてそっと机に隠したり…この間は蛙の解剖の時間、彼は解剖するのを嫌がり、閉ざした小さな空間を創り時間を巻き戻した。青蛙は見事におたまじゃくしに戻されてしまった。

他の奴らには見られずに済んだけど、俺はクレドの魔法にひやひやさせられる。

それと同時になんだか懐かしくて、胸がキュンとなる。

クレドのその姿は俺の「セキレイ」を思い出させるから。

「軽率だよ、クレド。いくら魔法が使えるからって。校則は知っているだろ？」

「わかってるよ、アーシユ。前の学校も厳しかったからね。でも魔法を使えるのに使わないって、つまらなくない？」

食堂の片隅で俺達は昼食を取る。

配膳された目の前の皿をクレドは変な顔をして睨んでいる。

「これ…なあに？」

皿の上に乗せられた料理を指す。

「タコヤキだよ」

「タコ、ヤキ？」

「小麦粉の中に野菜とタコが入っているファーストフードさ。でも栄養のバランスがいいからね。食べてごらん。案外いけるよ」

「う…ん」

納得のいかないような顔でその丸っこいタコヤキにフォークを突き刺し口の中に入れる。

「どっつ？」

「う…なんだ、これ、おいしいっ！こんな味初めてだ。うわ、この黒いのと白いソースの混ざり具合が半端ない」

「…オリジナルソースだからね」

「この間のスープパスタも美味しかったけど…」

「ああ、ラーメンね」

「この学校の食堂のメニューってさ、僕が生まれてこの方口にしたことないようなものばかりだよ。ああ、昨日食べた揚げたパンも美味しかったし」

「ピロシキってメニューに書いてった」

しゃべりながらも皿の上のタコヤキを次々と口に放り込み、食べ終わった後もまだ足りないというように俺の皿をじっと見る。しかたがないから、俺の分のタコヤキをクレドに分けてやった。

「どうして、こんなに珍しいものばかりなのさ」

ようやく落ち着いたのか、クレドは口の周りに付いたアオノリやソースをナプキンで拭く。

「え」と…簡単に言う…ここは貿易の盛んな街だからね。だからシェフも色んな地域から集まるんだ」

「ふーん。面白いね」

「まあね、それより今日は午後は授業は無いから、俺は街に行くけど、クレドはどうする？」

「僕も行きたい。家と学校以外にまだどこにも行ってないもの」

「じゃあ、食事が終わったら一緒に行くっ」

街に出た俺はいつもの馴染みの古着屋で臙脂のマフラーを買った。昨年「セキレイ」と別れる時に、俺の赤いマフラーを彼に取られたからだ。もうすぐ冬が来るから、風邪を引くと拙い。

同じものは無かったから似たような色を選んだ。

セキレイの奴…あのマフラーは俺のお気に入りと知っててワザと持って行ったに違いない。

クレドは俺のマフラーと対になった臍脂の手袋を欲しそうに手に取っていた。

「買えば？」と、言ったが、「無駄にお金を使っちゃいけないから」と、言う。

俺はその手袋をクレドに買ってあげた。

「いいの？」

「俺の小遣いは学校からの寄付金からのおこぼれだ。要は生徒たちの親からのお恵みだからさ。生徒にあげるっていつでも巡りめぐって元の鞘ってわけだね。気にするなよ」

「ありがとう…」

雀斑ひとつもない白いクレドの頬がピンク色に染まる。

かわいいなと俺は言った。

延々と続くサークル模様の石畳をクレドと肩を並べて歩く。
冷たくなつた風が吹く度に道の両側の木々の落ち葉が石畳を色とりどりに染めていく。

「ここは不思議な街だね」

「そうかな？」

「この落ち葉だって…どうしてこんなに色鮮やかなの？見たこともないや」

「赤い葉っぱはモミジと言うんだ。赤ちゃんの手みたいだろ？こっちの黄色い奴はイチョウ。落ちてる実は踏みつけるなよ、臭いぞ。けれど煎って食べると美味しいんだ。薬としても役立つ」

「へえ…」

クレドは立ち止まり天上を向いた。舞う落ち葉がクレドの髪に服

にそつと居場所を求めた。

クレドの羽根がピンク色に染まり、黒い翅脈が美しい模様を描く。

> i 2 3 1 3 8 — 2 7 3 <

「なんだかすごく…飛びたい気分になるね。そう思わない？アーシユ」

「飛べばいいよ」

「だって…校則違反になる」

「ここは学校じゃないから、大丈夫だよ」

「ホント？」

「でも人目を避けて…ね」

「うん」

そう言つてふたりで周囲を見渡した。いい具合に人の影は見当たらない。

「俺もいつぺんは君がその羽で飛ぶところを見たかったんだ」

「え？…ああ、羽根で飛ぶこともできるけどね。これ結構大変なんだ。筋肉痛になったりしてね」

そう笑つて、クレドは羽根をパタパタと駆動させた。

「だからね、翅は上に上がる時だけ使う。あとは風になるんだ…」

言うよりも早く、クレドは制服の上に纏ったマントを広げた。マントの裾がピツと張る。

クレドの身体がすつと空中に舞い上がった。

彼はイチヨウの木の高さまで一気に飛び、そこからゆっくり回転してみせた。

俺は見惚れていた。

なんて軽やかなんだろう。

なんて気持ち良さ気なんだろう。

俺も力を使つたらあんな風に飛ぶことができるんだろうか…

クレドは空を飛ぶ隼を追っかけたり落ち葉を空中で掴んだりとしばらく帰ってこなかった。

俺は呆れて眺めていたが、とうとう声をあげた。

「もう戻って来い。じゃなきゃ俺は先に帰るぞ」

俺の存在を忘れてひとりだけ自由に飛んでいるクレドに羨ましくもあり、段々とムカついてきたのだ。

俺の声が届いたのか、クレドは俺にめがけて急降下してきた。

「アーシュ、僕を受け止めて！」

クレドが叫ぶ。俺はあわてて両手を広げた。

衝突寸前にクレドはスピードを落とし、ふわりと俺の腕に収まった。

「びっくりさせるなよ、クレド」

「アーシュ…アーシュ、大好き！」

喜びに満ちたクレドの告白に、俺も嬉しくて仕方がない。

異形の転入生 4

4、

寄宿舎へ帰った俺に、ベルが声を掛ける。

「何かあったのかい？アーシュ」

「え？」

「何だか嫌に楽しそうだ」

「別に：それより見てくれよ。どうだい？このマフラー。似合うかな」

袋から買ったばかりの赤いマフラーを取り出して、首に巻く。

ベルは俺のマフラーがセキレイに取られたことを知っているからこれで誤魔化せると思った。

しかし、ベルは不満気に口端を曲げ、俺を嗤う。

「そのマフラーを買いにクレドとご機嫌にデートかよ。それで、あの転入生と寝たのか」

「：寝ないよ。そう言ったはずだろ？」

「嘘つき。『彼』の事を忘れないって誓いながら、新しいものを欲しがってるじゃないか」

ベルの皮肉はいつもの事だ。そう気にすることもないんだが、今日は語尾に毒がある。

「ベル、クレドは転入生だよ：彼は俺達とは違う。そうだろ？」

「：」

「彼が好きだよ。だからっておまえらと同じ扱いができるわけないだろう。彼は家族と離れてひとりぼっちなんだよ。：おかしいと思わないか？」

「何が？」

「彼がここに居る事が」

「：迷い込んだとでも？」

「わからないが：もしクレドの家族がここに来ないのなら、折を見

て院長にでも伺うことにするよ」

揺れていたベルの瞳が俺をじっと見た。

「アーシュ」

「ん？」

「…悪かった」

ベルは怒りをやり過ごし、俺の頭を抱く。

コッソンとお互いの額をくっつけ、そしてゴメンとひと言呟いた。

次の日、クレドは学校に来なかった。先生に聞いても、欠席の理由はわからなかった。

放課後、彼の家へ行く。

もし病気だったら、彼を看る保護者は居ないはずだから、俺が面倒をみなきゃならない。

玄関の扉は開いていた。中へ入り、様子を伺うが気配はなかった。彼の寝室へ向かう。

「クレド、居るのかい？」

クレドはベッドの中に居た。

俺はベッドの端に座り、隠れた毛布からはみ出した金色の髪の毛を撫でた。

透明な翹も心なしか色褪せている。

「どうしたんだい？クレド。具合でも悪い？連絡も無しに学校を休んだら、心配するだろう？」

「…手紙が…来ない」

泣いているのだろう。クレドは酷い鼻声だ。

「手紙って…家族からの」

黙ったまま、彼の頭だけが少し頷く。

「いつ出したの？」

「三、週間前…」

「引越しの準備で忙しいのかもしれない」

「だってっ！すぐに来るって…僕がこちらに着いたらすぐに行くからねって言ってたんだよっ！」

クレドは毛布を蹴飛ばし、飛び起きた。

水色のコットンフランネルの生地にはイラギの模様がついたパジャマはクレドに似合っている。きっと彼の母親がクレドの為に選んだものなのだろう。

クレドの目は赤かった。一晩中泣いていたのかもしれない。

「ねえ、クレド。ご両親がそう言ったのなら信じればいいじゃないか。返事が来ないのだってのっぴきならない用事があるのかもしれないし…」

「…お母さんの具合が悪くなったのかも…知れない。代わりに僕が家の事をやらなきゃ…それともジルとロダが事故にあったのかもしれない。あの子達はおっちょこちよいでいつも走り回っているから怪我が絶えないんだ。僕が居ないとすぐに寝つかないし…僕がいないと駄目なんだから…」

「クレド…」

興奮したクレドを落ち着かせる為に俺は、ベッドの端に座らせ、クレドの背中を抱き締めた。

「違う…僕はきつと…捨てられたんだ」

力の無い声でクレドは呟いた。

「どうして？」

「だって…僕はこんな羽だし、出来損ないだ。家の中でも…一生懸命家事をやってもちつともお母さんみたいに上手くできないし…僕はきつと…きつと捨てられたんだ…」

クスンクスンと泣くクレドをどうやってなぐさめていいのか、俺も困惑してしまう。でもクレドの話す内容がどうしても腑に落ちない。

「ね、クレド。君はこの街へどうやって来たんだい？」

「え？…ナチアのセントラルステーションで列車に飛び乗って…それで車掌さんにサマシティまでお願いしますって…」

「そのチケットはまだ持つてる？」

「うん、探せばあると思うけど…」

パジャマ姿のクレドにガウンを羽織らせ、一緒にリビングへ向かう。

チェストの中から探し出したチケットを見せてもらう。

…確かに行き先は「サマシティ」だ。

「クレド、今度はここへの住所を書いた…書類かなにかある？」

「書類はないけどお父さんが書いたメモならある。間違わないようにって持たされたんだ」

そう言ってクレドは同じ引き出しから四角に折られた紙切れを差し出した。

行き先と書かれた文字は何故か途中で滲んでいる。

「ねえ、クレド、この滲みはなに？」

「え？…ああこれ、ジルがミルクを零して、それで汚れてしまったんだ」

「ここ ほら『s a m a』と『c i t y』の間、滲んでいて判別できないけど、何か文字が消えてる風に見えないか？」

「…そうかな」

「待つて」

俺はそのメモ用紙を光に透かしてみる。

「やはり何か書いてあったんだよ。…そうだ、クレド。君、時間を巻き戻せる力があつたよね」

俺は前にクレドが生物の実験で蛙をおたまじゃくしに戻した事を思い出した。

「え？うん…ほんの少しの空間だけなら…」

「じゃあ、このメモ用紙を時間を巻き戻して、ジルがミルクを零す前まで」

その力を使えば…

「すぐく…難しいよ。だってお父さんがこれを書いた後、すぐにジルは零したんだから」

「それでもやるんだよ、クレド」

クレドは黙って頷き、そのメモ用紙をテーブルに置いた。両の手を平を近づけて、集中する。

精霊を呼ぶわけでもない魔法は呪文を伴わない。

秘めた力だけで行う。

メモ用紙の周りが丸い空間に閉ざされ、紙端が小刻みに震えだす。時間が遡っている。

俺はじつとそれを見つめた。

頃合を計るのが難しい。ひと月も遡るんだ。そう何回も連続で出来る技じゃない。

…失敗は許されない。

メモ用紙の様子は変わらない。だが、確実に目的に近づいていくのはわかった。

「クレド、少しスピードを落して。もうすぐだと思う」

俺には見えていた。日時もその時がもう少しだということも。

滲んだ文字が一瞬ミルクで白くなる。そしてくつきりと浮かんだ。「そこだっ！」

時間は止まった。

俺はそのメモ用紙を覗き込み、そっと手に取った。

その浮き出た文字は混乱したクレドの問いの答えを導いた。

力を使い果たしたのか、はあはあと息を吐くクレドの目の前にそのメモ用紙を差し出した。

「クレド、見て。消えた文字がはつきりと見える」

「え？」

「良く見てごらん。『sama』と『city』の間に『ra』が見えるだろ？『samaracity』ここが君の行くべき街だつたんだよ」

「…ど、という事？」

「君は間違つてこのサマシティに来てしまったんだよ」

「だって…誰も…学校も先生達だって、僕の事を受け入れてくれたじゃないか」

「それはね、クレド。この街はそういう街だからだよ。ここは目的のない彷徨う人を容易に受け入れる場所なんだ。ただし…出て行くのは難しい。手紙を出しても届いたかどうか怪しいし、電話もテレビも無い。外の情報が行き渡るのを恐れてね。だがこの街に住む者にはこの街ほど安全な場所は絶対にない。彷徨う者には少しばかり過酷かも知れないけどね。要は行きは良い良い帰りは…だな」

「え？」

「でもクレドには愛する家族がいる。君を待っている家族がいる。もしかしたら本当の引越先で居ない君を探し回っているかもしれないよ」

「…でも」

「帰りなよ、クレド。君を待つ本当の君の場所へ」

「…僕、アーシュと別れたくない」

クレドの身体が俺の胸に寄りかかる。俺はそれを抱き寄せた。乾いたクローバーの匂いがした。

「アーシュが好き。僕がこの街を出たらアーシュと別れなきゃならなくなる。そんなのは嫌だ。ずっとアーシュと居たい」

止まった涙がまたクレドの頬を伝った。

俺はそれを舐める。

…なんだか嗜虐的になってくるのが変だ。
笑わずにはいられない。

今は情に流されてはいるが、どっちにしろ、こいつはここを出ていく。

そしてこの街から縛られたままの俺は、ただ見送るだけの道化になりさがる。

それだっ たら…

ベルではないが、いつそのことここでこいつを抱いてやろうか。クレド本人もそれを望んでいる。

この何も知らない身体に、忘れられない思い出を刻んでやってもいい。

そうすれば、俺の残滓もこの街から旅立つことも出来るというものの…

異形の転入生 5

5、

「俺が欲しいかい？クレド」

俺の目を見つめたクレドは黙って頷いた。

漆喰のタイル壁にパジャマのままのクレドを押し付けた。その身体を押さえつけて、口唇を重ねる。

ズボンの中に手を入れると、クレドは反射的にビクンと震える。

「ねえ、君。忠告しておくが、俺がこのまま君を犯したら、君はこの街から出られなくなるかも知れない。家族の誰にも二度と会えないかもしれない。それでも俺が欲しいって言うの？」

「二度と…？」

クレドは戸惑った顔をした。

「そうだよ。君の大好きな大切なお父さん、お母さん、ジルとロダにも会えなくなる。それはそれで親からの独立って事で君にとっても家族にとってもいいかもしれないし、君がここに居たいと言えば、君が暮していける保障は学校がしてくれるよ」

「…僕…」

言葉を詰まらせたクレドに俺を求める欲情の気配は消えた。

「俺だって、クレドを可愛がってあげてもいいし…勿論君次第だが…」

「そ、そう…だよ。僕も14なんだし、親に甘える歳じゃないもの。ここでアーシュと暮していけるなら…でも…やっぱり心配しているかもしれないから、一度お父さんに許可を取ってから、またここに帰ってきてもいいかな」

クレドの切迫した真剣な顔に、俺はこれ以上堪えられなくて吹きだしてしまった。

「な、何がおかしいのさっ！」

「いや、クレドの言葉と裏腹の心に参ってしまっただけ」

「え？」

「俺は親も家族も居ないからさ。親への敬意も有り難味も知らないままで生きている。だからね、クレドの家族への絆がこんなにも絶ちがたいなんて、とても羨ましくて、意地悪を言ってみたんだ」

「アーシュ……」

「俺には見えるよ、君の羽がどんな形をしていようと、君のご両親が君を偽りのない愛で育ててきた事を。だから君はまだ家族と一緒に居なきゃ駄目だ。誰が病気のお母さんの看病をするの？誰がジルとロダに毎夜本を読んであげるの？…君しかないだろう、クレド」

涙ぐんだクレドは黙って頷いた。

「さあ、行こうか」

「どこへ？」

「君の家族の居るところへ行くのさ」

「列車に間に合う？」

「列車は無理だよ。外に出る時刻は決まっている。サマラシティは…」

俺は家の壁にかけてある時刻表を見つけ、サマラシティ行きの時間を調べた。

「え」と…ひと月に一回で、三日前に出発しているからね」

「ひと月も…先なの？」

「そんなに待てないだろ？こういう時にこそ使わなきゃ才能の持ち腐れってもんさ」

「え？」

「魔法さ。君の飛ぶ力に俺の…力をちょっとね、絡めたりしたら、きっと上手くいくと思うよ」

「…アーシュ、君って何者？」

「さあね。それより急いで着替えて出発する用意を。時間は待っていないよ。逢魔時はもうすぐだ」

クレドは制服にマントを羽織り、肩掛けカバンをひとつだけ持った。

俺たちは家の屋根へ昇った。

視界は広い方がいいからだ。

「本当は学園の鉄塔が一番いいんだが、時間が無いしね」

「アーシュ、これ」

「何？」

「ここに来る前にお母さんが僕にくれたものなんだ。ジョン・キーツって人の詩集だけど、眠れない時に何度も読んだんだ。だから…君にも読んで欲しいんだ」

「…ありがとう」

「僕のエゴなんだ。アーシュに忘れて欲しくないから」

「忘れないよ、クレド。ありがとう。代わりといつちゃんだけど、銀杏を煎ったんだ。君のお見舞いにつけてきたんだけど、向こうに着いたら食べてくれ」

クレドと同じような肩がけカバンから銀杏の入った紙袋を取り出し、クレドのカバンに入れてやった。

「お母さんにも食べさせてあげるといいよ。滋養にもなるから」
「…ありがとう」

頼りない太陽が隠れ、辺りは薄暗くどんよりと空気が重い。

「さあ、行こうか、クレド」

「アーシュ…本当に色々ありがとう。君に会えて良かった。ずっと友達でいてくれるかい？」

「勿論だよ。でもね、クレド。迷ったらいけないよ。言っただけの街から出るには意思の強さが比例してくるんだ。君の家族に会いたいと願う思いだけが、君を導く道になる。俺の事は向こうへ着い

てからでも思い出してくれ」

「泣いちゃうよ、僕…」

「クレドがいつか…大人になって、俺もこの街から出ることが出来たら、また会おうよ、ね」

「うん。本当はこの学校、気に入っていたんだ。一緒に卒業まで過ごしたかった。戻ってこれるなら戻りたいよ」

「…クレド。サマシティは狭間の街とも呼ぶんだ。迷いのある者はこの街に引きつけられる。だが、この街は留まる場所じゃないよ。特に君みたいな幸せな子は間違っても二度と来てはいけないよ、クレド」

「どうして？」

「怖ろしいからさ」

「でも面白かったよ。みんな優しくかった。いい人たちだった。楽しかったもの」

「客人にはそれなりのもてなしを…だね。もうひとつ教えよう。クレドはこの『天の王』を魔法学校と思ったみたいだけど、ここでは魔法を使える者は半分もない。だから俺たちは『アンタツチャブル』だ」

「…『触ることのできない』人？」

「そんな感じかな。さあ、おしゃべりはやめて、出発しなきゃ…クレド、手を取って」

「こう？」

俺はクレドと向かい合い、両手をそれぞれに握り合った。

「ゆっくり飛んで…俺が合図をしたら、手を離してくれ」

「うん」

マントが翻りクレドの身体がゆっくりと屋根から離れる。俺は両手に力を込める。能力をフル回転させ、クレドの行く道を探り当てる。

…大丈夫、初めてじゃない。セキレイを見送った時も俺がこうして彼をこの街から逃がしたんだ。

「さよなら、クレド。元気で」

「アーシュ…ありがとう」

「さあ、行って。君の居るべき場所へ」

俺はクレドの両手を離れた。彼の身体が黄昏の最後の輝きのよう
に明るくなり、そして一瞬にして消え去った。

夜の帳が降りた街は静かだった。

クレドから貰った詩集は、当の昔に読んでいた。

ぱらぱらと頁を捲ると、落ち葉が…あの時のだろう。モミジとイ
チヨウの落ち葉が挿んであった。

「こんな大事な物を忘れていきやがって…」

屋根の上でひとり、ちらちらと輝く星空を仰いだ。

さらばさらば私は飛び去る

紺碧に輝く天の彼方に…

さらば

さようなら、クレド…

この後、彼が無事に家族の元に着いたかどうかは確認していない。
あの日からもうじき三年が過ぎようとするが、クレドからの音沙
汰は無い。勿論こちらからも一切連絡していないから仕方が無い話
なんだが…

手元のあるジョン・キーツの詩集は取り合えず大事に持っている。
セキレイが帰ってきたら、この話をして彼に焼きもちを焼かせて
やろう。

詩集を本棚に戻し、ベッドに横になる。

ノックもせずにベルがいきなり部屋に入ってくる。

「アーシュ、おまえ、もう寝たのか？」

「…なんだよ。なんか用事かい」

「用事がないと来ちゃいけない？」

ベルが寝ている俺の身体に上に乗る、キスをする。俺も仕方なしにそれに応える。

「なに？いつもは嫌味のひとつでも言うクセに。今日は素直なんだね」

「そうだな…今夜は、ひとりで居たくない気分なんだ。だから、おまえとやりまくって天国に行きたい」

「バカだね、アーシュ。やりまくってもここでは天国には行けないさ。わかってるいるだろ？…ここは監獄だから」

「…救いも希望もない街か…」

「ただ官能（s e n s o）がある。俺達にはそれだけで充分じゃないのかい」

「確かに…」

ベルを抱きしめる。キスを貰う。身体を求める。

…今は居ない彼を思う。

官能の波に酔いしれながら、いつまでも…

君を想う…

you say you love

you say you love

「あ、の…アーシュさん」

「は？」

「これ」

クセ毛のアッシュブロンドがかなりの目線の下にあった。襟元の紺のリボンは中等科だ。十二か三か。それくらいだな。

その男子は赤いリボンの付いた四角の箱を、俺の前におずおずと差し出す。

「何？今日は俺の誕生日でもないんだけど」

「あ、ち、がうんです。僕、ずっと前からアーシュさんの事が好きで…自分で作った、ブローチなんです」

「あ、そ…俺、恋人いるから悪いけど君からの贈り物を貰えない。ゴメンね」

でけえ茶色の目からポロリと零れた涙が見えたが、気にも留めず俺は先を急いだ。

出ようとする玄関を阻むように、目の前にクラスの女子どもが立ちほだかった。

「アーシュ、後輩を泣かすなんて最低だわ」

「そうよ。あんなに必死に告白したのに、意地悪ね」

あの子をけしかけたのもこいつらの仕業か。手に持っているのは…小型カメラだ。恐ろし…

「アーシュったらいけずなんだから。あの子、今年のティンポオイだったのよ」

「知るか、ボケ」

「まあ、女の子をボケ呼ばわりなんて…失礼よ、アーシュ」

「胡散臭い女共、俺の前から消えうせろ」

「そんなんだから、噂されるのよ。黒髪アーシュはど変態ホモだつて」

「うっせーっ！」

肩掛けのカバンを振り回して校舎を後にした。

寄宿舎までは学校の裏校門を出て二分。

辿り着いた玄関先で俺は息をついた。

古いゴシック様式の学校は好きだけど、中に住んでる奴らはゴシックじゃない。

五歳から十七歳までの一括のインデペンデントスクールは寄宿舎は男子女子に分かれている。

校舎を中心の東西南北にそれぞれ男女別棟に別れ、表面上は平和な日常だ。

しかし学校内は男女共学。比率は七、三と女子が少ないにも関わらず、男子を敬うような素振りは全く無い。男子も愛嬌のない女子には興味もなく、年下の可愛い男子に目が行く。

よって、この学校で同性愛がはびこっても誰も厭わない。

自分の部屋に帰るとベルがベッドに寝そべって本を読んでいた。

「おまえ、なんで俺の部屋にいるんだよ」

「鍵かかってなかったから」

「…」

答えになつてねえだろ…

「なんだ？機嫌悪いな」

「女が…じゃなくて、後輩から告白されてそれを断ったらクラスの女子どもからぶち切られた」

「そりゃ…そうなるだろ。それじゃなくても、秋の学園祭でやったコスプレのおかげで俺もおまえも学校内じゃちよつとしたアイドル

扱いになつてんだぜ」

「ベルはその前からアイドル化してたじゃん」

「まあね」

それ以上話に乗るわけでもなく、ベルはまた手元の雑誌を読みふけている。

「なに、その本、面白いのか？」

俺はベルに近寄つて雑誌を覗く。

「あ？…ああ、読んでみる？」

ニヤリと笑つてベルがその雑誌を俺に渡す。
綺麗なカラーイラストの表紙を捲つてみた。

漫画だった…だ…は？

「…な、ん？」

目が点になった。

絵はどう見ても俺とベルのナリをして、吹きだしのコマは「アーシュ」「ベル」と呼び合い。口に出れないほどの淫らな行為が延々と…延々と…

「なんだあ？こりゃ…」

「今、学校内で一番売れている同人誌らしいぜ」
へへとベルは笑う。

笑い事じゃねえだろ…

「…おのれ、腐れ女子共っ！…人を好き勝手に欲望の捌け口にしがつてっ！ぶっ殺してやる」

俺はその雑誌をたたき付けた。裏表紙には俺とベル風な絵が抱き合つてこつちを見ている。

ムカつく…

それが事実であつても…ムカつく…

「そんなに怒る事ないだろ？事実は小説よりも奇なりって言つじやん」

「意味がちがうっ！大体、おまえは腹が立たないのか？こういう

風に弄ばれて」

「別に。あのね、他人の妄想まで俺がどうのこうの言うことでもないし。それに確かに誇張されているが、良く出来ている漫画だよ。それを読んで喜ぶ奴らがいるなら、別段怒ることないんじゃないか」「なんだ？その寛大なお心がけは…俺は嫌だね。人権侵害。これを作った奴を始末してやる」

「編集者はリリだけど」

「…」

ぐえ…リリか…最悪な女だ。しかしここは引き下がれない。

翌日、俺はリリを探し、雑誌を目の前に叩きつけてやった。

「どうしたの？アーシュ」

良く出来た子顔にストロベリーブロード、コバルトブルーの瞳は否が応でも目立つ存在だ。

女子の中でも相当な能力を持つと言われている。

仲良く手を組むか、敵対するか、無視するか…

今までは当たり触りも無く…やってこられたと思っていたが…

「俺をモデルにしてよくも勝手にあんな鬼畜漫画描きやがったな、リリ」

「ああ、これ？『you say you love』愛しているとあなたは言う。なかなか良く出来た表題でしょ？」

「良く出来たじゃねえよ。ロクでもないって話だ。よくまあ、レディともあるうものが恥ずかしげもなくあんなエロ漫画描けるもんだな。貴族の娘のクセに」

「貴族だって妄想ぐらいするわ」

「肖像権の侵害で訴えてやる」

「ばーか。ここを読め！『当雑誌の内容はすべてフィクションであり、実在する人物とは一切関係ありません』って書いてあるでしょ。だからね、いくらこれがあんたに似ててもあんたじゃないわけ。こ

の自意識過剰！なんか文句あるなら力で勝負してあげてもいいわよ、
A・レヴィ・クレメント」

俺の真の名前をリリは口にすると、一瞬にして緊張した空気が辺りを包んだ。

よほどの自我の持ち主じゃないと、我らの名前は呼んだ者を惹きつけてしまう。つまり影響されて我を見失う事にもなりかねないというわけだ。だからこそ、俺たちは愛称でしかお互いを呼び合わない。

だが、この場合、相手のケンカを買わないわけにはいかないだろう。

「L・ステファノ・セレスティナ。そうやって君の好き勝手に面白おかしくおもちゃにしてりゃいいさ。人の心を弄んでなんとも思わない人間は堕ちるしかない。君が望むなら俺は引かない」

俺たちはそういう道をつい選びがちになる者だ。リリにもわかっているはずだ。

リリは何ひとつ応えずに踵を返して、離れて行った。

ひと言謝ってくれりゃこっちだって気も落ち着きようもあるんだが、それさえ通じないのなら、関わるのは願い下げだ。

リリはこちらの人間だから、できるだけ仲違いはしなくなかったんだが。

昼食を取る為に俺を待ってくれてたベルが、いきりたつ俺を見て心配そうにする。

「リリとケンカしたのか？」

「うん」

「リリの取り巻き連中がおまえの態度に怒ってて、総スカンするって言ってたぜ」

「怒りたいのはこっちだろうが…」

「おまえねえ、もうすぐ俺達最終学年生になるんだからそれなりの大人になれよ。あいつらも籠の鳥なんだからさ、夢ぐらいみさせてやれ」

「早々悟った人間になれるかよ。それになんで俺とおまえなんだ？俺にはセキレイがいるのに：そくだ！良い事を思いついた！俺とセキレイを描いてもらおう」

「は？」

食堂でリリの姿を見つけ、近づいた。リリの取り巻きがきつと俺を睨む。

「リリさまに近づかないでよ。ならず者」

「五月蠅い。俺はリリに話があるの」

「何よ」

「あれ、あの本のことは目を瞑ってやるから、俺とセキレイを描いてくれ」

「はあ？セキレイ：あんたねえ、あの子がここから出て行って何年経つと思っているの？ルウの事なんか、殆どの生徒が覚えていないわよ」

「別に他の奴の事なんかどうでもいい。俺とセキレイが仲良くしてる漫画が読みたい」

「くだらない：バカらしくて話にもなんないわ。あんたの妄想はあんたの頭で片付けなさいよ」

リリは立ち上がって、周りの取り巻きにつこりと微笑んだ。

「さあ、皆さん、食後のお茶でもいかが。サロンへ行きましょうか」

「はい、お姉さま」

リリの後を十数人の女子がゾロゾロと付いていく。

：そっちの方が全く持って理解できない空間だよ。

「結局、リリには敵わなかったって事だね、アーシュ」

「うん。あの魔女は俺達でも支配できそうもないねえ」

「逆に支配されるかもな。しかし、おまえもおまえでむちゃくちゃな事を言う奴だなあ」

「何が？」

「セキレイ…ルウのことだよ。ルウを覚えているのは数人しかいないってわかってるだろ」

「だってさ…寂しいじゃん。ルウが帰ってきた時、みんなが覚えていなかったら可哀想だろ？」

「…可哀想なのはいつまでも待たされている俺達だと思うけどね」

ベルは俺のベッドを占領したまま、俺を見ている。

俺は黙ってパジャマに着替えた。

夜は長い。

セキレイのいない夜は…

翌日、朝礼も終わり、教室で戻って机に座っていると、リリが近づいてくる。

「ほら、コレ」

「え？」

俺の前にリリは仁王立ちになりながら、片手で紙袋を突き出した。「久しぶりにルウの事を思い出しながら描いたわ。これで肖像権の件はご破算ね」

そう言ったリリはくると背を向けて、自分の席に戻った。

袋の中には色紙が一枚。

セキレイの絵が描かれていた。

ここから出て行った14のセキレイではなく、俺達と変わらない16のセキレイがそこには居た。

驚いた事にその絵は夢の中で会うセキレイのままだ。

その絵姿に俺はうっとりとする。

「ありがとう！リリっ！」

俺はリリの背中に向かって思い切り叫んだ。

「バーカっ！」

真っ赤になったリリが俺に舌を出した。

その色紙は俺の机の上に大切に飾られている。

「you say you love」と、書き込まれた色紙。

この言葉が俺たちが誓い合った言葉だと、リリは知っていたのだろっか…。

> i 2 3 8 2 7 — 2 7 3 <

P r i v a t e K i n g d o m 1

> i 2 3 6 2 2 — 2 7 3 <

P r i v a t e K i n g d o m

その一

「本格的な冬の始まりを告げる雪が深夜には吹雪になるだろうと、天気予報をラジオで聞いていた。だから私は慌てて終わらない仕事を切り上げて、学校を出ようと校門へ向かった。

夜の校門の二重扉の間に、生まれたばかりの赤子を見つけたのは偶然だったのか……いや、必然だった。

粗末な朝の包みに包まれた赤子は雪の冷たさも微塵も感じないかのように、泣き声ひとつ上げなかった。

ただ静かに、私が見つけるのを待っていたかのようにさえ思えた。赤子を見つけた私が驚いてその包みを抱くと、その赤子は私をじっと見つめた。

プルシアンブルーに映る那由多の星々がその瞳の中に見えた。
たくいまれ

類稀なる美貌、目もくらむ存在、光輝く御子。どう呼んでいいのかわからない。

あまりの美しさに、誰もがこの子を妬んで、ともすれば害を与えるかもしれない……と、思った私は、金の粉を振りまいたようなプラチナの髪を褐色の猫毛に、類稀なる美貌をはぐらかす為に私の眼鏡をその赤子にかけさせてやった。

そしてこの類稀なる赤子に真なる名前を……与えた。即ち『アスタロト・レヴィ・クレセント』と……」

「……」

いい怪訝適当な法螺を何度も繰り返してんじゃねえっ！クソ爺っ！

学長であり、俺を拾ったトウエ・イエタルは説教の度に俺に昔話を聞かせる。それも大方作り話だ。毎回微妙に表現が違っているのを本人は気づいているんだろうか。

「親父さん。それももう百回も聞いてますっ！」

「親父さんじゃなくて学長です」

「はい、学長。拾ってくれたのはありがたいと思っています、学長が見つけてくれなかったら、赤子の俺はきっと凍え死んでいるでしょうから。でもですよ、いくら『類稀』でもわざわざ髪の色を変えたり、目も悪くないのに眼鏡かけさせたりするのって…ちよっとおかしくないんでしょうかねえ」

ぜってー法螺話だ。

「いや、君を適当に見せるためにはそれくらいの誤魔化しは必要だった。あのままで居て御覧なさい。君はそんなに自由にしてはいられまい。類稀な美しさが君を見るすべての者たちを狂わしてしまう。神話の中の傾国の美女の如くに…ふう…」

舌先も乾かぬうちに本人の目の前で溜息付くなよ…

「もう説教はいいです。ゴースト講師を殴ったのはこちらにも非があると認めます」

物理の追試の個人テストで、俺にセクハラをした講師の顔を殴り倒した。もちろん力は使わずに。

「セックスを強要することは如何せん新任の先生にしても許しがたい失態です。彼は即刻解雇です。しかし嘆かわしい限りだ。聖職につく者でありながら…やはり講師はこの街の出身者を選ぶべきでした。アーシュ、君には嫌な思いをさせて本当に悪かった…」

「学長が頭を下げる必要はありませんって。強要するやり方を間違えう愚者には身を持って知ること必要でしょう。こちら貞節を気取る気はないけれどね。段取りは大事でしょう。ただ欲望を満たせばいいというものでもない。それに俺はセックスは好きな奴とやり

たい性格たちなもので」

「アーシュ。まるでこの学校がセックスを奨励しているように言うんじゃないません」

性欲剥き出しの年頃の集まるこの場所で、抑制など無理な話。規制は必要だが厳しすぎるのは反乱の元。ある程度の規律を守れば、自由恋愛は至極当たり前。

強姦、暴力は許しがたいものだが、同時に消せぬ事態も多い。

しかし、差し出がましく取り締まる気もこちらには毛頭ない。降りかかる火の粉は勿論掃うが、他人の世話まで見る主義ではない。

「性の自由度は個人の理性による。その理性を学んでこそ、この『天の王』の生徒であるという証でしょう。勿論それなりの秩序は持つてしかるべき話です。この学校の自由さは維持されるべきだ」

「限度にもよるがね。ここは私立学校でもある。評判を落して、住民から敬遠されても困ります」

「粗暴な街と比べたら、ここはエデンの園ですよ。まあ、僕はここ
の居候の身だし、卒業までは模範生でいますからご心配なく」

「君を居候だと思ったことはないよ、アーシュ」

「…わかっています」

「君は随分と耐えてきた。私にはわかってるよ、アーシュ。もう半年したら、君はこの地から旅立つことになるだろう。自由の未来を君自身が選んで歩けることは喜ばしいことだ。だがね…どうやら私にはそれが…とても寂しく思えてしまっただよ。子供達を送り出すことが我が身の幸福と信じてきたんだがね…歳かな。近頃は感傷的になってしまう。教育者としては失格だね」

「学長：トウエ：親父どの、あなたはこれ以上ない程の最高の親ですよ。おかげさまで俺はひねくれ具合もサマになっている。」

「君は充分いい子だよ、アーシュ」

トウエは学長としては厳しくも秩序を守る番人として相応しいが、何故か俺には甘い。自らの手で拾った所為であると言っただが、親

という者はこういうものかと、思い知らされることも多い。

「明日は君と…ルウの誕生日だね。今年で最後になるかもしれないからね。うちでささやかな晚餐を開こうと思うが、どうかね？」

「勿論、喜んで伺います」

「ベル達も一緒に招待しよう」

「『ホーリー』の集いですね」

「そうだよ」

トウエは「他の生徒には秘密だよ」と口唇に人差し指を置いた。
勿論俺もそのつもりである。

サマシティに唯一存在する私学の寄宿学校「天の王」は、六歳から入学し初等科、中等科、高等科の十二学年を経て卒業となる。

俺は最終学年の十二年生。

ここを卒業した大抵の学生は大学への進学を希望する。

卒業証書をもらえればこの街からは出ることは自由。どこの街へ行こうが足枷は無い。

ただ俺みたいな身寄りもない奴はお金がないから、進学なんぞは望んでいない。援助金を貰ってまで大学に行きたいかというと…そうでもないしな。

卒業を半年に控えていても具体的な先行きはまだ決めていない。

「進学しろよ、アーシユ。おまえの大学費用ぐらい俺が出すから。なんならルウも一緒にでもかまわんよ。払いは出世払いでいい」

この貿易街一番の商社の跡継ぎであるベルは気前良く言ってくれるけれど、簡単に甘える気分ではない。それでなくても俺もセキレイもベルにはいつだって全面的に頼りきってしまうんだから。

「しかし…セキレイが卒業までに帰ってくるかどうか、危うくなっ

てきたなあ。卒業してもセキレイが帰ってこなかったら、俺はここで待つしかない。あいつの帰る場所はここしかないんだし……」

「アーシュ。俺が言うのもなんだが……卒業までにルウが変えてこなかったら、待つだけじゃなく、こちらから探しに行くって手もないこともない……と、思うんだ」

「ええっ！」

ベルの言葉に俺は驚愕した。だってセキレイを探しにこの街出るなんて……夢にも思いつかない話だった。

「ベルっ！おまえ、すげえ。そうだよな、そういう手もあるよなっ！」

「……やっぱりな。おまえさ、ルウと再会するには、ここで待つしかないって決めつけてるだろう。普通、色々思いつくはずだがね」

ベルは心から呆れた様子で肩を落して見せた。

「だって……ここで待つって、セキレイと約束したんだもの」

「そして歳を取り、想う奴とセックスもできないまま、欲望だけが積もりに積もってひとり寂しく死んでいくんだな」

「ぜってーヤダ！」

「じゃあ、具体的なルウ探しでも考える」

「……わかった、そうする」

「で」

「なに？」

「誕生日のプレゼント、何がいいんだ？」

「へ？……考えてない」

「全くね、いつだっておまえは自分のことなんで、これっぽっちも考えてないんだからな。大体今回の事件だって、免職ぐらいで済ませるはずもない。ああいう連中は他に行っても同じ事をやる。死を与えて地獄行きにした方が身のためだった」

「ベル。おまえが裁く者だとしても、おまえが手を下す相手じゃない。最もベルを怒らせたのは俺も謝る。心配させて悪かった」

「……嫌に、素直だね、アーシュ」

「こちらに隙があつたのは認める。あの講師はセキレイの目の色に似てたんで、じつと覗き込んでいたんだ。まさかその気になるとは思わなかったけどな」

「哀れ…我を信じる者、いと愛せり…気持ち悪…」

忌々しそうに吐く真似をするベルに同情する。

本気で心配させたのは本意じゃなかったからな。

「ベル、誕生日のプレゼントは貞操帯で結構。君が鍵を持っててくれ」

「…嘘だろ…」

下らないジョークに二人とも笑い転げた。

俺とセキレイの誕生日、十二月四日の夜、俺達『ホーリー』は学長トウエの自宅へ集まることになった。

『ホーリー』とは、『真の名』を持つ者の呼び名であり、同じ学年はセキレイを入れて五人だ。

後にも先にも同学年に五人もの『ホーリー』が居た例はこの学校が始まって以来一度も無い。

街の中心を流れる河川の土手をベルと歩く。

辺りは黄昏。この付近には電灯が無い。

トウエの自宅に着く頃には真っ暗闇になると思い、それぞれに手灯持参だ。

空気が冷たくなり吐く息が白くなったと思ったら、今年初めての雪がふわりと舞い落ちてくる。

ふと誰も居ない川原に目をやる。

あの日、あの川原で、俺はセキレイを見つけたんだ。

トウエが言う、俺を拾った時に感じた運命が必然なら、セキレイ

を見つけた俺もまた、逃れられない運命だったのだろうか……

Private Kingdom 2

その二

「天の王」の学校の敷地には保育所があった。

捨て子の俺を拾った学長は、俺をその保育所に預け、俺は初等科の寄宿舎に移るまで、この保育所で育てられた。

零才から五才までの子供たちが一緒に暮していたが、自分を入れても十数人ほどこしか居ない。

育児を担当する保育の先生はエヴァとアダのふたりだ。

俺はしっかり者のアダよりも、ちよつととぼけたエヴァに余計に甘えていた。

不思議な事に俺と同じ年の子供はおらず、上下共に仲良く遊んでいたが、どことなく仲間はずれのような気もしていた。

「天の王」はサマシティでは一番の規模を誇る施設であつたし、この街は名のとおり、通りすがりの者達が立ち寄る拠り所でもあつたから、経済的な…諸々の事情により子供を育てられない親達がつと置き去りにする事も多く、よく保育所にも新しい赤子や幼子がやって来た。が、ほとんどが二、三日の間に、居なくなる。

その理由を聞くと、「それはね、あの子には力が宿ってないからよ」と、エヴァが言う。

「力？」

「そう。でも心配しなくていいわ。あの子達の保育所はちゃんと用意されてあるから、大丈夫なのよ、アーシュ」

その時は意味がわからなかったが、宿る力、即ち、「魔力」を持つ者だけがこの「天の王」の保育所に居ることが出来、ノーマルな人間はここには不必要って話だ。

この街では、力を持たないノーマルな人間を「イルト」と呼び、力を持った人間を「アルト」と呼ぶ。

全人口の比率は八対二ほどで、この学校では半分がイルトで、残りの半分がアルトだ。

当たり前だがアルトの中でも差は大きい。

危険を予知したり、簡単な天気予報を当てたりするのは「ローアルト」、力が強くコントロールできるアルトは「ハイアルト」と呼ばれる。

俺は「真の名」を与えられるまではただの「ハイアルト」だったが、12の誕生日の時に与えられた名前のおかげで、誰もが恐れ羨む「ホーリー」となった。

さて、「セキレイ」の話をしようと思う。

あれは俺の四歳の誕生日だった。

俺の誕生日は学長が俺を拾った日、十二月四日だった。

その日、いつものように昼寝前にエヴァが俺達に物語を話し聞かせてくれた。

俺は誕生日だったから、特別にエヴァの膝の上に乗し、エヴァの一番近くで物語を聞くことが出来た。

エヴァはおっとりとした優しい性格だったが、絵本を読んだり、勝手な創作物語を作り、生き生きと話し聞かせることが上手かった。みんなエヴァの話に心踊り、熱心に耳を傾けたものだ。

その日の物語もまた、エヴァの作り話だった：

昔々の物語。

山里の平和な村に、ある日とんでもない事が起こってしまった。

今まで噴火したこともない里に続く近くの山が、突然噴火をし始めたのだ。

最初はゴゴゴという地鳴りから始まり、そのうち赤く燃え上がる噴煙が上がり始めた。

村人たちは騒ぎ、恐れ、一体どうしたらいいものかと頭を抱えた。

この村に住む一人の少年もまた、同じように心を痛めた。

父の居ない少年は身体の弱い母と二人暮らし。まだ生計の経てない少年に村人たちは何かと手助けをした。その温かい助けもあつて、今日まで何とか生きてこられたのだった。

村の為になにかできないものか…少年は夜も寝ずに考え続けた。母を寝かせ、その夜もひとり家の外に出て、井戸の近くに座り、噴火する山を恨めしく見つめていた。

そこへ一羽のハクセキレイが飛んできた。

少年の膝の上に止まり、少年の目をじっと見た…

「ねえ、エヴァ、鳥って夜は目が見えないよね？」

「え…勿論そうだけど、でもね、アーシュ。これはなんでもありの物語なの。だから超自然なことも簡単にありえる世界なのよ」

「へえ、そういうのって『都合のいい話』っていうんだろ？」

「そういう事言つと、先を話してあげないわよ」

「はい、お口はチャックだよ」

セキレイは言う。

「何をそんなに悲しんでいるの？」

「あの山さ」

セキレイは後ろを振り向き、火の粉を噴いている山を見た。

「あの山がどうしたのさ」

「このまま噴火を続けたらマグマが流れ出して、この山里を燃やしてしまうだろう。それを止める手立てはないだろうか」

「あるよ」

「ホントに？」

「あの噴火を止める術を私は知っている。けれど…君にそれができるだろうか」

「できる…いや、自信はないけれど、ぼくはどうしても村の人たちを助きたい。これまでぼくとお母さんを助けてくれた恩返しにぼくがやれることなら、なんだってやるんだ」

「そう、じゃあ、この村を助ける為に、君はあの山の火口まで行くしかないね」

「あの、山の？」

「そうだよ。急がないと本当に大きい噴火が始まってしまうかもしれないよ」

「わかった」

少年はすつくと立ち上がり、家へ戻った。

寝ている母親の枕元に「しばらく留守にするけど心配しないで」と、言う短い手紙を置いた。

引き出しから死んだ父の形見のダガーを取り出し、腰に差した。戸棚から明日のパンと水筒には水を入れて、準備万端。山に向かって走り出した。

山道は険しく、けもの道でなかなか先には進めない。

ツルに足を取られ、岩に滑り、何度も転んだ。

「ああ、ぼくには何の力もないんだ」
痛む足を押さえて少年は咽び泣いた。

「君の言う覚悟はそんなものなのかい。もう、村を助けることを諦めたのかい？」

いつの間にかあのセキレイが彼を見守っていた。

「違う。でもぼくの足が言うことを聞かない。それに行く道もない

山をどうやって登れるんだ」

「私が案内するよ。勿論、君にやる気があればだが」

目の前で羽ばたくセキレイを見てみると、なんだか勇気をもらえ
る気がした。

少年は立ち上がり、セキレイの案内に従って、山を登った。

途中、狼やカラスの大群に襲われたが、父の形見のダガーが彼を
守ってくれた。

二日目の夜を向かえ、少年は漸く火口の近くまで辿り着いた。

しかし少年は見るも耐えないほどの満身創痍だった。

少年はずっと彼を案内し続けたセキレイに言葉をかけた。

「やっと辿り着いた。さあ、これからどうすればこの噴火を止めら
れるんだい？」

「よくがんばったね。だけどこれからが大変なんだ。この噴火を止
めるには、ここまで辿り着いた人間が自らの身をこの火口の中へ投
じなければならんだよ」

「え……」

「誰だって死ぬのは怖いよね。でもあの村人達を助ける為だったら、
君の命ひとつは安いもんじゃないのかい」

少年は少しだけ考えた。自分の命が里の人を助けるのなら、この
身を投げて構わない。ただ、母親はきっと悲しむだろう。

だがそれも一時の事だった。少年はきりりと前を向くと火口に向
かって歩き出した。

「君はすばらしいね。きっと後世に村を助けた英雄として名を残す
ことだろう」

セキレイの言葉に少年は振り向いた。

「名前なんていらぬ。誰の記憶に残らなくていいんだ。ぼくは自
分のできることをやったままだよ。それよりセキレイ」

「…なに？」

「ありがとう。君が居なかったばくはなにも出来ずにただ泣くばかりだったろう。ぼくは今幸せだ。君のおかげだよ。ありがとう」
少年はこれまでセキレイが見たこともない程に美しい笑顔を彼に見せた。

そうして迷いもせずに燃えさかる火口へ身を投げた。

セキレイはその様子をじっと見つめていた。

しばらくするとセキレイは羽を広げ、空高く舞い上がった。

高く高くどこまでも舞い上がった。

そして一気に下降した。

吹き上がるマグマの中にセキレイは突っ込んでいく。

彼は燃えなかった。彼の強い魔力が彼の身体を包み、彼の白い羽がキラキラと光る。

セキレイは少年を探した。

少年の身体はとうに燃え尽き、灰さえも残ってはいなかった。

それでもセキレイは少年を探した。

そして彼は見つけた。少年の魂の欠片を。

セキレイはその欠片をくちばしで啄ばみ、そして飲み込んだ。

今度はまた急上昇だ。

閃光のようにセキレイは火口から飛び出した。

火口の溶岩は次第に弱まり、夜の山野を赤々と照らしていた悪魔も次第に闇に溶けていった。

セキレイはその様子を夜天から見下ろしていた。

山里の人々の歓声が、微かに空に響き渡った。

「見えるかい。君の望んだとおりに噴火はおさまった。聞こえるかい。村人達の喜びの声が…」

「ありがとう…セキレイ、ありがとう」

今はいない少年の声がセキレイには聞こえた気がした。

涙を知らないセキレイの瞳から涙が零れたのを、セキレイは不思議に思った。

そしてただ朝の光に向かって飛び続けた…

俺は号泣した、エヴァのエプロンが絞れるくらい泣いた。周りのみんなも残らず泣いていた。

あまりに泣くのでエヴァが困惑したぐらいだ。

それでも泣きつかれたのか、その日の昼寝は皆すぐにぐっすりと寝付いた。

俺は眠れなかった。

ひとり夜の空を飛び続けたセキレイの気持ちを考えると、とても眠れなかった。また村人を助ける為に自らを犠牲にした少年の勇氣に心が震え、目を閉じてても赤い火口が臉を焼き付けるようだった。俺はエヴァたちの目を盗んでベッドからこっそり抜け出し、近くの川原へ走った。

もしかしたらあのハクセキレイが、いるかもしれないと思ったのだ。

勿論、いやしない。

冷たい水の中を歩いてみたけどやっぱり見つからなかった。

夕刻が近づき辺りはどんよりと冷たく、雪もちらほらと舞っている。

「セキレイ、居ないかな」

川原の石を川面に投げつけていたら、対岸近くの川面が一時金色に輝いた。驚いた俺は浅い川の中をばしゃばしゃと濡れながら、その輝くものに近づいた。

近寄った時はもう輝いてはいなかったが、代わりに布切れが巻きついたものを見つけた。

なんとか布を引つ張って川岸まで運んだ俺は、その布をそつとはぐつてみた。

そこには黒いススで汚れた小さな子供がいた。

「ぼくのセキレイだ！」

俺はそう叫んで、その子の汚れた頬にキスをした。

Private Kingdom 3

その三、

誰かが忘れた草スキーのプラスチックのソリが川原に流されていた。

俺はそれを拾ってセキレイを乗せ、保育所まで運んだ。

運んだと言っても4歳の子供が引つ張っていくのだ。

陽は段々と暮れるし、雪は絶え間なく降るし、学校までの距離は二百メートルもなかったが相当な労力を使い果たしたはずだ。

だが、その時の俺は誰に力を借りる事もせず、俺だけでセキレイを助けたかった。

なんとか保育所まで運んだセキレイを、エヴァたちに見せた。

エヴァは驚き、すぐにセキレイの身体を抱き上げ、「早く温めなければ」と慌てふためいた。

アダは「どこで見つけたの?」とか「私達を呼んでくれればすぐに駆けつけたのに」と、俺を責めた。

俺は「呼びに来る間にセキレイが消えちゃったら嫌だ。だから僕が運んだんだ。だからセキレイは僕のものだ!」と叫んだ。

「セキレイ? あの子の名前?」

「そっだよ」

「あの子がそう言ったの?」

「違う。僕がそう決めたの!」

アダは訳が分らないと、呆れ顔をする。

身体をしっかりと温められたセキレイは、医務室のベッドに寝かされ、意識がないまま眠っていた。

湯を使った所為か、先程とはまるで違って綺麗な顔をしていた。

ススの被った髪はキラキラと光る薄い金色に輝き、肌の色は透き通るほどに白かった。耳の貝殻の巻き方が不思議に自分の好みだと思った。

まだ瞼の開かぬ瞳の色も、きつと青空の映った薄い水の色のようにだろっ…と俺は思った。

俺はセキレイの手をぎゅっと握り締め、その頬にキスをした。するとセキレイの目はゆっくりと開き、思ったとおりの瞳が俺を見つめた。

「セキレイ…」

俺は彼の名を呼んだ。

「セ…キ…レイ…」

「そっだよ。君の名前だ。僕はアーシュだよ」

「アー…シュ…」

「そう。君は僕が拾ったんだ。だからセキレイは僕が守るんだ」

「ま…もる…」

「そっだよ、セキレイ。僕は君が大好きだからね」

そう言うときセキレイは驚いたように目を大きく開け、そしてえも言われぬ無垢な顔でニコリと笑った。

「ボクも…アーシュが好き…」

「うん」

俺達は最初から分かっていた。

相手にとって自分が絶対の存在であるということ。

目が覚めたセキレイをエヴァたちがスープを飲ませながら、事情を聞いていた。

セキレイは自分の名前もどこから来たのかも覚えていないらしく、しきりに首を横に振っていた。

エヴァとアダは顔を見合わせ、困った顔をした。

「どうしましょう。許可も無くここに置いておくわけにもいかないし…」

「とにかく早く学長に連絡しなければならぬわ」

「そうね。この街の子かどうかも調べなきゃ……」

エヴァとアダの勝手な言葉に俺はうろたえた。

「待ってよ。セキレイは僕が拾ったんだから、僕のものだよっ！」

俺はエヴァのエプロンを引っ張った。エヴァは困惑しながら俺を膝に乗せた。

「アーシュ、ね、わかってるでしょ？ここに居ていいかどうかは学長先生がお決めになることなのよ」

「だって……」

俺はすでに泣いていた。

だって、ここに来た多くの子供たちはここに住む事を許されなかった。セキレイにもし「力」が無いと判断されたら……

「ね、まずはこの子を見てもらいましょう。アーシュの言うとおり、光に包まれて突然現れたのなら……アルトである可能性は大きいから」

「ホント？」

「ええ、そうよ。今から学長を呼びに行くわ。学長が来られたら、

アーシュはこの子を見つけた時の様子を詳しく話して頂戴ね」

「わかった」

それからエヴァは学長のトウエを呼び、セキレイに会わせた。

トウエはセキレイを見つめ、俺とセキレイに色々と質問をした。

セキレイに答えられることはなく、俺は必死でセキレイをここに置いてくれと懇願した。

「アーシュ、何故この子を『セキレイ』と、呼ぶんだい？」

「だって……セキレイはセキレイだよ」

「あ……すいません。アーシュは私の作り話を聞いて……それで影響されていると思います」

エヴァはバツが悪そうに学長に申し出た。

「違うよ、エヴァ。あのお話は大好きだけど、セキレイはセキレイだよ。僕のセキレイだよ」

「わかったよ、アーシュ。君がそう呼ぶのなら、この子は『セキレイ』なのだろう。だけどそれはアーシュが呼ぶべき名前だ。アーシュしか呼べない名前だ。だから、この子にもみんなが呼べる名が必要だよ、私が君に与えた名前のように。わかるね」

「うん」

「この子の名前は…『ルウ』。とても美しい名前だ。この子にはそう呼べる資格がある」

「…資格？」

「名前には意味があるということだ、アーシュ」

「じゃあ、セキレイは…ここに居てもいいの？」

「ああ、この子は…『ルウ』は強い力を持っているからね。ここに居ても構わない」

「ホント！」

「本当だよ」

「ありがとうっ！トウエ！」

俺は嬉しくて嬉しくて涙と鼻水を流しながら、トウエに抱きついた。

「勿論、本人の了解が必要だよ、アーシュ」

俺は我に返って、ベッドのセキレイを振り返った。

セキレイは身体を起したまま、俺とトウエのやり取りを少し緊張した面持ちで見つめていた。

「ルウ…君の名前だよ。」

「うん」

「君はここに居たいかね？」

「…アーシュと一緒に居たい」

「では、そうしなさい。君の家は今からここです」

「…家？」

「そうだよ、ルウ。アーシュも君と同じように、拾われてここに来たのだ。ここがルウとアーシュの家になるんだよ。わかるかい？」
「…わか、ります…ありがとう」

セキレイはやっとほっとした面持ちでトウエにお礼を言い、俺に向かつてニツコリと笑う。

そんなセキレイが可愛くて嬉しくて俺は「セキレイ、大好き」と笑い、やせっぱちの身体をぎゅっと抱きしめるのだった。

その日から、俺とセキレイは無二の親友になり、豊かな番いに、そして永遠の恋人になることを誓った。

食事をするのも遊ぶのも勉強するのも風呂に入るのも一緒だった。

俺はこの保育所で初めて心を寄せられる相手を得て、毎日が楽しくて仕方なかった。

ここでの暮らしが初めてのセキレイは、何もするにも俺の真似をした。

とことこと俺の後ろを付いてくるセキレイが愛おしかった。

手を繋ぐと嬉しそうに笑ってくれた。

夜になると俺達是一緒ひとつのベッドに寝る。お互いの体温を感じて良い夢を見る。

セキレイの肌はいつも夏の木立に香る合歡の木の花の甘い香りがあった。

そう言つと、セキレイは「アーシュもするよ。凄く良い匂い」

「へえ…どんな？」

「え…と…あのね、草…あれ、エヴァが良く飲んでいるお茶の匂い」

エヴァは薄荷のハーブティが好きだった。

「薄荷草の匂い？」

「うん。アーシュの匂いって凄く好き」

「僕もセキレイが好きだよ」

俺たちはしっかりと抱き合って寝た。

アダは教育上良くないと渋い顔をしたが、エヴァは笑って許した。基本的にアルトは孤独を好む。他人を自分が決めたテリトリー内に簡単に入れさせない。勿論子供だから甘えもするし、一緒に遊ぶ。だが、俺達みたいに始終一緒に居るってことは、他の子供たちには無かった。

魔法使いのプライドの高さは変な形で現れる…と、後になってよく俺はあざ笑ったものだ。

常にくっ付いている俺とセキレイを見て、気色悪いと罵る奴はノーマルなイルトであり、大抵のアルトは無視をしていた。だが、俺は知っていた。本当はあいつらだって俺達が羨ましくて仕方ないんだ、と。

俺とセキレイが笑いあい、遊ぶ姿を見て「明け初めの光と星空のようだよ」と、エヴァはいつもうつとりと溜息を付いていた。

俺達はすくすくと育ち、保育所から同じ敷地内の学校の寄宿舎に移る年頃になった。

保育所を出る日、最後の記念にと、俺とセキレイは保育所の裏の楠木の枝に二人で作った秘密基地に登った。

ふたりで何ヶ月もかけ、板やレンガで作った小さな部屋だ。日がな一日ここで本を読んだり、一晩中流星を追っかけたり…エヴァたちから怒られるようなこともこっそり行ってきた秘密の場所だった。

「壊すのは少し残念だね」

「そのままにしておくのも拙いだろう。小さな子がここを使って怪我でもされちゃ気の毒だからね」

「そうだね」

「新しい場所を見つけて、また基地を作ればいいさ。セキレイが居れば、どこでも作れる」

「ボクもアーシュが居れば、そこが秘密基地だよ」

顔を見合わせふたりはニコリと笑い、キスをした。

「大好きだよ、セキレイ」

「ボクも、大好き」

そして、俺達は新しい二人の王国を作る為に、その秘密基地の歪んだドアを取り外した。

天使の楽園、悪魔の詩 1（前書き）

三人目の主人公ベル視点のお話。

天使の楽園、悪魔の詩 1

> i 2 5 0 8 2 — 2 7 3 <

その一

俺がベルという名前を貰ったのはこの「天の王」学園に入学した6歳の時であり、それまではクリストファーと呼ばれていた。

俺の父、スチュワート・セイヴァリは若い頃から名うての実業家であった。

貿易会社「セイヴァリカンパニー」を立ち上げ、手段を選ばない商法でみるみるうちにサマシティーの巨大な会社に成長させた。

彼はこの街の覇者であり、人々は彼を「黒い孔雀」とも呼んでいる。

スチュワートは有り余る金をぶら下げ、この街の貴族の娘に片っ端から求婚した。

彼は貴族の肩書きが欲しかった。それがあれば他所との取引が有利になると思い込んでいた。

彼に必要なのは愛ではなく金と名誉欲だった。

貴族なんてものはプライドばかり高く、儲け話に出資しても大体が失敗し頭を抱えることになる。

俺の母親の実家であるスタンリー家も借金に追われ、仕方なく一人娘のナタリーが父へ嫁ぐことになった。おかげでスタンリー家は贅沢三昧に放蕩したが、生贄の身になった母は勿論憤慨である。

父と母が愛情を通わせることは一度もなかったであろう。

俺はこういう両親の間に生まれた。

初めからその出生を怪しまれたのは当たり前だ。

父も女遊びには堅気ではなく、貴族はそれについては常識などあったものではない。

16で嫁いだ母であったが、勿論処女ではなかった。

母の弟であるエドワード伯父は幼い俺に、母と密通していたと自慢していたくらいだ。

だから俺はある時期まで、この伯父が俺の本当の父ではないのだろつかと、いつも疑っていた。

そういうわけで幼い頃から俺は両親から抱かれたことも愛情のこもったキスを受けた事もない。

そういうものだと思っていたから、こちらも今更責める事もない。ただ寂しくはあった。

多くのメイドの一人であるエリナはこの街の生まれではなく、南からの労働移民だった。

この北の街では余り見慣れぬ浅黒い肌とエキゾチックな面差しは混血のメスティーソであり、俺は彼女がお気に入りだった。

彼女はハウスメイドであり、始終世話をしてくれるわけでもなかったが、俺はこっそり彼女を呼んで、お菓子をあげたりしていた。

エリナは教養はなかったが充分に賢く、また唯一俺を心から気にかけてくれる人間だった。

優しさや愛情からかけ離れたこの家で、なんとかマトモな人間でいられたのはこのエリナが俺を見守ってくれたからだろう。

俺が生まれて間もない頃、高名な占い師が俺を見た。

何を見るかという「魔の力」を持っているかどうかである。それはこの街では重要な意味を持った。

確かにこの街は魔法使いの市民権が与えられてはいたが、ノーマルな人間達は彼らの力をどうしても恐れてしまう。

「力」があっても魔法使いは彼らを傷つけたりしない。魔法使い

は人間を助ける為に存在する、と、謳う街の条例は迫害されかねない魔法使いたちの生き残れる許しだったのだ。

街中では魔法使いは人間に使わされる存在だった。

占い師は赤ん坊の俺を見てこう言った。

「この子には『力』がある」

ここで周りの者達は落胆の声をあげたと言う。

「しかし、この子の力は恐れぬに足りん。この家の繁栄をもたらすことである…」

彼女は大嘘を付いたのだ。

俺を救う為に。

貴族の子息は貴族しか通えない学校に入学する。

普通の子供たちとは一線を隔てて育てるのが貴族流らしい。

俺は「力」を持つ「アルト」だから、「アルト」にうつてつげと言われる「天の王」寄宿学校へ入学した。

実を言うと俺は家から離れられるのが嬉しくて、入学する日を今か今かと待ちわびていたのだ。

また自分以外の同じ歳が集まる学校という組織は、憧れであった。入学前「天の王」の学長と面談の際、俺は学長から「ベル」と言う名前をもらった。

「ここでは貴族もお金持ちも…イルトもアルトも関係なく、生徒は平等です。君が今まで呼ばれていた名前は君の家の物だが、ここでは君に相応しい名前で暮していくことになります。よろしいですか？ベル」

なんのことかさっぱりだったが俺にはどうでも良かった。

もともと「クリストファー（救い主）」と、呼ばれることは少なかった。

「ベル」となった俺は学園での生活を楽しんだ。

とりわけ初めての寄宿生活はとまどいながらも、毎日が楽しくて仕方なかった。

同じ年の子達が6人部屋で過ごす。ここでは貴族もノーマルも関係ない。

感情がぶつかり合っても決して傷つかない。

まるで冒険の海へ船出するみたいに毎晩大騒ぎだった。

授業もなにもかもが新鮮で、知らない知識を得る喜びは、あの意味もなく豪華でただっ広い家の何も得られない空間で過ごした空しさを払拭するようだった。

週末、家に帰らなければならなかったが、それが近づく金曜になると俺は憂鬱で仕方なかった。

帰る家のない幾らかの友人達が羨ましくて仕方なかった。

家に帰っても家族が待っているわけではなかった。

父は滅多な事では家に帰ってくることはなく、母はパーティと貴族のサロンに入り浸りで、俺の事など眼中になかった。

学校の生活を知ってしまった俺は、ひとりで食べる食卓の貧しさに暗い気持ちになった。

日曜の夕方になると、4キロの道のりを急いで、寄宿舎に帰る。

俺の居場所はここだと思った。

決して贅沢ではないけれど、みんなと食べる食堂の食事はすべて美味しかった。

銀の食器のかわりに白い陶磁器の皿に載る野菜と煮豆が、俺にはなんだか心休まるもので、口にしながら俺の求めていたのはこれだったのではないかと、思わず涙が込み上げたほどだった。

学校の生活にも慣れ、入学して半年も経った頃、俺は隣のクラスに気になるふたり組みを見つけた。

そのふたりは「アーシュ」と「ルウ」と言い、いつもまるで双子のようにくつついている。

見てくれは夜と朝のように違っていているのに、仕草はまるで同じで、思わず噴出してしまふほどだ。

彼らは幸せを体現しているかのように、お互いを見つめあい笑いあう。

何故だかわからない感情が渦巻いて、俺は彼らから眼が離せなくなってしまうていた。

俺は幼い感情を満たす為に彼らの友人になりたいと望んでいた。彼らも俺と同じように「アルト」だと知り、その感情は益々膨らんだ。

彼らに近づく方法を俺はずっと考え続けていた。

二年生になったばかりの夏が過ぎ去った午後だった。

体育館の後ろの雑木林の手前、尖塔に登る螺旋階段の下、目立たぬ袋小路がある。

3階の廊下から風で飛ばされた麦わら帽子を探しに雑木林へ行く途中だった。

何人かの穏やかではない声が聞こえてきた。

塀に隠れて様子を伺うと、あのふたりの片割れ、金髪の方、「ルウ」が居た。

ルウは五年生の男子から「泥棒ネコ」と攻め立てられていた。

「ロッカーのこいつのバックから財布を盗んだのはおまえだな」

「違うよ」

「見ている奴もいるんだよ」

「おまえ、二年のくせに大胆な事するなあ」

「さすがに保育所上がりの奴はまともじゃない。アルトだからってでかい態度しやがって」

散々な言われようもルウは全く動じていないように見えた。

「こいつ、全然反省してねえ」

「痛い目に合わないとかわかんねえみたいだな」

背の高いひとりがルウの胸倉を掴んで、拳を突き上げた。

俺は慌てて飛び出した。

「やめろよっ！」

奴らは一斉に俺を振り返った。

俺だってケンカの経験もなければ、無謀な争いなんかしたくない。正直怖くて仕方なかった。けれど、ここで引き下がるわけにもいかない。

「下級生を大勢で責めるなんて卑怯だろ」

「なんだ、お金持ちのクリスか」

「ここではベルだ」

「そうだったな。おまえに関係ある話かよ。こいつは金を盗んだ。だからとつちめてやる。なにか間違いがあるのか？」

「…お、金なら…僕が返すから、その子に手を出さないでよ」

俺の言葉に彼らは顔を見合わせた。

「ま、おまえがこいつの代わりに金を返してくれるなら、許してやるよ」

「ありがとう」

「その代わり、二倍にしてもらっ。それくらい持つてるだろ？ 街一番の成金息子なんだから」

俺は黙ってそいつらの言う金額を支払った。

五年生の姿が消えるのを待って、俺は壁に凭れてじっとしているルウに近づいた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

俺の言葉にルウは、ふっと笑った。

彼の顔には緊張感は見えない。

「ざんね〜ん」

突然上の方から声が聞こえた。

螺旋階段から顔を覗かせたのは…褐色の髪をしたアーシュだった。

「う〜ん、いいところまで行っただけだね」

「まさかあそこで助けが入るとは…というかとんだ邪魔者出現。さすがに予測不可能だ」

カンカンと階段を下りる靴の響かせたアーシュがルウの傍に立った。

二人は並んで俺をジロリと見つめた。

俺は何のことかまるでわからない。

「でもさ、お金まで出させちゃって悪かったね」

「盗った分を返してやれよ」

「うん」

ルウはズボンのポケットから財布を出した。

俺は彼らのわけのわからぬ話と出された財布に言葉も出てこない。

結局こいつらが犯人で、俺はピエロを演じたわけだ。

差し出された財布を受け取るはずもないだろう。

俺は空しくなっただけその財布を叩き落した。

「お金なんていらない。僕は…君達と友達になりたかった。だから助けたかったんだ」

アーシュとルウは目を見張って感嘆の声をあげた。

「ベル、君ってすごい良い奴だね」

「ホント、おい、ベルを見習えよ。こういう子がまともな魔法使いになれるんだよ」

「…一体何のことだよ」

俺はなんの話か全くわからない。

「あのね、ベル。僕たち『力』を試したかっただけの。ほら、せいとーばうえいなら魔力を使っても怒られない、だろ？」

「はあ？」

「だって宝のもちぐされじゃないか。せっかく持っている『力』だもん。たまには使ってみたって思わない？」

アーシュは引き込まれそうな深い藍色の瞳を見開いて俺を見つけた。

「勿論、酷いことにはならないように気をつけるけど、ね」

ウィンクしたルウは屈託のない笑顔を見せた。

一瞬にして俺は彼らの虜になったのだ。

> i 2 5 0 8 3 — 2 7 3 <

天使の樂園、悪魔の詩 2

その二

この件をきっかけに、アーシュとルウは俺を友達として認めてくれた。

それまでは俺の事など視界にも及ばなかったふたりの有様が一変した。

彼らは一旦心を許してしまうと、新参者の俺にさえ一切の隠し事はしなかった。

どうやってここで育ったのかを面白おかしく話し続けた。

俺もまた自分のお家の事情って奴を詳しく話し聞かせてやった。

彼らは想像もできない別世界だと首を傾げた。

「でも両親がいても愛してくれないのは悲しいね。僕らは初めからいないから仕方ないけどさ。ベルはよく耐えてるよ。えらいぞ」

「えらいよ、ベル」

「そんなことはないけど…」

こんなことで褒めてもらったことがないから、照れてしまう。

「貴族やブルジョワってちょっと懂れたりもしてたけど、少しくらい窮屈でもこちらの方がマシってことだね」

「僕にとってはここは樂園さ。それに天使もいるし」

「え？」

「君達のこと」

俺の言葉にアーシュとルウは腹をかかえて笑い出した。

結構本気で言っただけだったのだけど…

勿論彼らは微笑むだけの天使ではなかった。

規律を潜り抜けては「力」を試し、他愛のないいたずらはしょっちゅうだった。

中でも校内のあちらこちらを探検することは極めつけの冒険だった。

古いこの学校のあらゆる隠し扉を開いては、「誰にも内緒だよ」と、人差し指を口に当てて、俺を部屋の中に導く。

俺にとつてまさに「秘密の花園」であり、彼らの言う「秘密基地」の一員に加わった喜びでこの上もなく幸せだった。

それにふたりを知っていく毎、彼らの屈託のなさに感心した。、アーシユもルウも別段孤立しているわけではなく、誰とでもわけへだてなく交流する。付き合いは俺よりも彼らの方がかなりポジティブだ。

それまで高慢な貴族の子息、なにかと黒い噂の絶えない「セイヴアリカンパニー」の跡取りと見られていた俺は、表面上は仲良くしていても、心から打ち解けられる友人はいなかった。だが、アーシユとルウのおかげで、それまで遠巻きに見ているだけだった貴族や資産家の子息達以外の生徒が俺に声をかけてくれるようになった。

接してみると上流階級の奴らよりも彼らの方が、遥かに賢く、博識であった。

特にアルトの子は歳若いながらも色々なことを考えている。

彼らは俺を珍しいと言う。

「貴族で資産家の跡取り息子なんて、まともじゃないと思っていたけど、ベルは良いアルトだ。尊敬するよ」と、あまり付き合いに積極的ではないハイアルトたちも友情の握手を求めた。

俺は初めて自分の価値を認められた気がして、自分が「ハイアルト」で良かったと、また良い魔法使いになる為に、この学校で懸命に学んでいこうと心に強く願った。

「ベルは良い人すぎるよね」

「まあ、突然変異だね。僕達と似かよっている。ああ、その長い

板を取ってくれ、セキレイ」

「わかった」

アーシュはルウのことを何故か「セキレイ」と呼ぶ。その意味を尋ねたら「僕はアーシュに拾われたの。、その時の記憶がなかった僕を、アーシュは『セキレイ』と呼んだ。だからアーシュにとって僕は『セキレイ』なんだ」

よく判らなかったが、これは独占欲を表しているのではないかと、後になって思ったものだ。

アーシュはルウを自分だけのものとして「セキレイ」と呼び、ルウは「セキレイ」と呼ばれることで、アーシュのものでいられると安心する。

「ベル、ほら、しつかり板を持っていってくれよ。釘が打てないだろ」

「ああ、悪い」

俺達は雑木林の奥にあるデカイ楠木の枝の上に小さな「秘密基地」を作っている。

「できた！」

嵐が吹けばすぐにでも飛んでいきそうな掘っ立て小屋だ。

俺達三人が腰を屈めてやっと入れる狭い家だ。

「前の基地よりマシだが…三人が入るにはきつそう」

「仕方ないよ、俺達は成長期だしな。三年もてばいいんだよ。どうせ中等科に行けば、校舎も変わるんだしさ」

「三年も持ちやしないさ」

「セキレイ…出来上がったばかりでテンションが下がる事言っなよ。さあ、入ってみようぜ」

アーシュを先頭にそのクソ狭い「秘密基地」へ膝を折りながら進んでいく。

「なかなかいいじゃん」

「ああ、思ったよりもずつといい」

「でも…背比べはできないね」

「まあ、カードゲームぐらいなら大丈夫」

「それと…夜天を見るときは便利だ」

三人並んで寝そべりながら 天上を見上げた。隙間の開いた屋根からは青空が覗いている。

右側にアーシュ、左にルウがいる。

他になにも望めないくらい俺は幸せだと感じていた。

「ずっとこのままでもいいね」

心に浮かんだ言葉を口にしてしまった。口に出した後、ふたりに笑われるかもしれないと恥ずかしくなる。

だが、ふたりは笑わなかった。

アーシュの手が俺の右手を繋ぐ。同時に左手にはルウの手が繋がった。

「ずっと一緒さ。大人になってもずっと仲良し三人組でいよう」

「僕も賛成だ」

堪えていた涙が流れる。

ふたりは俺の両頬にキスをした。

交互に顔を見合わせ「ありがとう」と、言った。

微笑むふたりはこだまのように「ありがとう」と応えるのだ。

十歳の夏、四年生を終え五年生になる長い夏季休暇は辛い思いをした。

毎年、この時期は憂鬱になる。

学校が休日ならば当たり前自宅に帰らなきゃならない。

誰も待っていない家へ帰ってもつまらないだけだった。

俺を可愛がってくれたエリナも、俺が知らぬ間にこの家から居な

くなった。

理由を聞くと、母の宝石を盗んだと言う。彼女に限って言えばそれはありえないと思った。

エリナは俺の知る限り物欲に乏しかった。

「騙されてはいけませんよ。坊ちやま。ああいう移民は帰る家がないので、かかる責任を負わなくていい。何もしても自分が罰せられればそれで終わりです。私どもはそうは参りません。この家やご主人様を守るという崇高な使命があるのです。ここで働く事は自分の身を投じて尽くすということです」

古くから勤めるバトラーの言葉はちつとも俺の心に響かなかった。結局何を言っても求めても、俺がこの家で得られるものは無いに等しい。

その年は休日の方を母の実家であるスタンリー家で初めて過ごすことになった。

街の中心から離れた郊外にその大邸宅はある。

車で三時間ほど走ると、咽かな田園風景が続ぎ、次第に白樺林が見えてくる。

その木立を過ぎるとに遠くの山々を背景にした瀟洒な屋敷が現れる。

アラベスク文様の門を通りぬけ、両側に並んだ灌木の間に鮮やかに咲く花壇の花々を眺めながら、車は玄関アーチへと続く。

重い扉の奥は広いフロアにスタンリー家の紋章をあしらった、百合とアカンサスの葉をデザインされた毛足の長い絨毯が敷き詰められていた。

大理石の床と黒檀やマホガニーを存分に使った家具や内装も、セイヴアリ家とは違って上品で嫌味がない。

すべてが行き届き、安らぎさえ感じた。

さすがに古き歴史を持つ貴族だと、また自分がその血を受け継いでいる事に少し誇りを持った。

広間から続くコテージガーデンには彫刻や噴水、人工で作られた滝や池など、子供にとっては厭きのこない遊び場で、アーシュヤルウを連れてこれたらと何度も思った。

広間では昼間はサロン、夜はパーティが幾度と無く開かれ、母の姿もちらりと見えた。

母は俺を見ては、目を細めた。

「まあ、クリストファーはあの人に似ないで綺麗に育ったのね。恥ずかしくない容貌だわ。これならスタンリー家に恥じない跡目と言うものでしょう」と、俺にキスをくれた。滅多なことじゃなかったから俺は驚いて後ずさってしまった。

赤く頬を染めた俺を笑い、母は去っていく。

きつい香水の匂いだった。それでも、母のキスが嬉しかった。

主である叔父のエドワードは、屋敷の中ではよく見かけ、俺を見ると指を立てウィンクをしてくれた。

ひとりで寂しくないようにと食事もたまに付き合ってくれた。

彼は言う。

「クリストファーは私に良く似ているね」

確かに俺の容貌は母でも父でもなく、このエドワード叔父に酷似していた。

だから使用人だけではなく、サロンに来るお客たちも俺の顔を見ては、エドワードと母に意味深な視線を投げかけるのだ。

「甥であるのだから似ていてもおかしくあるまいが、これだけ似ていると、私も自分で問いたくなるね。君は私の息子かい？」

そう言われても俺は笑うしかない。

ある夕食の晩、他愛のない学校の話をしながらエドワードは俺に尋ねた。

「クリストファーは幾つになる」

「十歳です」

「ふゝん、それじゃあ、セックスは経験した？」

俺は思わず口に運んだスープを噴いた。

「な、ないです」

「じゃあ、私が教えてあげようか」

「え？」

「スタンリー家主直々に相手をしてやるよ。どっちにしる、君は私の後を継ぎ、この家の当主となるのだから」

「僕が何故この家を継ぐの？叔父様が結婚したら、そのご子息が後を継ぐのでしょうか？」

この時、エドワードは母とひとつ違いの27歳だった。この歳の貴族なら大方の結婚している。

「私は結婚などしない。ひとりの女と一生暮すなんて考えるだけでぞつとする。恋愛は自由気ままが一番良い。それに他者にこの家の財産を分け与えようとは思わないのでね。私は好きに遊んで贅沢三昧させてもらい、そして充分に放蕩したら、庭の池にでも頭から飛び込んで死んでやるのさ。そして残された物すべてをクリスに譲ってやろう。どうだい？ステキな人生プランだろう」

「…はあ」

これでは彼がケチなのか、度量が大きいのか、ただのバカなのか分からない。

しかし、俺はこういう叔父が嫌いではなかった。

その夜、エドワードが俺の寢所に忍び込んだ。

ベッドに寝ていた俺の横にいつのまにか入り込んできたのだ。

夢心地でいた俺も流石に驚いて、彼の所業を諷めた。

「エドワード、何用ですか？」

「ひとりじゃ寂しいだろうから添い寝をしてやろう」

「いいません」

「じゃあセックスの指導だ。君が本当に初めてかどうかも気になるところだ」

手を払う俺の意思を無視したエドワードは、俺の身体を抱え込んだ。間もなく寝着のシャツの裾の中に手を滑り込ませてくる。

「ぼ、ぼくはまだ十歳ですよ。セ、ックスなんてまだ早い」

「私は8つの時に叔父から抱かれた」

「…変態ですね」

「そういう血族なら仕方ない。君も慣れろ」

身体を撫でるエドワードの指先は思ったよりも不快ではなかった。

「…嫌です。僕は…このスタンリー家を継ぐ気はありません」

「じゃあ、あの趣味の悪いカンパニーの社長になるのかい？」

「…」

「君の父親だつてあくどい事には事欠かない最低な人間だぜ。クリスはそういう人間になりたいのかい？」

「どっちも…になりたいとは思わない」

「ひとりじゃ生きていけないくせに我儘なんて言うものじゃない。

君が優雅に学校生活を楽しんでいられるのはお金と名誉があるからじゃないか」

「…」

「少しくらい私を楽しませろ、クリストファー」

「だって…」

少し抵抗して身体を押しやる。エドワードは俺の両手を縛り上げた。

「あまり抵抗するなよ」

「だって、怖いよ、エドワード」

「怖くはないさ。まあ、色々なプレイで楽しむ奴も貴族には多いけれど、私はベッドでも紳士だよ」

思わず涙ぐむ俺を、エドワードは優しく耳元で囁いた。

「泣きなさんな、クリス。出来る限り優しくする。そりゃ少しばかりは痛いだろうが、大人を踏み出す一歩として考えなさい。君がここで覚えることは君にとって損ばかりではないよ…きっとね」

エドワードの青い瞳には、泣きそうな俺の顔が映っていた。

それはきっとエドワードの子供の記憶かもしれないと、感じていた。

だから、俺は彼の求めに応じた。

抵抗しても逃れられない運命なら、初めから諦める方が、傷は少なくて済む。

天使の樂園、悪魔の詩 3

その三、

その日から毎晩、エドワードは俺を抱いた。

最初は痛いだけだった感覚が次第に心地良くなってくるのと比例して、自分の身体が汚泥の中に埋もれていくように感じた。

もとより…

「貴族に生まれたのがおまえの運命さ。嘆くより慣れろだよ、クリストファー。運命を受け入れて楽しむことだ」と、エドワードは言う。

ぐったりと沈み込む俺の身体をエドワードは軽々と抱き上げて浴室へ連れて行く。

シャボンに塗れたバスタブのお湯にふたりで入るのも、くやしいが悪い気分じゃない。

今まで誰かにこんなに構ってもらったことはなかった。

俺を愛してくれているのかはわからないが、エドワードは俺を気に入ってくれていた。

「どうだい？随分慣れた様だけど、セックスを楽しめているかい？」

「…思ったほど楽しくはない」

エドワードは楽しそうにククと笑う。

「だがね、君。官能という力を知っているかい？」

「…官能の力？」

「さて、面白い話をしよう…」

エドワードはそう言つと、俺を後ろ抱きにして自分の腹に引き寄せた。

「君はアルト、即ち『力』を持って生まれてきただろう」
「…うん」

「力を持たない一般人はその力を恐れる余りに禍々しいものと見るが、そうとも言えない。事実、多くのイルトは良きアルトの力を借りて、運を引き寄せ莫大な財力や名誉を手に入れている。わかるかい？魔法使いの信頼を得ることはこの街で豊かに暮らす者にとってとても重要なことなんだ」

「アルトは力を持っているのに何故、イルトに服従しなきゃならなの？」

「服従じゃない。信頼って言ったろ？つまりは愛情とも言える。ふたりの間に必要なのは力の源だ」

「みなもと？」

「つまり、官能さ」

「意味がわからない」

「クリスが本物のアルトなら、そのうちに分かるようになる。まあ、簡単に言うなら、セックスを知ることが力になると覚えておけばいいよ」

さっきから指で俺をいたぶっているエドワードはそれだけでは飽き足らず、俺の中に入りこんだ。

口唇を噛み締める俺を手の平で撫でる。

「怖がるな。だた感じる。官能を力にしろ。お前は強くなれる」

絡まった泡塗れの手の平の中に、僅かに赤い炎が灯るのが見えた。

「…おまえはいい子だよ、クリストファー。いい子にしていれば愛してやるよ」

その言葉が幾つかの条件を荷つてのことだとしても、俺はエドワードを嫌いにはなれなかった。

エドワードは貴族の友人達が集まる夜の宴に、毎週末俺を連れて行った。

勿論この屋敷でもたびたび開かれた。

淡いランプの灯が照る豪華な調度品に囲まれた一室に色とりどり

のカウチが並ぶ。

人目を気にせず誰とでもまぐわう様式らしい。

麝香の甘い香りが当たり一面に漂い、その気が無くても簡単に妖しい気分になり得た。

勿論性交を楽しむ為に用意されたものであったが、当時10歳だった俺よりも小さい子が慣れた風に貴族の青年達の足の間に顔を埋めているのを見てこちらは興ざめした。

貴族独特の観念は最低限持ち合わせているらしく、狂乱とまではいかない様も、見慣れないこちらとしてはマトモな光景ではなかった。

エドワードは俺を引き寄せ、耳元で呟く。

「簡単に膝を折るな。見縊られるな。一等上手い奴を選べ」

そうは言っても俺にはどうしていいかさえわからない。

取り敢えず同じ年頃の子を誘い、ロココ調のカウチに身体を寄せ合ってみる。

彼は腰に薄い絹を巻いただけの裸同然の恰好でいた。

彼は（何故かは知らないが、大抵のサロンは同性だけで集まる）硝子ビンを持ち、そこからホースの付いたマウスピースを俺に差し出した。

「これは何？」

「水煙管シーシャですよ。ゆっくりと吸ってみて下さい。気持ちいいから言われるままに吸い込んだ。」

薄荷の香りが肺に広がり、何ともいえない高揚感に包まれた。

「ね、気持ちいいでしょ？」

「…君も貴族なの？」

「ええ、そうですが…僕はスタンリー家の遠縁の者です。…恥ずかしい話ですが家が貧しく兄弟も多かったので、人買いに売られるしかなかったのですが、ありがたいことにエドワード様に引き取られ、こちらにお世話になっているのです」

「…そう」

人買いに売られることとエドワードに飼われることと違いがあるのかと嗤ったが、言わなかった。

赤茶色の巻き毛、折れそうなほど細い肢体。あどけない顔をした子だった。

歳を聞いたら俺よりもふたつも上で驚いた。

俺は早熟の所為か、同級生達よりも一回り体格が良かったが…このイプリという子はルウたちよりも華奢だった。

だが、手管は競うまでも無く、俺が陥落させられた。

「あなたがこのスタンリー家を継ぐお方と知って、なんだか安心しました、クリストファー様」

「様はよしてよ。頼むからクリスって呼んでくれ」

「では、クリス。エドワード様同様にあなたを主人として一生忠義を尽くすことをお許しください」

深く頭を垂れるイプリに俺は何も言えなかった。

この子と俺になんの違いがあるというんだ。

俺は何故この子に尽くされなきゃならない。

この子の人生を負うなんて…俺には重すぎる。

人の運命を受け入れるのは苦痛でしかないだろう。自分の運命ですらコントロール出来もしないのに。

その夜、俺はエドワードにもうサロンに出るのは嫌だと泣いた。

エドワードは「上に立つ者の使命だと思え」と、言い、許さなかった。

見知らぬ貴族達にいいようにあしらわれる自分が悔しかった。

自分が一番なりたくないものに染められていくようで、悲しかった。

絶望、屈辱、苦悩、嘆き、そして「諦め」が俺の感情のすべてだった。

長い夏休みが終わった。

帰り際、エドワードは玄関まで俺を見送り「来年も待っているから、必ずおいで、クリストファー」と、言う。

俺は何も返事はしなかったけれど、どうせ無理矢理にでも連れて来られるに決まっているんだ。

家には寄らずに直接学校へ向かった。

絶望を抱えた俺は、待ち望んだ学校までが、まるで地球の果てから帰るくらい長い道のりだった。

寄宿舎に帰ると、ルウとアーシュが俺を迎えてくれた。

「ベル、お帰り！」

「…ただいま」

「ちょうど良かった。今日部屋割りがあつてね。今年は俺達三人一緒の部屋なんだ。すごいだろ」

「…ホント？」

「うん、もう、ベルの荷物も新しい部屋に移しておいたからね」

「…ありがとう…」

ふたりに両腕を引っ張られて新しい部屋へ連れて行かれた。

今までは6人部屋だったけれど、五年からは4人部屋になる。

「もうひとりとは新学期からの転校生らしいよ」

「…そう」

俺はスニーカーを置き、ベッドの端に座り込んだ。

「どうしたの？ベル。元気ないね」

ルウの水色の瞳が俺を覗き込んだ。

「旅の疲れが出てるんじゃない。ベルは夏休み中、実家で優雅に過ごしていたんだろ？どうだった？楽しかった？」

「…う、ん」

屈託のないふたりを前にして俺は何だか無性に悲しくなった。

自分の汚らわしさは勿論、断る勇気も持てなかったこと、嫌っていた貴族という世界を甘んじて受け入れてしまったこと。

情けなさに涙が出た。

ルウとアーシュは驚いて、俺の背中をさすってくれた。

「どうしたの？ベル。なにかあったのかい？」

「な、んでも…ない」

「そんなに辛そうに泣いてるのに何も無いはずないだろ？僕達、隠し事は無しって約束したよね。ちゃんと話してよ。ね、ベル」

「…話を聞いたらきつと君達は、僕を軽蔑するよ。…汚らわしい僕を、嫌いになる」

「バカだなあ。なるもんか。絶対にベルを嫌いになつたりしない」

「そうだよ。何を聞いても軽蔑したりしないよ。僕もアーシュもベルがどれだけ貴いアルトか知っているもの。それに、親友だろ？僕ら」

「…」

澄み切ったふたつのまなこが俺を見つめている。何もかも受け入れるよと言っている。

俺は彼らだけには隠し事をしなくなかった。だが、もし俺の話を聞いて俺を軽蔑り、友達をやめると言われたりしたら…そう考えるだけで胸が苦しくなった。

俺は俺を貶めたエドワードに絶望しても、彼のすべてを嫌いにはなれなかった。

俺の中の汚い欲望を彼は目の前に突き出して言うのだ。「同じ穴

のムジナ」だと。

彼は自分をどこかで憎んでいる。そういうエドワードの感情が10歳の俺でも理解できた。そして、それさえ平然と受け入れられる自分自身こそが、この純粋なふたりの天使に見られたくない部分なのだ。

こんな俺を二人が知ったら…

「ずっと仲間でいようね」と、言ってくれた言葉が俺を救ってくれたのに…

「ベル…君が大好きだよ。僕もルウも苦しんでいる君を知って、ほってけると思う？君の苦しみはもう君だけのものじゃない。ね、僕達にわけてくれないか？そしたらきつと無くならないにしても三分の一にできると思うんだ」

アーシュは自分の心に決めた秩序を愛していた。彼の精神は美しかった。

ルウを自分の手で拾ったことも、彼を「セキレイ」と呼ぶ権限を誇りとしていたことも、俺には眩しすぎた。

自分達にも痛みを分けてくれと言う彼らの前で、俺は懺悔をせずにはおれなかった。

クリストファーの俺ではなく、彼らの前ではただの「ベル」でいたい。

どんなに言いたくないことでも、正直に言ってしまうおう。

それが俺の精一杯の彼らに対する信頼の証だ。

俺は少しずつ、口ごもりながらも、館であつたすべてのことを話した。

話し終わるとアーシュは拳を握り締めて突然立ち上がった。

「くそつたれっ！ベルにそんなことを強いるなんて…ベルの叔父でも僕は許さない。『力』を使ってでも絞め殺してやるっ！」

アーシュは頭から湯気が出るくらいに怒り、今にも部屋から飛び出して叔父を殺しにいきそうだった。

ルウは部屋を出ようとするとアーシュの腕を捕まえ、「およしよ、君、死刑になっちゃうよ」

「別にかまうもんかつ！」

「ベルが困るだけだよ。その叔父さんが死んじやったら、ベルがすぐに後を継がなきゃなくなるもの」

「…うう」

「ねえ、そうだよ、ベル」

「うん…そうなるかも」

「ベルは貴族になりたくないんだよね」

「うん」

「じゃあ、アーシュもベルの叔父さんを絞め殺すのはやめておいた方がいいよ」

「…だけどさ、許せないじゃん。このままじゃベルが可哀想だよ」

「うゝん…」

ルウは腕組みをして、首を左右に振った。彼の考える時の癖だ。

「…そうだ。学長に相談してみようよ」

「トウエに？」

「僕達だけじゃどうしよもないよ。学長から叔父さんに言ってもらおうよ。もうベルは叔父さんの家には行きませんって」

「うゝん、上手いくかな。どう思う？ベル」

「僕は…君達に話したから少しはすっきりしたよ。もし、これからだってエドワードの相手をしなきゃならなくても…ルウとアーシュが僕を軽蔑したりしないでいてくれるのなら…我慢できるもの」

「それじゃあ駄目だ。やっぱりトウエに話そう」

こうと決めたら絶対に曲げないアーシュは、俺を引っ張って学長室へ連れて行く。

嫌がる俺の背中をルウが押し続けた。

俺は掴まれる腕の強さと背中に当てられた手の平の温かさに、涙
がでるほど嬉しかったんだ。

天使の楽園、悪魔の詩 4

その四

タイミングよく、学長は部屋で休憩中だった。

俺達を見ると快く話を聞く姿勢を取ってくれた。

話しづらい俺の代わりにアーシュとルウが事の詳細を学長に話した。

話を聞いていくうちに学長の顔はこわばり、頭を抱え始めた。

「ねえ、トウエ。ベルを助けてやってよ」

「その変態叔父さんをベルに近づけさせないでやってよ」

「そういうの性的虐待って言っただろ？捕まえられないの？檻にでもぶち込んでおけばいいんだ」

「そうだよ。貴族だからって許せないよ。そんな奴死刑にしてよ」

酷い言われようだ。ふたりの罵倒にエドワードが少し可哀想になつてくる。

ふたりの懸命な訴えに、学長も苦笑している。

「分かったよ。アーシュ、ルウ。でも少しばかりベルとふたりで話させてくれないかい。いいかい？ベル」

「はい、先生」

ルウとアーシュを学長室に置いて、俺は学長と共に、奥の部屋に入った。

天井は高いが壁中に張り巡らされた本棚と机があるだけの小さな部屋だった。

学長は机の上のポットからカップに紅茶とミルクを入れ、俺に飲むように勧めた。

「さて、ベル。アーシュとルウの話で大体はわかったけれど、肝心の君の気持ちを聞いていません。本当のところはどうなんだろうね。アーシュとルウの話に間違いはないの？」

「はい。恥ずかしいけれど…すべて本当の事です。貴族なんか生まれでこなきや良かったって…何度も思いました」

「そうか…大変だったね、ベル。心も身体も傷ついただろう」

「…その時はすごく…悲しくて…でも貴族の血を引き継いでいるのなら仕方ないものだと思うって…受け入れました。たぶん…僕だけが特別じゃなく…これまでだってみんな…貴族に生まれた者は経験してきたことなんでしょう。だから…大したことじゃないのかもしれない。だけど…僕はここの生活が好きなんです。アーシュやルウやみんなとここで生きることが僕にはとても大事でそれが普通の生活で…それが望みなんです。あれが貴族の生活というのなら、僕には向いてない…」

あの屋敷での事が思いだされて、俺はまた涙が滲んでしまった。学長はカップを持ったまま震えている俺の両手の拳をそっと握った。

「…わかるよ、ベル。私も、貴族の生まれだからね」

「え？そうなんですか？」

「三男だったから、無理に縛られることもなくて、学校を卒業して色々な国を奔放していました。でも、大人になるまでは…ベルと同じように嫌な思いも沢山しましたよ。…確かにあの趣向はここからすれば随分と異端に感じるかもしれないが、彼らもまたこの学校の生活を覗いたとしたらきつと不思議に思うのかもしれないね」

「どこが？」

「貴族も平民も関係なく、またアルトでもイルトも平等に一つ屋根の下で暮らすことは、世間では難しいのです。法の下では平等でも、見えない壁がありますからね」

飲み干したティーカップをかたした学長は、今度は引き出しから

キャンデーを取り出して、僕の手握らせ「食べなさい。落ち着くよ」と言った。

俺はキャンデーをじっと見つめた。アーシュの好きな薄荷味だ。彼にあげたらきつと喜ぶだろう。

「わかります。でもおかしいですよ。平民である僕の父の財産で僕の母の実家は贅沢な暮らしをしている。父を敬ってもいいはずなのに、彼らは軽蔑するばかりだ。生まれが何であろうとも、また父がどんなにあくどい実業家であっても、母やスタンリー家は父に敬意を持つてもいいはず。僕は父を好きにはなれないけれど、一代で会社を大きくしたその腕を認めています。だって父が居なかったら…僕はここでこんな生活は送れなかったんだから…」

「ベル、君は本当に素直で正しい心の持ち主だね。私は君のような生徒を持つことが出来て嬉しいですよ。では君に理不尽な事を強いた叔父上であるエドワード・スタンリーをどう思っているの？」

「…僕は叔父をかわいそうな人だと思ってます。エドワードは…自分を憎んでいるんです。貴族でしか生きれない自分を…嫌っている僕にはそういう風に見える。彼が僕にあんなことを強いるのも、自分の苦しみを知って欲しいからなのかもしれない…そんな気がしてなりません」

「そう…、ベルはそこまで理解しているのですか。では…エドワードの話をして大丈夫ですね」

「え？叔父の？」

学長は静かに頷いた。

「その前に私もひとつ…」と、トウエはまた引き出しを開けてキャンデーを口に入れた。

「やっぱり薄荷味が一番心がすっきりするね。…どうしたの？遠慮はいらないよ、ベル。それとも薄荷味は嫌いだった？」

「いえ、大好きです…」

「アーシュの分ならまだあるから、気にしないで食べなさい」

ああ、何もかもお見通しなのだなく、学長には全く敵わないと、俺は安心といくらかの嫉妬心を自覚しながらその薄荷飴を口に入れた。

キャンデーが口の中で無くなってしまった頃、幾分すっきりした俺は学長の話の続きをじっと待っていた。

「さて、エドワードの話だったね」

「はい」

「エドワードは、この『天の王』の生徒だったんだよ」

「え？」

「彼がこの学校に編入して来たのは中等科の一年の秋だった。私は彼に『ユーリ』と言う名を与えたのです」

「…ユーリ」

「そう、エドワードは…ユーリはここに来てしばらくは酷く憔悴しきっていた。彼は…とても苦しんでいたんだ。敵わない自分の想いを自分の中で整理することもできずに…悩んでいた。また貴族での生活にも矛盾を感じていてね。ああいう中で生きる自分の世界をなんとか変えたいと心から望んでいた。私も何度か悩みを打ち明けられたよ。どうしたらあんな退廃しきった貴族世界をもっと規律正しい生活に変えられるのだろうか…」

「…」

エドワードがそんなことを考えてこの学校で過ごしたいたとは、思っても見なかった俺は、なんとも言えない気持ちになった。

「私は彼の目指すものが正しいことだと諭したよ。彼らの生活が長い歴史の中で蓄積されたものであっても、自分がそれに溺れる必要もないと、何度も言った。けれど…彼にはそれを壊せなかった。彼

の家の重みが彼を押さえつけてしまったのだね。…ユーリで居る時はまだ良かったんです。しかし休日を過ごしたスタンリー家からここへ戻る度に彼は流されていく自分に苛まされていた。沢山の友人たちに囲まれながらも、彼は孤独だったのだろう。そして…一番大切なものを失った時、ユーリは一晩中泣いていた…」

「一番大切な…」

エドワードの一番大事なものを失くした…何となくだがそれは俺の母、エドワードの姉であるナタリーが俺の父と結婚した事ではないかと思った。

「それは…僕の両親…母が原因なのではないんですか？」

「どうしてそう思うの？」

「母の気持ちばかりません。母と僕との接触は極めて薄いからです。でも…叔父は、エドワードは母を…愛している。そんな気がします」

「君はそれを認めているの？」

「父と母の関係よりもずっと…愛おしい気持ちになれます。だって…確かな愛があるのだから」

ふたりの関係を直接聞かされたことはなかった。

だが、あの母でさえ、エドワードが傍に居る時は傲慢な貴婦人から少女のような笑みを浮かべることがあったではないか。血の繋がった姉だからって、愛してならないという事にはならない。もし俺が…ふたりの子供であっても少しも卑下することもない。

「君が言うとおり、ユーリは君の母上を愛していたんだ。世間の感覚なら血の繋がった姉弟が愛し合うことは罪のひとつでもあるが、貴族は、血の繋がった同士が身体を繋いだとしても大した罪悪感はない。彼らにそういう倫理感はないからね。だけどユーリはね、とても苦しんだよ。稀に見る常識的な人間だった。それに彼はアルト

でもある」

「え？エドワードが？」

「必死で隠そうとしていたけれど。自分の力で人の思いを踏みにじるのを恐れてね。ユーリはとても純粋なんだよ。だから姉君を愛しながら、見守るだけでいようと必死に自分に言い聞かせていた。姉君の幸せだけを祈っていた……」

そうだったのか……エドワードは純粋に母を愛していたんだ。

もしかしたら姉である為に果たせなかった苦しい想いをその子供である俺にぶつけているんじゃないのか。叶わぬ愛と姉を奪った父の子である俺への憎しみ、切なさ……エドワードが俺を憎まないはずはないじゃないか。

「叔父は苦しんでいたんですね。叶えられなかった想い人を政略結婚とはいえ父に奪われた。そして憎むべき父と愛する母との間に生まれた僕は、エドワード本人に似ている。そんな僕を見て、叔父はどんな気持ちだったのだろう……」

俺は頭の中のすべてを吐き出すように呟いていた。

学長の手の平が虚ろに彷徨う俺の目を正すように、そつと頬に触れた。

「卒業が近づいた或る日、ユーリは嬉しそうに私に話してくれました。『先生。僕に甥が生まれました。とても綺麗な金髪でマリンプルーの瞳の美しい赤ちゃんなんです。それに彼はアルトなんですよ』と。これ以上ないほどにユーリは喜んでいました」

「……」

「あなたのことですよ、クリストファー。エドワードは心から君の誕生を喜んでいたので。そして今もきっと、君を愛している」

「……本当に？」

「本当です」

エドワードが俺の誕生を喜んでくれた。

それだけで胸が一杯になった。

そして、夏の屋敷であつた悪夢をすべて許してしまえると俺は思った。

今はエドワードの愛情が歪んだものであつても、彼は苦しみ、俺を愛してくれた。それは充分な俺の存在意義だつた。

「…わかりました。先生。僕はエドワードを許します。決して誰も憎んだりしません。そして彼を救いたい。心から愛していると伝えたいんです」

「ベル、君は他の生徒から比べてもとても大人です。色々な辛さを耐えてきた経験が君を強くしているんでしょう。でも我儘な子でいることも大事ですよ。貴族の生活を強いられることが嫌だつたらはつきり言う事も必要でしょう。学校から何か言つても、彼らは聞く耳は持ちませんからね。申しわけないが、力にはなれない」

「はい、わかつています。学校と外の世界の間に干渉はなにひとつとしてはいけないのがこのサマシテイの規則ですから」

「だから私に出来る事をしましょう。ベルの支えとなるものを与えられるかもしれません」

「え？」

「『真の名』を今教えましょう。本当なら中等部に入つた時に与えるものなんだけどね、特別です」

「…はい」

「真の名」の意味をその頃はあまりよく判つてなかった。ただ特別な者だけに捧げられる聖名だという事は聞いていた。

「ベルゼビュート・フランソワ・インファンテ。これが君の『真の名』です。覚えておくように」

「はい」

「ただし、人の耳にあまり聞かせてはなりません。『真の名』は必要な時だけに言の葉にするのですよ」

「…わかりました」

ベルゼビュート・フランソワ・インファンテ：俺の本当の名前を聞かされた時、アーシュとルウの顔が浮かんた。だから俺は聞かすにはおれなかった。

「先生。『真の名』を授かるのは僕だけじゃありませんよね」

俺の質問に学長は微笑んで深く一回だけ頷いた。それだけで充分だった。

俺には仲間がいる。『真の名』を共に受け継ぐ仲間がいる。そして、それは力になる。

エドワードの為し得なかった理想を俺が描けるかもしれない。俺の力で守りたいものを守りきることができるかもしれない。美しい世界を作れるかもしれない。

それは、俺の果てのない欲望だった。

天使の楽園、悪魔の詩 5

5、

学長との話が終わった俺は、ルウとアーシュが待っている部屋へ戻ろうと立ち上がった。

部屋を出る際、学長はアーシュ達の分のキャンディーを忘れなかった。

キャンディーを受け取りながら、俺はもうひとつだけ学長に問いかけた。

「先生、『官能』の力とはどういうものなんでしょうか？エドワードはセックスを知ることが力を得ることになると言っただけです」「そうですか…」

学長は明らかに困った顔で俺を見つめた。

「君がその意味を知るのはまだ早いと思います。…ベルにとっては間抜けな言葉でしょうが、子供は子供らしく生きなさい。どうせ近い将来そのことを知る日が来ます。その時を待つ子供の時間は無駄じゃない。それだけです」

「…わかりました」
はぐらかされた…

「官能」について、これ以上学長から聞き出すのはどうやら無理らしい。

子供は子供らしくか…一刻も早く大人になりたい俺にはホントに間抜けな気休めだ。

仕方ない。別な手段を考えよう。

俺の思惑を学長に悟られぬよう、気にもしていないフリをしてお礼を言い、俺は学長室へ戻った。

ドアを開けた途端、ソファに座っていたふたりが飛び跳ねるよう

に立ち上がって、俺に走り寄る。

「ベルっ！どうだった？」

「トウエはちゃんと叔父さんに話してくれるって？」

「もう、ベルに酷い事したりしないって約束できるの？」

俺の腕を取り、ルウとアーシュは必死に俺の様子を伺う。

…本気で心配をしてくれていたんだ。

今にも号泣しそうな顔で俺を見つめるふたりを見て、こっちの方が泣きそうだ。

「アーシュ、ルウ…大丈夫、大丈夫なんだよ」

「本当に？」

「もう叔父さんのところに帰らなくてもいいって？」

真っ直ぐに俺の心に飛び込んでくるふたりの純粹無垢な精神の力。凄まじい濁流が俺の心の染みをすべて洗い流していく。

後に残るのは眩い清いせせらぎだ。

…なんと言う感情をくれるんだろう。軽蔑や同情でもない、ただひたすらに俺を憂うだけの想う心。

俺は…その想いにどうやって応えればいい。

「…うん、もうね、なにがあっただって僕は傷つかないんだ」

俺は零れる涙を拭いて、明るく笑った。

「…ホント？」

「うん、ホントだよ。全部ルウとアーシュのおかげだ。ありがとう」
ありったけの心を込めてそう伝えた。

その言葉を聞いたふたりは俺に飛びつき、そして泣き出した。

「良かった、良かった」と、叫びながらふたりは泣いた。

その涙が、その感情こそが、俺を支える「力」になり得るのではないか…

ふたりを失いたくない。

ふたりの信頼に値する人間になりたい。
ふたりを守るためなら、どんなことだって…

今日から俺はもう泣くだけの子供ではいまい。

それから俺は休日になっても家には帰らなくなった。

この守られた空間で自分を鍛えることが必要だと思ったからだ。
学長が言うように、まだ子供の俺はあいつらを打ち負かす（または言い負かす）術はない。力と知識を得る時間が必要だった。

暇があれば図書館へ通った。

図書館は「天の王」学園の中心である聖堂と隣接している。
西の中等科からでも北の高等科からでも同じ距離で通える。

冊数はこの街最大だと言われ、公にできない秘蔵書も多いと聞く。
簡単には貸し出しは出来ないけれど、この図書館に来れば、年長の生徒からも「力」の秘密を聞けると思ったんだ。

だが、そんな簡単には事は運ばない。

俺はまだ初等科だったし、話を聞こうと思っても「せめてその小さなタイガリボンにならなきゃ、理解できないさ」と、軽くあしらわれる。

性体験だったらおまえらに負けないぞ、と息巻いても、彼らはせせら笑うだけだ。

仕方がないから、自分のテリトリーに帰る。

俺の周りに変化はない。

皆あどけなく純粹に子供時代を楽しんでいる。

少しばかりの残虐性はあっても無垢ゆえだと許される時代だった。

「ベル、冒険に行くよ」

アーシュとルウが俺を呼ぶ。

「うん、わかった」

彼らの傍にいる時は、俺も無垢な子供でいられる気がする。

翌年、初等科の最終学年を迎える夏。俺はスタンリー家の屋敷にひとり旅立った。

広間で待っていたエドワードは、疑心暗鬼の顔で俺を見た。

「まさか、君から来てくれるなんて思わなかったよ、クリストファ―」

「だって、あなたが迎えを寄越さないから、ひとりで来るしかなかったんだ」

「嬉々として来てくれるとは思っていないからね」

エドワードはクッションの深いソファに身を投げ出すように座り込んだ。

俺は彼をよく見る為に、彼の座った正面に近づいて立った。

去年に比べてエドワードは随分歳を取ったように見えた。まだ28のはずなのに、四十過ぎの人生を見極めた疲れきった親父殿：だが嗜虐に満ちた引き攣った笑いも、今は口元には浮かんでいなかった。

俺は哀れに思った。

おかしい話だが、どう考えても俺はこの人を嫌いにはなれない。

それにどちみち俺がこのスタンリー家を継がなきゃならないのなら、この叔父の力が必要となるはずだ。

「ねえ、エドワード」

「…何だ？」

「僕ね…学長に『真の名』を貰ったんだ」

「え？」

エドワードの青い瞳に光が戻る。俺はそれを見逃さない。

エドワードは何回も瞬かせ、俺を凝視した。

俺と良く似た面差し、目の色、髪、背格好だって、僕が大人になればエドワードと同じくらいにはなるだろう。ねえ、やっぱり俺達
は分かち合うべき関係なんだろう？

「エドワードは…『ユーリ』って呼ばれていたんだね。僕ね、色んなことを、学長から沢山聞いたんだ」

「生徒の詳細を漏らすなんて情報漏えいだ。それともモウロクしたのかな、トウ工学長も」

「僕は聞いて良かったと思っている。だって、エドワードの事をすごく好きになれたのだから」

「…簡単に騙されるなよ。学校は自分らの好みにコントロールするところだ。それでいて何の責任も負わない。まさに理想だけを押し付ける」

「理想がなければ、人は前を向いて歩けないよ。僕にとって理想は学校で学び、あなたの理想を僕に導いて欲しいと思っているんだけどな」

「簡単に良く言う。…俺が…失敗したことを嗤っているのか？クリストファー」

「笑わないよ。だって、あなたは充分苦しんだ。今だってそう…だけど僕がいる。ひとりじゃないって思えば苦しみも分けられるでしょ？僕の親友はそう言ってくれた。だから…僕は前を向いて歩けるんだ」

「…」

「エドワード、僕があなたに与えるものは信頼と愛だ」

「信じられない。俺はおまえに…十歳のおまえに…」

エドワードは口ごもり、そして頭を抱えた。

その時、気がついたんだ。彼は俺を弄んだことを、ずっと後悔していたのだと。

俺はなんだか可笑しくなった。

彼は貴族のやり方を俺に教えただけであり、それは彼らの中では

当たり前であつたのだから、普通の貴族であるなら、気にも留めることもない。

真面目で純粋なエドワード。トウエの話す「ユーリ」の頃と少しも変わっていない。

「エドワード、あなたを愛している。信じて。僕は何ひとつ傷ついていない。だからふたりで描いた理想を実現しようよ。その方が自堕落の生活よりも、極めて刺激的な『力』を発揮できるとは思わない?」

「クリス…おまえ、革命家にもなるのか?」

「僕の真の名は『ベルゼビウト・フランソワ・インファンテ』って言つんだ。…ね、負ける気がしないでしょ? ユーリ」

「…素晴らしいね」

エドワードは両手を広げて俺を抱き寄せた。

俺達は誓いのキスをした。決して失望させないとお互いに誓つた。俺の顔を撫でながら、本当に良く似てると優しく笑う。

「母に似ていた方が良かった?」と、言うとき黙つたまま微笑んでいる。

「ひとつ聞いていいかい?」

「何?」

「なぜ、私を許す気になつたんだ?」

「僕が生まれたことを、あなたが喜んでくれたから…それだけで充分だった」

「喜ぶのは当たり前だったよ。ナタリーの血が流れている赤子を、私は愛さずにはいられなかった…」

その夜、寝室に誘つたのは俺の方だった。

一年前と違って、エドワードは俺の身体のひとつひとつを丁寧に愛してくれた。

「少年の成長とはとてつもないね」と、笑う。

「心？それとも身体？」

「いや、追求する欲と技だ」

やわらかな微笑みをたたえながら俺の胸を愛撫するエドワードに、もう暗い退廃した影は見えない。

エドワードとの「官能」を楽しみながら、俺はひとつの戦いに勝ったのだと思った。

> i 2 6 2 5 0 — 2 7 3 <

その四

初等科に入学した俺とセキレイは自動的に天の王学園の東の保育所から南の初等科へ引越した。

環境が多少変わっても敷地が同じ所為か別段怖じけづくこともなく、同年齢の仲間との生活を無心に楽しんだ。

俺達には最初から「力」がある事が示されている。

保育所出というレッテルはこの馬の骨かも判らぬ者という嘲りよりも、確実に「力」を持っていることが、周りには脅威に見えたのかもしれない。

彼らはしばらくは遠巻きに俺達を眺めていた。

こちらは余裕で愛想よく近寄り親交の手を差し出す。

良い奴と悪い奴、必要ない奴に分け、問題の無きようにそれなりの対応を心がける。

生徒から好かれるのは大方セキレイの方であり、彼は先輩からも同級からもそのあどけない微笑みで、いっぺんに相手の敵意を喪失させた。実際、彼は素直で真っ直ぐな性格であり、悪意というものをあまり持つてなかった。人の言葉には素直に信じ、従い、正義を愛していた。

俺はどちらからかというと、物事をひねくれて見る傾向があり、疑心暗鬼になりながら人を選別する癖があった。特に危険と感じた奴は、セキレイに近づけたくないから、俺は先手を打って彼らを脅しておくようにした。当の本人には注意を促しても「別に怖くないもん」と、意地を張る。

セキレイは自分が弱い立場だと見られるのを嫌がった。勿論、俺もセキレイが弱いとは思っていない。だが、あの人当たりの良さと、

素直さは貶められる気質だ。俺はセキレイを悲しませなくなかった。

一度同級生から嵌められて、名誉を傷つけられたことがある。

試験の答案用紙を見せた、見せないのつまらない出来事だったが、セキレイは答えを見せた相手から詰られ（カンニングがばれた相手はセキレイの所為にした）、無償の行為が綺麗に裏切られる様というのはこういう事を言うのか…と、相手の罰の悪さとセキレイを同類に引き込んだというほくそ笑んだ顔を見てしまったセキレイは己の愚かさに口唇を噛んだと言う。

そんな些細なことでプライドが傷つくのか…と、こんなに傍にいても見落としていたセキレイの性質に俺は変に関心もした。

俺だったらそんなものボロクソに罵って、一発殴ってお終いなんだけれどね。

セキレイと俺は目立ったケンカはしない。

俺が強く出ればセキレイが引くし、セキレイの意思が強かったらそちらを立てる。だからケンカには発展しない。

ただセキレイの何気ない仕草には、常に俺への気遣いが潜んでいる気がしてならなかった。

俺がセキレイを拾ったことへの恩を感じているのか、俺が守ると言って彼を引き入れた所為なのか…

セキレイは俺を「大好き」だと言う。「ずっと一緒にいようね」と誓う。

その言葉を疑った事は無いけれど、それはきっと俺の想いを気遣ったことじゃないのか、と、季節ごとの花が咲くように何度も俺の心に巡ってくる。

初等科の二年になった俺とセキレイに、大事な友人が出来た。名を「ベル」と言う。

「ベル」は、この街一番の貿易会社の息子であり、また古い格式を荷った貴族の子息でもあった。

艶のあるハニーブロンドと、プライドの高そうな整った顔をしていた。

貴族は至って俺達みたいな下賤な親無しっ子には近づきたがらない。上目線で意味もなく俺達を侮蔑している。高慢ちきな野郎には拳固でやり返すこともあるが、殴られた子供の親がトウエに迫り、トウエが頭を下げた時点で、正直こちらも引いた。

貴族さんとは一線を引いた方がこちら身の為だと思い、それからは触らぬ神に祟りなしの方向で、できるだけ知らぬふりをした。

ベルは貴族でありながら、身分の偏見は全く無い珍しい奴で、奴の方から俺達に手を差し伸べた時は驚いた。

それに彼は卑怯な貴族や金満家には似つかわしくない非常に実直で誠実な心根を持っていた。

俺とセキレイが唯一ひけらかしていた「力」をベルも同じように持ちながら、それを鼻に掛けてもいない。

正直、この派手で端正な顔の体格のいい少年が、俺達と友達になりたがっていたとは信じられない気もしたが、それこそこの男の誠実さが俺を引きつけた。

俺達三人は無二の親友となった。

ベルは頭が良かった。

俺とセキレイの間に無理矢理に入り込むことも無く、自分のスタンスで俺達と付き合いおとしてくれた。その感情に嫉妬や暗い感情などはなく、ただ友情を分かち合いたいという気持ちが溢れ、こちらの方が戸惑うぐらいに温かな感情で包んでくれた。

俺とセキレイは親の愛情を知らないから、親に愛された者はこんなに優しいのかと思っていたら、全くの逆でベルは裕福でありなが

ら、親の愛には恵まれず、また家に縛られ、心を寄せるものが欲しかったのだと言う。それが俺達であつたら幸せだとも言う。

ここまで信頼された相手をどうしてこちらが拒むことができよう。完璧な友情を彼に捧げようと、俺とセキレイはベルに誓った。

俺達は冒険が好きだった。

「天の王」の中だけに限られているけれど、まだ俺達が知っている場所は僅かであり、未知の大陸が目の前に立ちはだかつていた。

だから暇があれば、三人で校内の隅々を隈なく調べつくす。古びた倉庫から鍵の掛けられた錆びた地下への階段。重い鉄の扉を開けば、真つ暗な世界が俺達を誘う。

時折、先に見つけたと思われる先輩連中の秘密基地にぶつかり、不審者扱いで監禁されたりもした。でも彼らも俺達と同じで、冒険者の類だから、話がわかる奴らばかり。

まだまだガキだと相手にはされないが、「その蕾のタイが、リボンになったら可愛がつてあげるよ」と、約束のキスをくれた。

その時はその意味がわからなかったが、中等科になる頃には彼らの紳士さに少し感動したものだ。よく俺達を犯さなかったものだと。

五年生になった新学期、夏季休暇から戻ったベルの様子が変だった。

彼はひと夏中を実家のスタンリー家の避暑地で過ごすことになる、休暇前に言っていた。面倒くさがりながらも自分の母親の実家で初めて過ごす生活を期待していたんだ。だから憔悴しきったベルが心配だった。

なんとか理由を聞きだし、その理由が彼の叔父の墮落しきった生活とベルに対する性的暴力と知った俺とセキレイはどうにかして、ベルを助けたかった。

俺達はまだ幼くて何にも力がなかったから、学長のトウエに頼ん

ただのだけど、結局、ベルの叔父さんへの仕返しは叶わなかった。

ベルは「いいんだよ。僕は叔父を許すことができるよ。彼の行為がどんなものでも、僕を愛しているからなんだ」

ベルはそう言って納得していたが、それはおかしいと思う。

愛が暴力に変わっていいはずはない。ベルの叔父さんがベルを愛するのなら、自分の汚れた世界に引きずり込むのは勝手きまるところだ。まだ抵抗の出来ない子供のベルだからこそ、彼らは光へと導く義務があるのではないか。

俺達には親もいないし、恵んでもらう愛は多くはないけれど、それでも愛の定義と摂理を教えられた。

ベルは寛容すぎる。

「叔父さんを許しても自分の心の傷跡を見るたびに嫌な気持ちになるだろう」と、言っと、

「エドワード（彼の叔父の名前）もまた、その傷跡を見て僕を犯したことを思い出すんだ。それは、後悔の苦さだろうか、それとも甘美なものだろうか……どちらにしても、僕はエドワードを捕まえるよ。もう二度と支配されたりしない」

ベルの強さには感服する。

その翌夏に彼は叔父と完全和解した。

それを聞いた俺はなんとなく面白くなかった。

俺の気持ちを読んだセキレイは俺に向かってニヤリと笑い、おもいきり俺の脇腹をつねった。

Private Kingdom 5

5、

「力」の話を少しだけしよう。

我々アルトが持っている「力」はいわゆる超能力的なものから、明日の天気占いのようなものまで、とてもアバウトで幅がある。

能力は生まれ持ったモノであり、学習して「力」が得るものではない。

ノーマルな人間界の支配するこの街では異端である「力」を持つ「アルト」だが、ノーマルな人間、つまり「イルト」にとって本当に忌み嫌われるべき者なのかは疑問に思う。

何故なら能力のあるアルトを使いこなすイルトこそ、成功する者だと言われているからだ。

確かに多くの実業家や政治家の傍らには必ず、影のように魔法使いが寄り添っている。

だが、魔法使いが自ら名を打ちだし、イルトの前に出た形跡は、殆どない。

魔法使い、即ちアルトが何故イルトの僕しもべの如く扱われるのか。学者の間でも何度も問われてきた謎だった。

俺の考えでは、アルトは同じアルトを心から信用することができないからだと思う。

お互いの「力」の差をいつも気にしながら、相手の考えすら読むことができないなんて、傍にいただけで疲れる果てる。

またアルトの「力」の源は「sensor」、感応力とも言われるが、それはお互いへの信頼する力とも言える。

お互いを訝るアルト同士では折角の能力も生かしきれない。

だが、もしアルトが信頼するイルトと出会い、イルトの愛を勝ち得たなら、「力」は膨大な魔力を得ることになる。

魔法使いが望むものは自分の力を使いこなす受け皿の存在としてのノーマルな良きイルト、と、いう事にならないだろうか。

「天の王」は多くのアルトが集まる場所だが、結局はイルト中心のこの街でアルトが生き残る為には、持っている「力」の暴走を押さえ、イルトと上手く共存していく為の方法を学んでいく場所：のように思えてならないのだ。

事実、アルトの多くが、自分より弱く、純粋に自分を頼ってくるイルトの為に「力」を使いたいと思っている。つまりは自分の自尊心がそれで満たされるわけだ。

いや、それだけではなく、アルトにはイルトに背けぬように仕組まれている何かがあるような気がしてならない。それが潜在的なものなのか、後天的に何かが始組まれているのかはわからないが…

例えていうなら、ベルだ。

ベルは彼をレイプした叔父を最初から憎む気持ちはあまり生まれてこなかったと言う。彼を許して彼を支配することこそが、自分のすべきことだという。

彼の叔父のエドワードはアルトだというが、力はベルと比較にはならない。（実際俺は彼と会ってその能力を見極めた。）

自分より力のない者を守りたいという欲求（これはもうアルトの宿命かも知れない）は、アルトの生きていく糧になるのかもしれない。

俺自身を問えば、他のやつらとはどうも違う気がする。

それを上手く言葉で表せないのだが、守るべき家族もまた守りたいイルトもいない現在^{いま}、有り余る「力」をどう使うかは、まだ定められていない。

「力」は学習するものではないと学校では教えられるが、使いこなす技を知ることには必要だと、「力」を使い始めてわかってきた。天気や恋占いなど心理的な「魔法力」は直感だが、俺はPSI全部を使いこなす魔法使いを望んでいた。

俺は自分の「力」を疑ったりしない。

幼い頃からこの場所でセキレイやベル、そして仲間と「力」を試してきた。

そしてそれを知りながらこの学校の教師たちは黙認している。

これをどう取るかは、難しい話になる。

つまり「アルト」の存在意味をどう捉えるかだ。

彼らは（又は我々は）今まで通りの従属を願うのか、それともこの秩序をひっくり返す革命を求めているのか…

いずれにしても、この話はまだ早い。

俺はまだセキレイとの恋物語を話していない。

今はここに居ないセキレイを想う時、どうしても別れの悲しさが襲ってくる。

あの子を見つけた時から、俺はセキレイを一生の恋人であれば、と、願ったものだった。

それを打ち明け、セキレイもまた、俺の傍にずっと居ると誓ってくれた日々を俺は信じていた。

「愛している」と、言ってくれたじゃないか。「ずっと離れない」と…

別れて随分経つけれど、想いは少しも減らず、悲しみもそのまま、ただ願いだけが膨らんでいく。

俺は諦めたりしたくない。

初等科を卒業して、西館の中等科に俺達は移った。

制服も変わるし、今までとは違い寄宿舎もそれぞれひとり部屋になる。

一年生は二階、二年は三階、三年は四階に別れていて、先輩方と顔を合わせるのは食堂や風呂場ぐらい。

一学年しか変わらないのに、彼らは皆大人びて、どことなく妖しい雰囲気漂う。

部屋の鍵や窓を閉めておかないと、発情した奴が夜這いに来るかもしれないと、冗談とも本気ともつかない忠告を耳元で囁かれる。

ハイアルトである俺達には、力づくで襲われることはないが、少なからずレイプされた奴の話聞いていた。

ところが、レイプされた奴もまた、上級になった途端下級生を同じように従わせたりするものだから、弱い者がそのまま弱いだけでは無さそうだった。

弱いままの生徒は、自分を守る為に強いアルトをものにして、自分を守る術を覚える。

サマシテイの縮図がここにあった。

奇怪であっても平和に保たれている世界。

入学式の折、すでに誕生日を迎えていたベルは、学長に「真の名」を与えられた。

学長室に呼び出され、証人として数人の先生方の前でこの「真の名」を告げられるのだが、非公開のその二ユースは瞬く間に校内に知れ渡り、「真の名」を与えられた「ホーリー」はスターになる。

「ベル、凄い事じゃないか。え〜と、ベルゼビュート・フランソワ・インファンテ…だったか？」

「そうだよ。良く覚えられたね、アーシュ」

「とつてもかつこいいし、強そう。ベルに似合ってるよ」

学校の食堂の片隅で三人で昼食を取っていた。

ベルはホーリーになってから、誰彼と無く付き合いを申し込まれて少々げんなりしていたから、目立たぬように隅で食事を取るようになっている。

「ありがとう、ルウ。でももうずっと前から学長にこの名前を頂いていたから、あまり感動はなかったよ」

「いいなあ、ベルがホーリーだなんて。ま、俺達も役得かもな。ベルの傍にいたら変な奴に迫られないで済むもん」

「そうだね。ベルが親友で良かったよ、ホント」

「おまえら、本気で言ってる？」

「はあ？」

「『真の名』をもらったって『力』の使い道が判るわけでもないんだよ。名前だけ先走りしているみたいで、身に付いてない感じだよ」「そりやそうだろうね。名前をもらっても中身が変わるわけでもないし……」

「でも羨ましいよ。ホーリーって人の上に立つ為の条件みたいな感じじゃん。ベルはその権利を持ったってことだもん。ベルの理想に一步近づいたって感じだね」

「うん。腐敗した貴族社会をどうにか建て直したいしね」

「貴族社会が何？」

いきなり目の前に立った女子は同級生のリリだ。彼女もまた、ベルと同じく『真の名』を与えられホーリーとなった。

「え？別に？君の家のことを言っただけじゃないけれど……」

貴族特有のドン臭さでベルがポツリと答える。

リリもまた貴族子女だったが、彼女はサマシティ出身ではない。「リリ、おめでとう。『真の名』を貰うなんてすごいじゃないか。女子では珍しいことだってね。良いホーリーになってね」

例によってセキレイが極上の微笑みを返したおかげで、リリの鶏

冠もそれ以上立たずに済んだ。

リリが去った後、俺はベルにどうしてリリには冷たいのか、聞いてみた。

「別に冷たくしているつもりはないよ。でもサマシティの貴族でもないリリは本当の事情なんて何も知らないお嬢様なんだ。だから…俺の世界は知らなくていいんだよ」

「…」

近頃、ベルは良く自分のことを「俺」と言うようになった。なんだか大人に見えて俺も真似し始めた時期だった。な

その夜、ささやかなお祝いをやろうと、俺とセキレイはワインを手にはベルの部屋で一晩中話し込んだ。

大概是ホーリーに関しての話が多かった。

「前の年は誰一人としてホーリーに選ばれなかったんだろ？」

「そうだったね。一昨年はひとりだった」

「メルだろ。彼は俺らと同じ保育所で育ったから、顔馴染みだよ。な、セキレイ」

「…僕は、メルは苦手かな。何考えてるかわかんないもん」

「そう？俺は好きだけど。ああいうアウトサイダーって、すげえやーらしそうでいいじゃん」

「アーシュ、君もそういうところあるよ」

「ああ、アーシュはアウトサイダーだね」

「ええ？俺のどこがいやらしいんだよ」

「全部」

「はは…」

「笑いすぎだよ、ベル」

「まあね、そうは言っても君達だって…」
「え？」

「ごめん、言わなかったけど、君達も多分ホーリーだと思うよ」

「え？え？」

「どういう事？」

「随分前に…俺が『真の名』を貰う事をトウエに聞いた時、俺一人じゃなくて、傍にいる者も仲間だって…トウエが教えてくれたんだ。あの意味は君達ふたりも同じく『真の名』をもらえるってことだと思う」

「そ、れ…ホントの話？」

セキレイが興味津々にベルに顔を近づけた。

「本当さ」

「…それが本当だったら…凄く素敵だ。僕にも『真の名』を与えて『ホーリー』になれるなんて、ね！アーシュ」

「…そうだね」

宙に浮くぐらいに嬉しそうなセキレイには悪いが、俺はそんなに驚きはしなかった。

俺が選ばれた者である事は、ずっと前から知っていたし、セキレイもまた他のアルトとは違うことは、彼を拾った時点で知っていた。だから「真の名」を貰おうとなかろうと、「ホーリー」になろうがなるまいが、実はあまり関心はなかったんだ。

だが、セキレイは違っていた。

その日から、「真の名」を貰う誕生日まで、心躍る期待の言葉を繰り返した。

「ねえ、アーシュ。僕らはどんな『真の名』を貰えるんだろうねえ。カッコいいといいけど…ダサイのはちょっと嫌だな。ね、アーシュはどんなのがいい？」

「え？どんなのだって別にいいよ。それで中身が変わっちまうわけでもないって、ベルも言ってたろ？」

「それはそうだけどさ。でもワクワクしない？」

「セキレイはワクワクし過ぎだよ」

ひとり部屋になっても俺たちはどちらかの部屋に行き、ひとつのベッドで寝る。

お互いのぬくもりが何よりの安眠だったからだ。

> i 2 4 6 5 0 — 2 7 3 <

6、

出会った時からセキレイを俺の一生の番だとは決めていたけれど、人間の感情とは虚ろいやすく、「絶対」なんてものは保証できない柔なものだっけわかっていた。

セキレイに俺のモノでいろ、とか、一生俺以外の奴を好きになるな、とか、冗談で言い合っても、呪文のような鎖に繋いだりはしなかった。

逆に俺の所為で、セキレイが自由でいられなくなる方が怖かった。俺達はお互いに番でいられることを喜んでた。愛し、求め合う理想の恋人になることも望んでいた。だからその時が来たら、自然にセックスも出来るものだと思っていたし、そういう話もふたりの間では冗談を混じりながらも語り合ってきた。

だが、結局具体的なことはさっぱりである。

やり方も煩惱も頭に叩き込んでいるはずなのに、いざベッドに寝てみると、欲情する前にお互い安心して寝てしまう。

朝起きてお互い「また、寝ちゃったねえ」と、笑いあうが、心の中じゃかなり焦っていた。

俺はセキレイに欲情しないのか？

つまりセキレイとはセックスできないのか？

…大問題だ。

ベルに相談してみようと思った。

勿論セキレイが居ない時にだ。

ベルは十歳の頃に叔父や他の貴族と経験を積んでいて、その道のエキスパートでもある。

今じゃ、タチもウケも両方できるし、女性ともやれると言う。羨ましい限りだ。

学校の中でも先輩や同級生たちに何回も同衾を願われている。確かに十二歳で大人ほどの身長で、洗練された身のこなし、ゴージャスなハニーブロード、そして甘いマスクの奴に敵うものはいない。

夜遅く隣で寝ているセキレイを起さないようにベッドからそっと抜け出して、ベルの部屋へ向かった。

ありがたいことにベルはまだ起きていた。

彼の部屋はバストイレ付き特別室だ。俺もたまに風呂を世話になる。

シャワーを使ったばかりのベルは、バスローブ姿で濡れた髪を乾かしていた。

「まだ寝てなかったの？」

「うん、ちよつと相談があつてさ…」

「アーシュが俺に相談なんて珍しいね。何？」

「うん、あのね…」

ここにきても親友のベルに相談すべきが悩んでしまう。

一番頼れる親友で、何でも隠し事しない仲なんだから、相談には乗ってくれるはずだ。それでも中身が中身だからどうしても口ごもってしまう。

言おうか言うまいか迷っている俺に、ベルはコーヒーをくれた。

「コニヤック入り。良く眠れるように」

相変わらず、ベルは優しい。だからなのか…と、俺は気づいた。

俺はこの男を仲間はずれにしたくないと、どこかで感じてて、こんなことを言えずにいるのではないだろうか。

俺とセキレイが特別の仲であり、口癖のように「一生の恋人同士」

であると当たり前のように話し、ベルもそれを良く知っている。

だが俺とセキレイが実質的な恋人同士、つまり関係を持ったら、ベルはどこかで俺達に気兼ねしないものか…などと考えてしまう。

手元のカップを見つめたまま黙り込んだ俺を見かねて、ベルが口を開く。

「ねえ、話ってルウの事？」

「え？」

俺は思わずベルの顔を見つめた。

「だって、アーシュが悩む事って言ったらそれぐらいだろ？」

「…そうだね」

俺は苦笑い。

「…当ててみようか」

「…」

「ルウと寝たみたけど、上手くいかなかった」

「…すげえ、ベル。ビンゴだ。俺の心を読んだの？」

ベルは声を出して笑った。

「そんな力は俺にはないよ。使わなかったって…君の顔に書いてある」

「…？つき。顔に書いてあるものか」

「真に受けるなよ。で、どうして上手くいかなかったのさ」

ベッドに膝を抱えて座り込んだ俺に、ベルはそっと隣に寄り添った。

「上手くいかないって言うより、そこまでいってないって言うのが正しい」

「…どういうこと？」

「だから…ふたりで居てもそういう雰囲気にならないの」

「…」

「だってずっと…セキレイと出会ってから、ずっと一緒にいてひと

つのベッドで寝ていたんだ。急に性的な衝動が沸いてくるはずない
だろ？普通に考えてさ」

「家族みたいなもんだろうしねえ」

「そうなんだ。…だとしても、俺はセキレイを愛してるし、恋人に
したいし、セックスしたいって思っているんだよ。絶対そうなんだ」
「…」

ベルは笑いを堪え切れないかのように手で顔を隠して肩だけ震わ
せている。

「バカ…笑うな。こっちは真剣だ」

「…ゴメン。アーシュが必死なのを見るのは好きなんだ、俺」

「…ベルはいいなあ」

「何が？」

「だって誰とでも寝れたりするんだろ？」

「それなりの雰囲気作りはいるぜ」

「雰囲気かあ…」

「それより、君、精通はあった？」

「…当たり前だろ？十二になるんだから」

「じゃあ、そちらは心配ないね。後はルウの気持ちだよ。ルウは
本当に君を求めているのか…」

「…たぶん。でも正直自信はないよ。だって人の情愛なんて虚ろな
ものだし、セキレイが俺に対して家族以上の情愛を求めているとい
したら…それはそれで仕方ないことだろ？」

「…アーシュ、君は誠実だね。無理矢理犯そうなんてこれっぽちも
考えてない」

「信頼を裏切る方がよっぽど怖いよ」

「…うん、そうだね…」

ベルはそう言うと、俯いたまま黙り込んだ。

下を向いたベルの横顔を見た。

何かをじつと堪えているような表情だ。なんだかこちらが切なく

なつてしまった。

「…ベル」

俺は握りしめられたベルの両手に手を乗せた。

「ありがと、話を聞いてくれて。セキレイの事はあまり焦っても事を仕損じる覚悟でゆつくりやるよ。一度は通らなきゃならないんだもの。それに俺ひとりでもやるものでもないしね」

「…うん」

「それから、俺とセキレイがそういう関係になつたって、ベルとの友情は少しも変わらないんだからね。これからだつてずっと一緒にいたって、俺は願っているんだから」

「…ありがとう、アーシュ」

ベルの青い瞳の奥が涙で光るのを見た時、大人に見えるベルだつて俺と同じ十二歳でしかないんだと、ちよつと安心したり切なくなつたりと、その夜はすやすやと眠りを貪っているセキレイの横でとうとう眠れなかった。

十二月四日の俺とセキレイの誕生日が近づいてくる。

セキレイはカレンダーに印を付けながら、その日が来る事を心待ちにしている。

「もう一週間経つたら、『真の名』をもらえるんだねえ、僕達。なんだかワクワクよりドキドキしてきた」

「何だよ、子供みたいにはしゃいでさ。十二になるんだよ。もう立派な大人の仲間入りなんだから、少しは自覚しろよ、セキレイも」

いつもどおり俺の部屋のベッドに潜り込んだセキレイは毛布の首まで引き上げて、俺が来るのを待っている。

「ちえ、自分だけ大人のフリしてさ。アーシュだってホントは嬉しくいけに」

「何が？」

俺は眼鏡を机に置き、灯りを消して、いつものようにセキレイの身体に寄り添った。

「『真の名』だよ。何も後ろ盾のない保育所育ちの僕達が唯一自慢できるステイタスになるんだよ。ここを卒業しても『真の名』があれば、良い就職先だって楽に見つけられるって先輩方が言ってた」

「良い就職って…セキレイ、そんなものに興味あったの？」

「うん…だってさ。僕、自分がどこから来たのかわからないし、ここに来る前の記憶だってないだろ？もし…もしだよ。僕の両親が僕を…探していたりするのなら、立派な大人になって生きているって知らせたいじゃない。それにできるのなら、両親を探したいし…」

「…そう」

セキレイの親に対する想いっていうものが、俺には少しも理解できなかった。

きっと記憶がなくても、セキレイはここに来るまでは親に可愛がられていたのかもしれない。その記憶が細胞に刻み込まれているのかもしれない。だからセキレイは親への「憧れ」を口にするのだろう。

生まれたばかりの俺を捨てた親と、セキレイの親はきっと違うのだろう。

別にそれを恨む気もない。

もし、今、目の前に俺を捨てた親が出てきても、別段複雑な感情は芽生えない。むしろ目の前に現れた親達の複雑さに頭を捻るかもしれない。

「俺では親の代わりになれない？」

居もしないセキレイの親に嫉妬を交えた俺は、横に寝るセキレイの身体の上に乗っかってみる。セキレイは重いと文句を言ったが、

俺は無視してセキレイの胸に頭を置いた。

規則正しく打つ心臓の音を聞く。

俺はパジャマの裾から手をしのばせ、セキレイの胸を撫でた。
セキレイの手が俺の頭を撫でる。

「アーシユは親ではないもの。恋人…でしょ？」

「うん、そうだよ」

「ずっと傍に居てくれるんだろ？」

「うん、ずっと居るよ」

「僕を…抱いてくれるんだろ？」

「うん、君が望んでいるのなら」

「…僕、アーシユのものになりたい…」

「セキレイ」

顔を上げて暗がりの中、セキレイの顔を見つめた。

「いいの？」

「うん。抱いて欲しい」

そう言っただけで俺の首に両手を回す。

セキレイの少し開けた口唇にそっと重ね、深く絡み合わせた。

Private Kingdom 7

7、

互いのパジャマを脱がせ、身体の輪郭を確かめ合った。互いのものを握り、昂ぶるのを待った。

「俺が…入れる方でもいいの？」

「…うん、その方が自然だろ？」

「…」

どこが自然なのかさっぱりわからない。入れる側入れない側の決めてなんて一体あるのだろうか。

「アー…シュ」

泣きそうな声で呼ばれた。

セキレイの両膝を広げ、俺は自分の昂ぶったものをセキレイに押し付けた。

「…っ」

俺の背中を抱くセキレイの指の強さが、拒否なのか期待感なのかいまいちわからない。

この先どうしたらいいんだっけ…えーと…まずスムーズにいく様に、慣れさせなきゃならな…

…あ！しまった！…ローション忘れた。

なんてことだ。こんな急とも思わないからスキンすら用意してなかった。

ベルなら持っているだろうが、こんな恰好で今更借りに行けるわけも無い。

どうしよう…

このまま、続けていいものだろうか…痛がったりしないものだろうか…

俺は滅茶苦茶焦っていた。

「アーシュ、どうしたの？」

「な、なんでもない。えーと…入れてもいい？」

「…う、ん」

暗くて顔色までは良くわからないけど、声の加減でセキレイも不安なのがわかった。

だけど俺が欲しいと言うセキレイの気持ちを裏切るわけにはいかない。

俺は覚悟してセキレイの中に入り込もうとした。

「う…い、痛い…」

噛み締めた唇から、悲鳴が漏れた。

身体が擦れた。痛みに耐え切れず逃げる身体を引き戻していいものか、俺は悩んだ。

「セキレイ…やめようか」

「いやだ。いやだよ、折角アーシュとひとつになれるのに…」

「だって…泣いてるじゃないか。痛いんだろ？」

「…」

セキレイは黙ったまま目を閉じた。目じりから零れる涙が見えた。

…なんだか可哀想になってしまった。

これ以上続けても今の俺にはセキレイを気持ち良くさせてやることはできないと、わかってしまったんだ。

「ゴメン、セキレイ。やめよう」

俺はセキレイの身体から離れた。

「え…どうして？」

先程とは比べ物にならないほどの、しょぼくれた声だ。

「アーシュ、怒ったの？僕が泣いたから？痛がったから？」

「そうじゃないよ。俺の方が拙かったんだ。ごめんね、セキレイ。…ごめん」

「…」

セキレイはもう何も言わず、裸のまま毛布を摺り上げて俺に背中を向けた。

セキレイもそうだろうが、俺の方もかなりのダメージで、その背中はどう言葉をかけていいのかわからない。

お互いを繋げるのがこんなに難しいなんて…思いもよらなかったから、俺はこの状況にどう立ち向かっていけばいいのか、正直自信をなくしてしまった。

静まり返った暗闇の中、セキレイの鼻を吸う音だけがいつまでも響いて、俺は後悔と自信喪失とセキレイへの同情で居たたまれず、とうとうベッドから抜け出し、部屋を出た。

深夜の徘徊なんて珍しいことじゃない。

今日は満月だから、皆それぞれに盛っているに決まっている。あられもない嬌声だって聞きたなくなっただって自然に耳に聞こえてくる。

なんだか自分がつまらないものと思った。

寄宿舎の一階の食堂に行き、テラスへ出る扉を開けた。

眠れる気分になるまで月でも見ていようと思ったんだ。

テラスの向こうに芝草のベンチに座る月影が見えた。

影の長さから上級生だろうと思った。変な奴に声をかけられるとやばいと思って、引き返そうと踵を返した。

「誰？」

声を掛けられる。

逃げるにしても一応挨拶だけはしておこうと、できるだけ近寄らずに「一年のアーシユです」と、応えた。

「アーシュか。なにを遠慮しているの？こちらへおいでよ」

「いや、いいです。お邪魔でしょうから」

「アーシュ、僕だよ。メルだ」

メル：保育所で一緒に過ごしたふたつ上のメルなのか？

半信半疑で姿を確かめるためにそつと近づいた。

「君も月光浴を楽しんだら？空気は冷たいけれど、澄んでいるから気持ちがいい：なおざりなセックスよりもね」

メルが笑ったような気がした。同時にメルの言葉はなんだか俺の心を軽くした。

すらりとした痩身でアッシュブロンドの長い髪、幼い頃から無口でおとなしく人と交わらない印象がある。

久しぶりにメルを見た気がした。

隣りに座るように薦められ、言うとおりに座った。

「君、そんな恰好で寒くないかい？」

「ああ…」

何も考えずパジャマのまま部屋から出てきたんだ。

「これを貸してあげる」

メルは首に巻いていたマフラーを外して、俺に巻きつけてくれた。

「少しはマシだろ？」

「ありがとうございます」

メルはふふと笑い、また月を仰ぎ見る。

俺はその横顔を見つめた。

俺は今までこの先輩をよく知ることにはなかったが、こんなに傍にいて少しも不快感はなかった。

「どうしたの？僕の顔に何か付いてる？」

「不思議だなんて思ったから」

「なにが？」

「同じ寄宿舎に居るはずなのに、あまり見かけないから。昔からそうだったけど、俺、あなたと遊んだ印象がないんだけど」

「それは、君の視界に僕が居なかったからだよ。自分が必要とする時にしか見えない、見ようとしな。そんな人は多いからね」

「そうかなあ」

「昔から君にはルウしか見えていなかった…だろ？」

「…そうかもしれない」

「僕はいつだって君を見ていたのにね…いつも残念に思っていたよえ？」

「でもこうやって今、君は僕を捉えた。君が僕を必要としているって事かしら」

「…」

心を見透かされているようできまりが悪かった。

「いい満月だ。『力』が満ち溢れてくる」

メルという言葉に俺も夜天を仰いだ。

「月は何も求めないでも、こうしてエネルギーを僕らに与えてくれる。ねえ、駆け引きもテクニクもパッションもいら。ただ『官能』を感じていればいい…」

月にかざしたメルの両手が白く光っている。

「官能」のエネルギーって…一体なんなんだろう。

「…俺にも、それを受け取ることができる？」

メルは驚いたように俺を見た。

「君に出来ないことなんて、あるのかい？」

首を傾げて俺に微笑むメルに、すべてを委ねてしまいそうになる。セキレイはひとりで泣いているのに、自分だけ楽になろうなんて、なんて身勝手なんだろう。

しかもセキレイを泣かせている原因は、浅はかな俺の行動なのに…今の自分には月の光でさえ、眩しすぎて見上げられない。

「俺はね、メル…今日まで自分にできない事なんて無いなんて、思ってた。でも本当はなんの力もない。…つまらない男なんだ」

「何かあったのかい？」

「…」

「なんて聞かないよ。誰だって落ち込む時はあるものだもの。無理に浮上しなくてもいいんだよ。なんにしたって、明日はやってくるからね」

「…うん」

メルは黙って震える俺の身体を抱きしめてくれた。

気紛れな同情でも、この夜の俺はその温もりがありがたかった。

Private Kingdom 8

8、

それからしばらくして、メルと別れて部屋に戻ったが、セキレイの姿はなかった。

自分の部屋へ帰ったのだろう。

傍にいてやるべきなのか、このままそっとしておく方が良いのか
…考えるのも億劫になる。

翌日、寝坊した俺は朝食を取りに急いで食堂へ行ったが、セキレイは見つからず、謝るタイミングを逃してしまった。

学校へ向かい教室にいるセキレイに声をかけたが、どうもよそよそしい。

「セキレイ、昨夜のことだけど…」

「もうそのことは気にしてない。それより自分の席に着きなよ。授業が始まるよ」

弁解の余地もないってわけか…そちらがそうならこっちだって。似た者同志の意地の張り合いなんてしたくはないけど、打ち解ける機会を失ったからにはこっちからは謝る気が失せた。

授業が終わっても俺からはセキレイには近づかなかった。

ベルは説明はしなくてもふたりのケンカの原因は大体判っている模様で、気にする風もなく普段どおりに接してくれている。

いつものように食堂で三人並んで食事しようとしてもセキレイはひとつ席を空けて座るから自然にベルとの会話が多くなる。

「この冷戦、いつまで続くと思う？」

俺はベルの耳元で囁く。

「誕生日が来れば君もルウも気分が変わると思うよ。『真^{まこと}の名』を貰ったら仲直りができるさ」

「そんなもん？」

「うん、そういうものだろ？それに…なんかね、『真の名』をもらったことでののかはわからないけれど、自分が何倍も大人になった感覚になれるんだよ。今まで見えなかったものが見えてくるっていうか…大事なものがわかるっていうか…ねえ」

「ホント？」

「うん。だからいつまでも小さいことに拘るなよ、アーシュ」

俺の頭をくしゃくしゃと撫でるベルは、いつだって俺よりも遥かに大人だ。

セキレイを守る奴は俺よりもベルみたいな奴が相応しいのかもしれない。

ふと、そんな風に思ってしまった自分が情けなくなった。

あれからメルを寄宿舎や校内でも目にするようになった。メルが言ったように、こちらがメルを必要としているのかもしれない。目で挨拶をしたり、ひと声掛けるだけでもなんだか心のどこかに信頼できる仲間が増えた気がして心地いい。

ベルはそういう俺を見て「君は案外浮気性だね。ルウ側に付きたくなったよ」と、口を尖らす。

「それって嫉いてるの？」と、言う

「認めたくはないけどね、そうかも知れない」などとふざけて、顔を見合わせて笑いあう。

少し離れて歩くセキレイがこちらを睨むのもお構いなしだ。

俺とセキレイの誕生日が来た。

その日が来るのを待ちわびていたと言うベルが、俺とセキレイにお揃いのパジャマをプレゼントしてくれた。ご親切にそれぞれにスキンを忍び込ませるのも忘れずに。

「上手くいくように祈りを込めておいた」と、微笑むベルに、俺と

セキレイはお互いに顔を赤らめた。

その日の放課後、俺は学長室に呼び出され、構内敷地の中心にある聖堂へ連れて行かれた。

古びたゴシックの聖堂は特別な行事の他は、滅多に入ることはない。

側面のクリアストーリのステンドグラスから夕日がちょうど差し込んで、虹色の光が黒い制服を美しく染め上げてくれた。

教壇の元、跪く俺の頭に手を置いた学長のトウエが、厳かに「真の名」を俺に伝えた。

「誉れ高き名はこの者に与えられ、その伝説の名は再び、世を支配する。暗き夜も眩しき昼も君に愛を齎す。アスタロト・レヴィ・クレメントの未知なる王国は祝福の賛美に溢れかえろう……」

「……」

それを耳にするまで俺は「真の名」の意味をただの名前だと思い込んでいた。

多分それが事実だ。だが、その名の響きが頭の上のトウエの手から身体の芯に突き刺さっていく感触をなんと言えばいいのだろう。頭を垂れた俺は金縛りのように身体も動かせず、声も出せなかった。

……このままでは『真の名』に支配されてしまう。

アーシュとしての俺自身が負けてしまう。

いや、どちらが自分でも構わないのかもしれない。

「力」を得るためには素直に「真の名」に委ねる手もあるう。

だけど、俺は抗いたい。

「運命」なんてもん、「必然」ってもんすべてを任せるのは嫌だ。

いつの間にか俺の両手は緋毛氈が敷き詰められた床に着き、必死で身体を支えていた。

脂汗がべつとりと身体中にまとわり付いた。息苦しさそのまま意識を失うかと思った。

床を這うように沈み込んだまま、荒い呼吸を繰り返す。

…冗談じゃねえ！ふざけるなっ！どんなお偉い名前かしらないが、そんな言の葉に跪く気なんか、毛頭ねえよっ！

影になった自分の姿を目で追った。

果たしてこれは本当の自分なのか。偽物なのか…

「すべてを受け入れる。いや、拒絶しろ。

選ぶのは俺でなければならぬ。

片隅に佇む真実を見極める。

何物も怖れるな…」

顔を上げた。

夕日の輝きはいつの間にか消え、ステンドグラスの輝きは暗いものに変わっていた。

俺はゆっくりと立ち上がった。

目の前のトウエは顔色ひとつ変えずに俺を見ていやがる。

クソ親父、俺を試しやがったな。

「良き名を頂き、ありがとうございます。この身の内に巢食つ己を味方にすれば俺の勝ちですよね」

「…君はもう、勝者だよ、アーシュ」

トウエはやつといつもの微笑みを俺にくれた。

儀式は終わった。

俺の後はセキレイの番だったが、俺は彼を待たずに寄宿舎へ帰っ

た。

正直、自分の事だけで精一杯だった。

夕食も取らずに部屋に鍵をかけてベッドに横になった。

あの時感じた身体中の火照りが夜中になっても冷めやらなかった。

冴えた目は眠りを拒み、俺は立ち上がって部屋を出た。

ふたつ先のセキレイの部屋へ向かう。

ノックをしても返事はなく、鍵は閉められていた。

セキレイもまた、俺と同じような体験をしたのだろうか。

彼は一体どんな「真の名」をもらったのだろう。

俺は「真の名」に打ち勝つことができたのだろうか…

廊下の窓から下弦の月が白く浮かんでいた。

恐ろしい程に白い光が俺を包む。

窓を開け、手をかざす。

手の平に熱いエナジイが満ち、瞬く間に身体中の隅々に流れる。

「力」を蓄えるひとつの軌跡だ。

この夜、魔法を学ぶ方法をひとつ、俺は知った。

この「力」をどう使うべきなのか。

人の為に？自分の為に？この学園の為に？

ガタンとドアの開く音が響いた。

部屋からセキレイの白い姿が浮き上がった。

セキレイは俺を見て、一旦立ち止まり、そして近づいた。

窓の手すりに両手を置き、月を仰ぎ見た。

「良く晴れてるから半月でも明るいいね」

「セキレイ…」

「誕生日おめでとう、アーシュ。どうにか間に合って良かったよ」
いつもより少し硬いセキレイの声。

「こちらこそ、おめでとう、セキレイ。勝手に決めた誕生日でも一緒に祝うことができて嬉しいよ」

緊張した顔が緩み、いつものセキレイの笑顔が戻った。

「アーシュ…『真の名』はどうだった？」

「…アスタロト・レヴィ・クレメント。…それが俺の名前だって」セキレイの身体が一瞬震えた気がした。俺の方に顔を向けて驚いた顔を見せた。

「どうしたの？」

「いや…やっぱり怖いな。『真の名』の力ってこちらが気を張ってなきゃ、負けそうだし」

「君の方はどうだい？」

「…ルシファー・レーゼ・シメオン。恐れ多くて困ってしまうよ」ルウは眉間に皺を寄せ、本当に参っている顔で俯いた。

ルシファー…か。

天上と闇の国を司った伝説の英雄だ。

伝説なんて神話と同じで作り話だ。

「真の名」はその偉人の生まれ変わりとも言うが、実際居たかどうかもわからぬ者の生まれ変わりなんて信じる奴がいるものか。

煽て上げて持ち上げて、都合のいいように先導者にしたてあげるつもりだ。

万が一、上手くいかなくても「真の名」はまた次の者に継がせればいい。

そうやって、彼ら（学園）は、力のある魔法使いを味方につけてきた。

それが本音じゃないのか。

「学長が決めた名前にこちらが畏れることもないさ。どんな名前を貰おうがセキレイはセキレイだし」

「…アーシュ」

「俺のセキレイに変わりは無い。そうだろ？」

「うん」

「…俺の事嫌いになった？」

「なんで？」

「…失敗したから」

「あれは…お互い様だ。僕の方も悪いんだ」

「じゃあ、チャンスを与える？今度は失敗しないようにするよ。約束する」

「…なんだかいやらしい気分になるね」

「うん。でも今夜はよそう。まだ自信がないしね。ちゃんと学習して、セキレイを気持ち良くさせたいしね。それまで待っていてくれるかい？」

「そんな真顔でよく恥ずかし気もなく言えるね…僕はそれにどう答えればいいのか」

「楽しみにしてる。…それだけでいいさ」

「…アーシュのバカ。恥ずかしいこと言わせるな」

セキレイの身体が俺に凭れ、俺は細い身体を抱きしめた。

「楽しみにしてる。僕は一生、君だけのものだ」

「…好きだよ」

重なる声が耳に遠い。

下弦の月が天上に輝く夜、僕らは十二の時を迎えた。

大人になるのはもう少し。

楽しみながら待ちわびて、揺れる君の影を踏もう。

天使の楽園、悪魔の詩 6

6、

十二を迎えた九月、俺は「天の王」の中等科に進んだ。勿論アーシュとルウも一緒だ。

中等科の校舎のすぐ隣りの寄宿舎は、それぞれひとり部屋になり、俺はバス、トイレ付きの特別室に住む事になった。金に余裕のある貴族は大方特別室を選ぶ。

俺はアーシュたちと同じ様式の部屋でいいと思ったのだが、アーシュもルウも「ベルの部屋の風呂を借りにくるよ。そんでベルの部屋は広いから毎日パーティだ」と、けしかけるから、俺も調子に乗って一番いい部屋にしてみらったわけだ。

新学期の初日の夕刻、俺は学長のトウエ・イエタルに呼び出され正式な「真の名」を頂く。

ベルゼビュート・フランソワ・インフアンテ。

「真の名」は天上と闇を統治した者の名前から始まる。そして、後に光と闇の名前が続く。

「真の名」の意味とは光と闇、善と悪、過去と未来、両極端のものをすり合わせる天秤の要のようなものだ。

我々に求められているのは、戦いとそれによる均衡なのだ、と、思う。

学長は「真の名」の真の意味を決して伝えない。

個々の思想によるものだとして、委ねている。

だから「真の名」を頂いたホーリー達はそれぞれの自分の哲学にのつつて、この学園を卒業し、サマシティから、外の世の中を渡り歩く。

俺はたぶん…この街からは出られない気がしている。

セイヴァリ家とスタンリー家を捨ててまで自分だけが自由の身に

なりたいとは、思わないのだ。

貴族の身分や経済力に矜持しているわけではなく、俺は彼らを守りたいと思うのだ。

それが恥ずかしいこととは思わない。

この学園を卒業したら、世の中を知るために街以外の大学に通い、卒業したら父親の会社を継ぐ為に働きたいと思っている。

この人生設計をアーシュとルウに聞いてもらうと、ふたりは笑うどころか、うつとりとして「まるでお伽話のようだ」と言う。

「そうかな。現実的でつまらないだろ？せつかくの『真の名』が泣くかもしれないね」

俺の部屋へ集まって夜更かしはいつもの事。ベッドに寝転んで頬杖を付き、顔を寄せ合って語らう。

クリストファー

「そんなこともあるもんか。ベルは文字通りこの街を救う救世主に君はなるんだね。そうだ。いい事を思いついた！」

「アーシュのいい事っていうのは、いい加減って事だ」

「五月蠅いよ、セキレイ。取り合えず君の会社が貴族とタッグを組めばいい。貴族にもギルドに入ってもらい、キッチンとした仕事を割り振るんだ。暇な貴族たちに真つ当な仕事を与えてやれ。汗を掻いてどれくらいお金が貰えるか試してやればいい」

「それ無理じゃない？ハシより重いもの持ったことない人達が貴族なんですよ？」

「だからさ、趣味を生かしてファッションとか美術方面の専門職を作るんだよ。ね、いいか考えたと思わない？」

「アーシュ、いいところに目をつけてる。実は…それ、もうやっているんだ。エドワードが…」

「…ええ？」

「エドワードはすっかり真面目になっちゃってさ。父親から事業の手ほどきを受けて、その能力があっただろうね。今では小さいけれど会社の経営をまかされて、その仕事を若い仲間の貴族らと一緒に

にやってるんだ。この間の休暇では、サロンの雰囲気もがらりと変わって俺も驚いたよ」

「すげー！ベルを泣かしてくれた叔父さんを救ったってわけか。ベルゼビュート・フランソワ・インファンテの最初の仕事じゃない」

「…そうは言わないと思うけど…」

「いや、俺は信じてたよ。叔父さんはきっと立ち直るって。さすがはベルだ！」

「よく言うよ。アーシュはベルの叔父さんをいつか叩きのめすってずっと言ってたじゃん」

「余計なこと言わないで、セキレイ。俺はベルを信じているって言いたい」

「意味ちがう」

「まあまあ、ふたりとも、ケンカするな。ともかく俺は無事『真の名』を頂いた。今度は君達の番だ」

ふたりは少しだけ緊張した面持ちで大きく頷いた。

ふたりの誕生日が近づいてくる。

そのふたりの距離が今までと少し違って見えるのは俺の気の所為なのか…いや、間違いない。

ふたりは思春期に入っていた。

俺は12でありながら大人程の背丈で性も早熟だった。

お誘いを受けるのも引つ切り無しだし、気に入った相手と一晩過ごすこともしばしば。

だが、恋をすることはない。

身体が疼くことはあっても、心が求めることはなかった。

俺はアーシュとルウが会ってからずっとお互いを求め、いつかは本当の恋人になるのだとそれぞれに宣言することが羨ましかった。運命の相手というのはこのふたりの事を言うのだろう。

子猫か子犬のようにじゃれあいながら、いつかは愛し合うパートナーになる。

俺はそれを見届ける役を振り当てられている…そう自分に言い聞かせてきた。

ふたりが好きだった。

…純粹に友情と信頼を分かち合っていた。

だが俺はふたりに対する友情の色が少しずつ変わっていくのを、認めたくなくても認めないわけにはいなくなってしまうていた。

ルウは可愛い。

ルウのサラサラと風にそよぐプラチナの髪が好きだ。

屈託なく笑う顔、空を映した湖畔のようなアイスブルーの瞳、透き通った少女の声、素直な感情と柔らかい精神に心が安らいだ。

すべての害から守ってあげたい。

弟がいたらこんな気持ちになるのではないかと、思う。

アーシュは勇ましい。

勇ましくせに豊かな感情と果ての無い好奇心で、俺を驚かせる。気になるものは火の中にでも構わずに手を入れる夢中さ、怯まぬ精神力。純粹な正義感。

憧れだ。どこまでも惹きつけられる。

クセのある褐色の髪。触るとやわらかく俺の指に絡む。少しハスキーで通る声、歌も上手い。

度も入っていないのに何故眼鏡を掛けているのかと問うと「学長の呪いだよ。俺があんまり美しいからさ、妬んでいるんだよ」と、口を尖らす。

そう言うなら眼鏡を取ればいいのにと言うと、「だってさ、俺の美しさに皆が見惚れたら歩いて怪我するじゃん。俺が眼鏡をしているのは周りの平和の為だ」

その自信家ぶりには開いた口も塞がらぬが、確かにアーシュは美しい。

ルウが美少女の可憐なパンジーとするなら、アーシュはスズランの如き美少年と例えよう。

スズランは可憐な姿とは対照に根には強力な毒を持つそうだが、俺はその毒こそ、アーシュの魅力が隠されていると思っているんだ。そして、その毒の依存性は驚くほど高いのだ。その最たる被害者は俺ではないのか…

いつしか俺の目は知らぬうちに、アーシュの姿を追っていた。

アーシュが俺を見つけ、走り寄ってくる。

それだけで心臓の鼓動が早くなる。

「落ち着け」と、言い聞かせる。

「ベル、実はさ、すごい面白い場所を見つけたんだ…」

目の前にいる彼が俺を見つめる。

紺碧に輝く無限の宇宙の輝きで俺を見る。

俺はうつとりしたいのを、粉骨碎身の理性で持って、友人の顔を取り戻す。

「ね、明日の夜にでも行ってみない？…ベル？聞いてる？」

「あ？…ああ、勿論だよ、アーシュ。今度は懐中電灯を持っていこう。この間は暗闇の中を歩くのに骨を折ったからね」

「確かに。しっかり用意しておくよ」

信頼の微笑みをくれる君に、俺は何を望もうとしているのだろうね…

少しだけ心が痛む。

そして君にわからないようにゆっくり息を吸うんだ。

俺はアーシュに恋をしていた。

決して実らぬ恋だっただけなのに…

「真の名」を貰っても何ひとつ思い通りにはいかないものなんだね。

俺が欲しいのは、ただひとつ、君の心なんだよ。

天使の楽園、悪魔の詩 7

三人の絆はそのままに俺達は少しずつ大人になっていく。
中等科二年も終わる、春の頃だ。

女友達くれたローズマリーの鉢から花が咲き、部屋中を香らせていた。

匂いに惹きつけられたと部屋に来たのはルウだった。

十六夜の月が美しく、ベランダから二人並んで眺めた。

「アーシュは？」

「居ないよ。またメルのところかもしれない」

「……」

メルは俺達よりもふたつ上の高等科の一年生。

彼もまた俺等と同じく「真の名」を持つホーリーだ。

アーシュやルウとは同じ保育所育ちで、アーシュは近頃メルのいる高等科の寄宿舎に入り浸っている。

聞くところによると、大人の域にある彼らは性欲も旺盛で、ここ以上に毎晩盛つていられると言われるが、あいつは大丈夫なんだろうか。そもそも許可なしの夜の外出は、禁止事項なのに、アーシュは「規律は破られる為にある。勿論バレぬように」などと小賢しい事ばかりを言う。

「アーシュなら大丈夫だよ。彼はまだ童貞だ」

「何故わかる？」

「何故って？だって最初は僕とやりたいつてずっと言ってるもの。それに経験したのならすぐにわかるさ」

俺の懸念を打ち消すように、自信満々でルウは言う。

「そついうもん？」

「そついうもんさ。でもね…」

自信満々のルウの顔色が一変する。

「どうしたの？」

「メルだよ。僕、あの人、気に入らないや」

「彼は君らと同じ保育所仲間だろ？信用してもいいんじゃないのかい？」

「信用とかそんなんじゃなくて…メルはアーシュを自分のものにしたがっているんだよ、きつと。アーシュには僕がいるって知ってるくせに。僕からアーシュを奪い取る手筈なのさ。昔っからメルはアーシュを狙っていたんだよ」

「…そうなの？」

「そうに決まってる。だけど、僕はアーシュと番^{つがい}になるんだから、メルには渡さないんだからねっ！」

こんな風に感情を剥きだすルウは珍しく、アーシュへのあからさまな独占欲が、何だか微笑ましくて仕方ない。

俺もアーシュに懸想しているが、ルウがアーシュをアーシュがルウを愛し合う姿を嬉しく思う気持ちも真実なんだ。

勿論羨ましくもあるけれど。

「じゃあ、アーシュがメルのところへ行くのは何が目的なのかな」

「それは…」

ルウは下を向いて口ごもった。

「僕にも教えてくれない。…僕では駄目でメルならいって…一体何なんだろうね。僕は悔しいよ。誰よりも僕がアーシュの一番だったのに。…それにさ、今日、僕、裏の林のところでアーシュとメルがキスしているのを見たの。頭にきて、それを責めたらアーシュ何て言っただと思う？」

「…なんて言っただ？」

「『たかがキスだろ。セキレイともいつもやってるじゃないか』だって。あいつ、僕とメルを並べやがった。酷くない？」

「それは…酷いかも」

齒がゆくてたまらないと、ルウはベランダの木の手すりを何度も叩く。

「もう怒り沸騰だよ。あいつをギャフンと言わせてやりたい。だからベル、手伝ってよ」

「え？…なにを？」

「僕と寝て欲しいの」

「……は？」

月夜に照らされたルウの面差しは、決意に満ちている。が、言っていることはちとおかしくないか？

「だからセックスをしたいの。僕の身体が気持ち良くなるまで、ベルに教えて欲しいの」

「ルウ、おまえ何言ってるか、わかってる？」

「いつまでたってもアーシュが僕に手を出さないのは、僕を傷つけるのを怖れているからだよ。あの根性なし。アーシュは僕のことになると弱いんだ。大体において僕はアーシュの後ろにいるけれどね、セックスぐらいはこっちから手ほどきしてやる。ベッドの中では僕に頭が上らないようにしてやる」

「…あのさ、競うところ、ちがくねえ？アーシュは初めての相手はルウって決めているんだろ？それってアーシュもルウの初めての相手は自分がいいって言ってるようなものだろ？ルウが俺と寝るのは裏切り行為じゃないの？」

「なんだよ。ベルって変なところに節操を奉るんだね。成功する為には練習が大切だろ？このままじゃアーシュはいつまで経っても僕とセックスなんかしやしないんだからね。そのうちにメルに強姦されたらどうするんだよ。それこそおいしいところを横取りされるじゃないか。僕はメルには負けたくないんだからねっ！」

「…俺は練習台なのか？」

「そうだよ。ベルは経験豊富だし、第一こんなことベルにしか頼めないよ。アーシュは嘘つきだからね。ベルの方がよっぽど頼れる親友だもの」

「アーシュが知ったら怒るよ」

「だってアーシュは平気で嘘をつく。『真の名』なんて意味がないって言うておきながら、図書館の奥の部屋ですつと調べ続けているのはアーシュだ」

「違う。君が俺と寝たことを知ったら、アーシュは怒るって言うているんだよ、ルウ」

「そんなの…ほおっておいたアーシュが悪いつて言うてやる。どちみち僕らは思春期だよ。早々待てやしないさ。もうひとりで寝るのも飽きたんだよ、僕」

腕を組んで不貞腐れるルウに、俺もお手上げだ。彼の意思の強さもアーシュには引けを取らない。

彼は引き下がるつもりはないらしい。

ふたりが以前のようにひとつのベッドで寝ていないのは知っていた。

ひとり部屋だし、それぞれお互いの部屋で寝るのは当たり前だ。だが別々ということは、夜はお互いどこで何をしているのかわからないということでもある。

ルウはアーシュがまだ何も経験していないと言いながら、彼の行動を疑っているのだろう。

慣れないひとり寝は、相手が誰かと情事をしているのでは、と、誰だって不安になるさ。

ルウはアーシュを自分に縛り付けておきたいのだ。

自分から離れられなくしたいんだ。

その気持ちもわかるけれど、ここで俺が彼の目的を果たす役目をしていいのか、考えなきゃならない。

ふたりの為に最良の方法を選ぶ必要がある。

「ルウの気持ちは充分わかった。それじゃあ、始めようか」

「え？」

「俺とセックスしたいんだろ？ベッドに行こう」

「…うん」

ベランダの戸を閉めて、ルウをベッドに導き、身体を押し倒した。パジャマを脱がせ、首筋に口唇を這わせ、そのまま胸の突起を転がす。

指でルウのものを少し乱暴にいたぶると、小さな悲鳴が上がる。

「や…」

上ずった声で、鼻を吸る。

顔を見ると涙が零れていた。

「怖い？」

「そ、そんなことないよ。灯りがまぶしいから恥ずかしいだけだよ。続けてくれよ、ベル」

「強がりだね、ルウ。こんなに震えているのに。負けん気の強さはアーシュとそっくりだ」

「そっ、かな…」

「君達は双子のように思考が似ているんだ。良く考えてごらん。最初に好きな人とセックスをしたっていうのはアーシュだけじゃなく、君の想いでもあるんだろ？テクニクなんかどうでもいい。アーシュと君は最初に結ばれるのがお互いの最良の選択だ。俺はそう思う」

「ベル…」

「自分の口でちゃんと言いよ。アーシュが欲しいって」

「…」

「自信が無いのはお互い様だろ？アーシュとしてみて、具合が良くなかったら、その時、俺を練習台にしてもいいよ」

「ベル…」

「今夜は特別に俺が抱いててやるからさ。明日はアーシュにちゃんと言っただよ、いいね」

「…うん、ありがとう…ありがとう、ベル」

ルウはそのまま少しだけ泣き続け、そして安心したように俺の胸で眠った。

彼に必要なったのは、雛を温める親鳥の羽。

俺は裸のルウを胸に抱いても、性的な欲望は起きなかった。ただ彼の求める者になりたかった。

だが彼を抱くのは簡単だ、とも知っていた。

ルウの上にアーシュを重ねれば、俺はいつだってルウを犯すことが出来る。

裏切られたと泣くアーシュを見てみたいと思うのは、悪いことだろうか。

週末、俺は実家へ帰った。

この休日に彼らは抱きあう約束をした。

それはきつと叶えられる。

その夜、俺はベッドでひとり、泣いていた。

この涙は俺の為だけのものだ。

誰にも…わからない。

浄夜 1 (前書き)

メル編

浄夜 1

> i 2 8 4 0 7 — 2 7 3 <

高等部の僕の寄宿舎の部屋から見る夜空は美しい。

星月夜も格別だが、下弦の三日月は昔、絵本で見たゴンドラに似て、夜天を漂っているようだ。

今夜は晴れ。星も月も隠れる雲はない。

きつと、今夜、彼はやってくるだろう。

「メル、来たよ」

ベランダの硝子を二回叩き、ドアを開けて姿を見せたのは、アイシュ。

僕より二つ下の中等科の二年生だ。

二階にある僕の部屋に、棕木を昇ってやってくる。

三月のこの時期、空気は冷たく、夜露は霜柱に変わると言うのに、彼はパジャマの上にタフタのコート一枚を羽織ってやってくるのだ。

部屋に入れたアイシュの身体を、僕はそっと抱きしめる。

暖めるには一番手っ取り早いからだ。

アイシュも嫌がらない。

ふふと笑い、「メルはいつもあったかいね」と、身体を摺り寄せ
る。

13のアイシュは伸び盛りだが、僕よりも頭ひとつ程低い。

濃い褐色の柔毛から、いつものように薄荷草の匂いがする。
瞳を見つめる。

今夜は嫌に艶っぽい。

その意味は聞かなくてもわかつている。

浄夜

アーシュを見たのは、彼が学長のトウエに拾われたその日だった。保育所に連れてこられたアーシュは、とても小さかった。

保育所では幼子は珍しくないし、赤子だってよく見ていた。けどこんなにも生まれたてを見たのは初めてだったから、その小ささに驚いた記憶がある。

純真無垢な姿に誰もがかわいいと微笑んだ。

赤子のアーシュの髪の色は薄い灰色だった。

瞳の色は今と変わらず、深淵の藍色。星が散らばっている。

彼は捨て子にもかかわらず、誰彼構うことなく感情をばら撒かせ、元気に泣き喚き、笑い、甘えていた。

当然の如く、誰もがこの子を愛しく思い、大事に育てた。

アルトは他人を信頼したり、愛したりすることは苦手だ。

対応する相手の心の複雑さにこちらが疲弊してしまうからだ。

もし誰かを愛してしまったら、頼りきってしまったら……後はいつか来る裏切られる日を恐れて生きなければなくなる。

愛も信頼も、初めから無いほうがマシだと、僕ら、アルトは考える。

より力を持ったアルトは余計にそうだ。だって、他人を頼る必要がないのだから。

ただ、アーシュの無垢なかわいらしさは、信頼や愛とは関係なく、「癒し」として保育所の皆を幸せにした。

アーシュには生まれ持った品格があった。

彼は生まれながらの王かも知れない。

だが、それを気づかせない通俗的な觀念の姿でいるから、粗方は誤魔化された。

彼は民を弾きつけるには、万全の姿で存在する。

僕は彼をずっと見ていた。

彼に惹かれ続けた。

彼を振り向かせたいとか、愛し合いたいとかではない。

彼の心と身体を犯したいという俗物的欲望だった。

また、同時に彼の足元に平伏したい。とも願った。

この相反する欲望は、歳を追うごとに膨らみ続け、だが比例してそれを抑える理性も育っていくものだから、僕の中で見事に調和されつつあった。

12の時に「真の名」を学長から与えられた。

学長トウエの前に跪き、その名を頂いた時、僕が求めるものは、この力で何を示せるか、の答えだけだった。

僕の為すべき道をトウエに質した。

「君はカノープスだよ、メルキゼテク。時代を導く者」と、彼は言う。

その言葉を僕はこう解釈した。

時代を導く者を、導く案内人。

ではその導く者とは一体誰だ。

…聞かなくても知っていた。

だから僕は聞いた。

「アーシュは…何者なのでしょうか」と。

トウエはそれぞれの両手の人差し指を天と地に向けた。

これもまた、無限の解釈ができる。

見る者の受け取り方は千差万別だ。

光と闇を統べる者、その逆。

それを統一する者、または壊す者。

均衡。新しい未来…

そして、無。

「未来は動いています。彼が何を選ぶか、私にはわからない。だが彼に委ねるしか無いのです」

「では、ルウは…ルシファアの存在は」

僕はこの時点でルウの「真の名」がルシファアだと突き止めていた。

後に続く名はどうだっていい。最初の名が総てなんだ。

「ルウはこのサマシティの子ではない。我々の未来とは関係がないのです」

「だけど、アーシュはルウを選んでいる。ならば未来は彼を引きずりこんでいる」

「彼はここに居る存在ではない。彼もそれを知る時が来る。それまでの仮宿なのです」

「…」

アーシュはそうは思っていない。

ルウはアーシュが4つの時に拾ってきた子だった。

繊細で綺麗な子だった。アーシュは彼を「セキレイ」と呼んだ。

その名によりルウはアーシュの刻印を受けている。

彼らは双子のようにつつついて遊んだ。

僕はうらやましくてたまらない。いや、保育所の誰もが彼らを羨んだ。

すべてを委ねあう者が、親のない僕らにはいないからだ。

アーシュは僕の存在を意識していなかった。

保育所で育ち、ずっと一緒に暮しながら、彼にとって僕は他の子と同じ大勢の中のひとりではないのだ。

彼は天性の無頓着さで、他人を自覚しない。

彼の目に認められた者が、彼との絆を繋ぐ事ができるのだ。

それは王である彼に許された傲慢さであろう。

僕は待った。

彼が僕に気が付く、その日を。

彼が僕を求める、その日を。

浄夜 2

中等科一年になったアーシュは「真の名」を頂き、僕と同じホーリーになった。

ホーリーとは「真の名」を持った者だけが呼ばれる学園での称号だ。

その年はアーシュを含め、五人もの生徒がホーリーに選ばれた。ルウもそのひとりだ。

そして、もうひとり、貴族であり、この街の黒幕とも言われるカンパニーの一人息子でもあるベル。

アーシュを手に入れたと思う僕にとって、いつも彼にくっついてるルウは勿論邪魔だったが、何よりもあのベルが気に入らない。その容姿も品格も、ずば抜けた後ろ盾がある経済力もなにもかもが癪に障る。

ベルがアーシュに恋心を抱いていることは、ひと目見てわかっていた。

アーシュもまた彼を気に入っているようだった。

ルウの他には見せない顔を、あの男にはよく見せる。

僕より先にベルがアーシュを頂いてしまったら、ずっと餓えている僕の忍耐はどうしてくれる。

どうにかして彼よりも先に、僕はアーシュを手に入れたい。

だが、すべてはアーシュの手に委ねられている。

誰を選ぶのも、誰を捨てるのも、アーシュの選択なのだ。

凍てついた満月の夜だった。

深夜ひとり庭先での月見を楽しんでいた僕に幸運が舞い降りた。
アーシュはやっと僕を見つけてくれたんだ。

理由はわからなかったが落ち込んだ憂いの表情も月影で一層儚げに見えて、募る想いが膨らむのは当然だ。

頼りなげなアーシュを、僕は抱きしめる。

ありつたけの狡さで君を癒す者になる。

信頼と友情を勝ち得る為に。

二度目の出会いは図書館の書架庫だった。

「天の王」学園構内の中央の聖堂と隣り合わせの図書館は、それぞれの校舎へ放射線状に石畳が伸びている。図書館まで徒歩十分はかかる石畳を好き好ん行く奴は相当の目的を持った奴だろう。遊びに興じる生徒たちは図書館の存在すら知る由もない。

狭い扉から長い廊下を渡り、やっと図書館の入り口へ到着。

入り口のカウンターには司書のキリハラ先生がいる。

東洋生まれの彼は真っ直ぐな黒髪と切れ長の目が印象的。

僕を認めると口端だけで笑い、指で「どうぞ」と、示す。

普通の学生は彼に学生証を確認してもらい、書架庫に入れるのだが、僕の場合は特別。

彼とは愛人関係にあり、彼は僕を気に入ってくれている。

「今日の御香の香りは…清々しいですね」

彼の瀟洒なサイドテーブルには香炉がおかれ、そこから香りを燻らせているのだ。

「香木は『真那伽』。先人はこれを評して『無』と、呼ぶらしい。意味はわかるかい？」

「さあ、御香には詳しくなくて」

「つかみどころの無い、それでいて万物に通じた香り、らしい」

「哲学的ですね」

「君のようだろ？」

「まさか」

アイコンタクトで逢瀬を約束して、目的の書架へ足を向ける。

古い木製の緩い螺旋階段を下りる。

上へ昇ったら、歴史や学習の為の一般の書籍。下へ降りると魔法に関する書籍。

ハイアルトしか読むことが許されないセクションが延々と続く。

そして、高等魔法書の書籍がずらりと並ぶ一番奥の角が僕の閲覧席になる。

小さな窓際に余っていた机と椅子を持ち込み、周りを書架で囲んだら即席の自習室ができあがり。

傍には古い本の保存や、劣化した本を補修する為に一時的に保管する書庫への出入り口がある。

僕がキリハラ先生と逢い引きする場所は、もっぱらそこだ。

誰もこんなところまでは寄り付かないし、中は広いし、案外涼しくて居心地がいいんだ。

マホガニー製のカウチの上で閉館まで楽しむこともしばしば。

伽羅の香を燻らせてやる時の艶かしさはたまらない。

キリハラ先生は大人だし、ハイアルトでもある。色んな魔法の術を手に入れているから仲良くなつて損はない。魔法の技術だけではなく、大方の性技は彼から教えてもらった。

彼はとても上手いのだ。

勿論彼の相手は僕だけじゃないし、僕だって彼の他に愛人はいる。

今付き合っているのは同学年のアイラと、ふたつ上のイシュハ。

アイラはアルトで気の利く女の子。お互いにセフレ以上の進展は望んでいない。

イシュハはイルトだが、非常に精神力が強く、信用できる男だ。

彼と付き合い始めたのは、興味本位からだった。

アルトがイルトと付き合ったら、どういふふうな精神状態になるのか、自分で試したかったからだ。

昔から言われる、アルトはイルトに従属してしまうのは何故かと言う疑問は自分で解明したかった。

なるほど、僕の場合でも確かにイルトであるイシュハを一旦信用してしまうと、こちらから裏切るのは罪深く思えて、彼を傷つけたくなくなる。彼の信用が深ければ深いほど、彼の為にたまらなく奉仕したくなるのだ。

自分の精神がふたつに分かれるでしょう。

彼を冷静に見つめている自分と彼に従属したい自分がいるならば、常に彼の為に何かしたいという欲求が勝ってしまうのだ。それを不思議だと感じながらも、その欲求に従ってしまう。

僕がそこまでイシュハにのめり込まなかったのは、彼がそのことを知って、僕を縛りつけるのを恐れたからだ。彼は「僕らの関係は友情に押し留めておこう」と提案した。

僕は彼の虜になる僕自身を逃れた。

彼の精神力と忍耐に感謝している。

アルトは一旦イルトに惚れてしまったら、魔法をかけられた如く、相手に靡き、従属されてしまうという事実を僕はこの時、実体験したわけだ。

「あ」

いつものように魔法書を解読していると、横の本棚から覗く顔があった。

「メルだ」

アーシュが本を手にこっちを見ていた。

「何してるの？」

嬉々とした顔でアーシュは僕の机に小走りで近づき、椅子に座る僕の隣りに身体を寄せた。そして僕の手元を覗き込む。

「呪文の解読だよ。特殊な文字で書かれてあるだろう？これはラノ語でしか解読できない文字の配列だから一旦ラノ語の辞書で調べて、さらに通常の言葉に直すんだ。それでも音にできない言葉も多いから難しいよ」

「ふーん。ちよつと見ていい？」

「うん」

アーシュは原書を手に取り、じつと見つめる。

しばらくして「やっぱわかんないや。まあ、いいや。全部身体に入ったら必要な時は引き出すことにするよ」と、言う。

「何？どういう意味？」

「意味なんかないよ。呪文って音符だね。意味なんかない。解読なんかしても意味ないよ。言葉じゃないもの」

「面白いいことを言うね。アーシュ。じゃあ、どうやって魔法の呪文を唱えるの？」

「知らないよ。だって今この呪文は俺に必要なから」

不思議な事をいう子だ。呪文は魔法を使う為にはなくてはならぬもの。言葉が音になり、自然界の精霊や異次元の者を召喚し、己の味方として力を得ることになるのに。

「……」

「でも必要な時は、メルに教えてもらいたいな」

アーシュはあっさりと本を返して、僕を見つめる。その言葉の意味を僕は見落とさないようにしなければ。

「見返りは？」

「身体で払うよ」

ほら、彼はちゃんとわかっている。僕が欲しがっているものを。

「そう、期待してる」

僕は彼の腕を取り、僕の膝に彼の腰を引き寄せた。彼は嫌がりもせずに、僕の膝の上にきちんと腰掛ける。彼の腹に両手を合わせ、彼の耳元に問いかける。

「もうルウとしちゃったの？」

彼は一瞬驚いた顔を後ろにいる僕に見せたが、すぐに平気な風を装った。

「……うん、まだ」

「僕が先に頂いてもいいってわけ？」

「駄目だよ。セキレイと約束してるもの。するのもしられるのも一番最初はお互いだよって」

「つまらない約束ね」

「つまらない事には意味があるもんだよ。メル」

そう言うところ、アーシュは身体を下に降りつつ、僕の顔を見上げ、僕の口唇にキスをした。

「メルのことを嫌いになりたくないから、俺には優しくしてよね」
初心な色目を使い、アーシュは弾くように僕の膝から離れた。

「司書の先生がお待ちのようだから、お邪魔虫は退散するよ。じゃあ、またね、メル」

そう言つて、アーシュはここから離れて行った。
まるで疾風のように、僕の心までも連れ去つて。

その後の情事はキリハラ先生を困らせる羽目になった。
なにしろ彼が僕から盗んだ欲情を引き戻すのに一苦労だったのだ。

放課後、寄宿舎に帰るまでの時間、たまに図書館の自習室で過ごす。

中等科に進級するまでは、セキレイたちと宿題を見せ合ったり、林の奥の廃屋になった薪小屋の秘密基地で騒いだりが日常だった。だけど、今はセキレイと居てもお互いを束縛しあうのは極力避けている。

今までのように無邪気にバカ騒ぎをするわけでもなく、ただこの平凡な学園の中に漂っている感じ。

それが悪いとは思わない。

大人に向かう季節なのだと感じていた。

近頃、セキレイは俺の部屋に来る事も少なくなった。俺も別にそれを責めたりしない。

誰か別の奴と寝ているとなれば、話は別だが。

とにかくこの図書館にはなにか気になることがあれば、足を向けるようにしている。

中等科になるまでは、校舎にある簡易図書館で大概の調べ物は済ませられた。

もともとこの図書館へは中等科にならないと閲覧はできない。

この街最大だと言われる「天の王図書館」は、この世界のすべてのことが理解できるとまで言わしめる充実した蔵書が自慢だ。

しかし、借り出されるのは一日に一冊、しかも館内の閲覧と決まっていたから、仕方なく自習室で読書をする。

適当に手に取った雑誌は、あるカメラマンの旅日記だったが、こ

の街以外を知らない俺には、他所がどんな街なのか、風景なのか興味津々。

カメラに写された風景は、その土地独特な建物や着物、人々を写していた。

彼は彼の地での魔法使いについても語っていた。

「いくつかの街では、魔法使いがノーマルな人々と同じように生活をしている。その様相や生活を見ても彼らが異質な者とは思わないだろう。

彼らは力を持っているが、それを持たない者たちへの為への恩恵だと思うところがある。

魔法使いは観念的な善悪には疎く、自分の主人である人の意思に沿う為、主人が彼らの力を利用し、犯罪を犯すことも、歴史的には多い。

その為、現在では、犯罪を行った魔法使いとその主は、共に罪を荷うことになる。この逆も然りである。

この逃れられない僕^{しもへ}たる魔法使いの哀れな運命、もしくは末路を想う時、私は一縷の涙を落す。

彼らに本当の自由の意味を知る日が来るのだろうか……天を仰ぐ。」

つまりは魔法使いはこのサマシティだけではなく、他所にもいて彼らも何らかの規律において、イルトへの忠誠を誓わされている。

これは遺伝的なものなのか、天からの使命なのかどうかはわからないが、アルトとして生まれるか、又は平凡なイルトに生まれるかは、大きな運命の分かれ目だ。

そういえば、俺がホーリーになってから、やたらとイルトの生徒から交際を申し込まれる。

俺にはセキレイがいるからと断っても、しつこく「愛人でもいい。一度寝てくれるだけでもいいんだ」と、お願いされる始末。

俺のアルトの力を欲しがっているのはわかるけれど、寝たからって、俺が従属するわけでもないだろうに。

現にベルは結構な数、イルト、アルト構わず寝ているが、彼が誰かに傾倒しているとは思えない。また、彼らの為に力を施したとも聞いていない。

どこまで情を通わせればイルトとの従属関係が生まれるのだろうか。人それぞれで違うものなのだろうか…

「探したよ、アーシュ」

息を切らしたセキレイが自習室のドアを開けて俺を睨んでいる。

「図書館に行くって言ってなかった？」

「聞いてない。おかげで寄宿舎や薪小屋まで君を探しに行ったじゃないか」

「悪かったよ。で、用事はなんだい？そんなに急いでるくらいだから、重大な話なんだろうね」

「…重大だよ。…僕にとっちゃ…」

「だから、なに？」

ほおっておかれて拗ねているのか、セキレイはそっぽを向いて、俺の机の前に立った。

「寝て、欲しいんだ」

「…いつも一緒に寝てるじゃないか」

「バカ、意味が違う。セックスしたいって言っているんじゃないかっ！」

「…」

…マジで勘違いしていた。

薄っすらと赤くなったセキレイの頬を見て、俺は自分の鈍感さを詰った。

セキレイとは去年の冬に初体験を試してはみたが、上手くないか、その時は、時が熟してない……みたいなことで濁していた。まあ、お互い好きなことは判っているし、情欲なんて歳をとって思春期になりや盛ってくるもんだと思っていた。

セキレイの気持ちも知らずに今までほっておいた自分が悪いのはわかっていた。

「ゴメン、セキレイ。気づいてやれなかったね。君がそんなに焦っているなんて……」

「あ、焦ってないっ!」

「そう?」

「……アーシュはイジワルだ。そうだよ、焦っているよ。大体、君が悪いんだからね」

「何が?」

セキレイは不機嫌に眉を寄せて、乱暴に正面の椅子を蹴った。

「僕が何も知らないでも思ってる?」

「だから何のことよ」

「……メルだよ。僕が彼のこと嫌いだって知ってるくせに、いつもメルにくつついているじゃないか。それにこれ見よがしにキスまでしてさ。僕との約束は忘れたの?」

いきり立つセキレイの言葉に俺は正直驚きを隠せなかった。と、
「うか……嬉しい。」

「メルに嫉妬してるのか?」

「当たり前だろ? 彼は君をものにしてしている。そして君は何の疑いもなくメルに取り込まれている。事実だろ?」

「……」

確かにふたつ上のメルと仲良くなった経緯は、セキレイにもベルにも話していない。

メルが俺を欲しがっているのは重々判っている上で、俺は彼の知識や俺自身を受け入れてくれる寛容さに惹かれている。

セキレイやベルにはない、彼の危険な情念が常に俺に向かっていて、それがどうにも心地いいのだ。その想いを振り回すことの快感さえ感じているのだから、始末に負えない。

性格が悪いと詰られても仕方ない話だ。

「黙ってないで何とか言ったら？アーシュ」

「君がそんなに嫉妬するなんて、ちよつと新鮮だから、見惚れていた」と、言ったら嬉しい？」

「…バカなんじゃない？」

「まあ、何の疑いもなくメルと接しているわけじゃないよ。彼は俺を抱きたいと何度も言っているし、俺も彼と寝てもいいと思っている」

「…ひどい」

「でもセキレイが一番大事だし、君の許し無しで彼とセックスはしないよ。それでいい？」

「…納得できないし、なんとなくムカつく。でもそれがアーシュの決めた事なら…」

「こつちへおいでよ」

俺は手を差し出し、彼を招き入れる。

彼を俺の膝に座らせ、向かい合って抱きしめた。

「ここでやる？」

「え？」

「それを目的に自習室を使う奴らも多いんだぜ？ちよつどいい広さだし」

机ふたつだけを置いた狭い自習室には窓もない。ここでしけこむ生徒も多い。

舌を絡ませたキスを充分に味わい、音を鳴らして離れたら唾液が

ツツと伝わった。

セキレイは満足そうに笑った。

「ご機嫌はなんとか取り戻したらしい。」

「…何だか卑猥だ」

「欲情するにはいいセツトだろ？」

「そんな風に盛り上げないとセックスはできないもの？」

「さあ。やったことが無いんで、俺もわからない」

そう言うのと、セキレイはぷーっと噴き出し、声を出して笑った。

「やっぱりアーシユが一番好き。早く君と抱き合いたい。こんなところじゃなくて、フカフカのベッドの上がいいんだ」

「俺もこの痛い体制よりも、自由なベッドがいい。今宵どうですか？我が君」

「お待ち申し上げております。我が王、アスタロト」

初夜の申し出は受けたものの、今度は失敗は許されない。ベルに話でもして気を紛らわそうとを訪ねても週末で彼は帰省していた。仕方なしに覚悟を決めて、俺を待つセキレイの部屋へ乗り込んでいった。

目覚めた僕は、清らかに魂育みこころ 淫らに愛を営み、歡喜する

どちみち俺達がこうなることは、生まれる前から決まっていたことなんだ。

それを知ってしまったからこそ、俺はセキレイを抱くのが怖かった。

愛を知って飢えた心を満たしたセキレイは、きっと、俺から離れ

ていくだろう..

> i
2
9
2
4
8
—
2
7
3
<

P r i v a t e K i n g d o m 1 0

P r i v a t e K i n g d o m

10

今日と明日は連休で皆自宅に帰り、中等科の寄宿舎に残るものは十人にも満たなかった。

いつもは休日でも世話をしてくれる寮母さんも休みで、夕食は大鍋に作り置きしたビーフシチューとパンを勝手に食べるだけだ。

別段変わったことではないけど、俺とセキレイはなんだか変に緊張して、言葉も少なく、シチューとパンとせつせと口に入れた。

別々にシャワーを浴びて、自分の部屋へ戻り、夜が更けるのを待った。

ベルから貰ったエロい雑誌を開いたりしたけれど、なんだかそんなことより、セキレイとずっと過ごしてきたこの十年近くを思い出し、センチメンタルに浸ってしまう。

セキレイと出会う4つの時まで、俺はひとりだった気がする。

いや、周りの誰もが親切で暖かく、穏やかに接してくれた。先生も友人も嫌いな奴なんて居なかった。

それでも、俺はこの世界でたったひとりなんだと、ずっと感じていたんだ。

拾われっ子であった所為かも知れない。

俺自身がどこかで人と交わる事を拒んでいたのかもしれない。

誰もが俺とは違う生き物だと感じ、それは改めて言うことではないにしても、仲間意識には繋がらなかった。

アルトの性^{さが}だと言われればそうかもしれない。

だけど、俺はセキレイに会えた。

セキレイに会えて、初めて俺は自分以外の大切なものを知ることができた。

彼は他の奴とは全く違っていた。

俺は本能的にそれを知り、また俺とも違うことも知ってしまった。俺達はお互い独りぼっちだったのだ。

その孤独さがお互いを繋ぎ合わせたのかもしれない。

セキレイへの愛しさは、他の誰とも比べようがない色合いになる。彼を…失くしたくない。

そんな思いに囚われていたら、セキレイへの愛しさが半端なく募って、俺は彼を抱く尊さに胸がジンと熱くなってしまった。

セキレイの部屋に向かうのには勇気が要ったけど、それでもドアを開けて、仄かにピンクに染まった彼の顔を見て、愛しさが溢れだした。

失敗なんか気にしてる場合じゃない。

俺達は結ばれる為に存在している。

そうじゃないのか？

「ごめん、待った？」

「…ううん、大丈夫。少しワインを飲んでいたの」

「へえ」

机にワインボトルとグラスが置いてあった。

「この間、ベルと三人で飲んだ残りがあったからね」

「俺にもくれる？」

「飲んでしまつて、もう無いの」

「君ねえ」

セキレイは少しむくれて「早く来れば残っていたのに、無理矢理飲んじやったじゃないか」と、自分のバツの悪さを隠そうとする。

それが何ともかわいく思えて、彼の腕を引き寄せた。

「まあ、いいさ。ともかくベッドへ行こうよ。先行き不安も見えなくもないが、君は酔った勢い、俺は過去からの情念に背中を押してもらってさ、上手くいくように祈ろう」

セキレイはふふと笑い、俺に従った。

裸のままベッドに横になった。

セキレイは俺の眼鏡を外して、枕もとのテーブルに置いた。

「本当は眼鏡の無いアーシュは少し苦手なんだ」
「どうして？」

「色っぽくて困るもの。でも僕以外の奴らには見せたくないのも事実だよ。アーシュは…誰をも惹きつけてしまうから、とてもヤキモキしてしまう。…つまらないことだけどね」

「そんなことない。俺だつてセキレイが誰か他の奴と仲良くしているのを見たら、ムカつくもの」

「ホント？うれしいな」

「ずっと…4つの誕生日に君を見つけた時から、俺はセキレイを自分のものだと思って束縛した。そのエゴを君は許してくれた。ありがとう。大好きだよ、セキレイ」

「アーシュ…」

ゆっくりと開いていく…

お互いの身体を出来る限り繋ぎ合わせ、隙間なく密着させた。

残りの部分は、至る所を口唇で触れた。

セキレイもまた同じようにキスを繰り返す。

ふたりの結びつきは、それまでのそれぞれの杞憂に過ぎなかったと言えるほどに上手く運んだ。

自然体でありながらも、想像以上の充実感が満ちていた。

セキレイが「アーシュ」を切なげに呼びながら、揺れる顔を見せる。

セキレイの中で俺もまた揺れ続けた。

初めてにしては上出来だと、言葉に出さずふたりで顔を見合わせ笑った。

その後、セキレイは自分の番だと言い、俺の中に入りたいと言うから、勿論おいでと言った。

違った観念が生まれ、お互いに声を、耳を、身体を震わせ、行き着くところまで浸透させた。

酔いどれた官能がお互いを満たし、まるで宇宙に漂っているようにだと、彼は呟いた。

ずっと繋がっていられたらいいね、と言葉にせずに伝えた。

セキレイはコクリと頷いて笑う。

手を合わせた指先から、溶け合うような感覚と、触れ合う胸の鼓動が痛いほどにお互いの肌に伝わる。

何事かとお互いを見合わせた時、セキレイと俺の身体が白く発光した。

その瞬間、俺達の身体は浮き上がり、瞬く間にセキレイの部屋からワープしたのだ。

俺達は裸のまま、草原に寝転がっていた。

さわさわと風にそよぐ草むらから、ミントの淡い匂いがあたり一面に漂っている。

「薄荷草だ」

俺達の寝ている絨毯は薄荷草の茂みで、身体中にミントと草の匂いが立ち込めている。

「ここは…どこなんだ？」

先に身体を起したセキレイが驚きの声を上げる。

「見て、アーシュ」

「あ…」

セキレイが指差した先は、見たことも無い景色だった。

緑の草原の地平線の先、広がった暗黒の世界、

その暗闇に数知れず瞬く星々と、惑星、衛星、星雲、ガス状の雲
… 図鑑で見た宇宙の景色。

… 圧倒される。

まるで宇宙船の外に投げ出された迷い子のように不安になる。

自然にお互いを抱きしめあった。

「… どうしたんだろう。一体何が起きたの？」

「多分… 次元を超えたんだろうね」

「え？ なんで？」

「セキレイと俺の官能の力が、俺達を異次元に運んだんだ。魔力にも相性がある。きつとセキレイと俺の官能の力は、想像をはるかに超えるのかもしれないね」

「トウエは喜ぶかしら」

「… さあ、あの親父はああ見えて食えねえところがあるからな。こつちもホイホイと利用される気は毛頭ないぜ」

「別に… 僕は利用されても構わないんだけど。だって彼は親みたいなものでしょ」

セキレイはそう言って立ち上がり、ゆっくりと歩いていく。

裸ではあんまりだと思ったが、辺りを見回しても身体を覆うものはない。

仕方が無いから裸のまま、セキレイの後を追った。

「ほら、合歡の木だ。花が咲いて、甘くていい匂いがする」

草原に一本だけ育った合歡の木に、セキレイは手をあてた。

「合歡はセキレイの木。薄荷草は俺の匂いだから、やっぱりここは俺とセキレイの願いの場所らしいね」

「アーシュの瞳もあるしね」

「え？」

「宇宙の星の煌きは、アーシュの瞳の中にあるんだ。だからここはアーシュと僕の身体の中なのかも知れないね」

「おもしろいね。内と外、空間は質量とエネルギーの移動により、より相対的概念を結びつける。しかし、理論的には難しい話だね。だって、これは俺達の中だけにしか確立しない場所だ」

「…アーシュは時々つまらないことを言うね。ここは僕と君の秘密の楽園って言った方が、らしくない？」

「…そういうことにしておくよ」

俺達は合歡の木に凭れ、香りと果てしない宇宙の景色を楽しんだ。時が経つのも忘れてしまいそうになる。

「いつまでもここに居たい気もするけど、それでは駄目だともわかってるよね」

「うん、ここは特別な秘密基地みたいなものだ。僕らの生活する場所じゃない」

「じゃあ、リアルに戻ろうか」

「え？そんなに簡単に戻れるの？」

「まあ、なんとかなるよ。おいで、大丈夫。俺に任せて。うまく君の部屋のベッドへ帰りつくようにするよ」

「へえ、自信満々だ。じゃあ、僕は何をすればいい？」

「もう一回官能を味わいたいって、祈ってて」

もう一度、俺達は身体を繋ぎ合わせた。

二回目のトリップは案外簡単だった。力の抑制は意外にも理性に比例したのだ。

だが無事にベッドに戻ってきた時は、ふたりとも指先さえ動かす事もできないほど疲れきってしまい、泥のように深い眠りに落ちた。

それから翌日の夕方、宿舎に帰ってきたベルが部屋のドアを叩くまで、ふたりの情眠は続いた。

天使の楽園、悪魔の詩 8

休日自宅を過ごし、翌日の夕方、寄宿舎に帰った俺は、ふたりが気になって仕方なかったから、すぐにアーシュの部屋へ向かった。アーシュは部屋におらず（彼はいつも鍵などかけなかった）、ルウの部屋へ向かう。

ドアをノックしようとして、少し躊躇した。

上手く番^{つが}いになったふたりを前に、俺は平然としていられるだろうか… 変わらない友情を彼らに捧げられるのだろうか…

それでも逃げるわけには行かなかった。

本当の愛を交わしたふたりを確認することは、別な意味で、俺の望みでもあったはずだったから。

そう考えてなんだか自分のこの感情がおかしくなってしまう笑みが零れた。

大丈夫だ。

あいつらを守りたくて、俺はここに居るんだから。

気を晴らした俺は、部屋のドアを少し乱暴にノックする。

しばらくして眠たそうなルウの声が聞こえた。

「俺だよ。今、帰ってきたところ。お土産を持ってきたんだ」

「ベル！」

ルウの嬉しそうな声とバタバタと騒がしい足音が聞こえ、目の前のドアが開けられた。

「ベルっ！お帰り」

無邪気に俺に飛びつき、首に腕を回す。

「その分じゃ上手くいったみたいだね、ルウ」

「うん。全部ベルのおかげだね。まあ、入ってよ」

「…アーシュは？」

「まだ寝てる」

部屋に入ってベッドを覗くと、アーシュは裸のまま寝ている。

「アーシュ、起きなよ。ベルだよ。お土産だつて」

「はい、これ、極上の赤ワイン。66年ものだつて。君らの初体験成功のお祝いに」

「…ありがと、ベル」

ぽつと頬を赤らめるルウがかわいい。

「…なあに？うるさいな…」

瞼を擦りながら、アーシュがやっと起き上がる。

跳ねた髪もそのままに、眼鏡の無いアーシュは…眩しいほどに美しい。

「アーシュ、裸のままでいいないで、何か着ろよ」

「別に君とベルの前で裸でいたつて、照れる関係でもないだろう」

「だって…痕が残っているじゃないか」

アーシュの裸を見て、ますます真っ赤になったルウが、あわててアーシュにシャツをほおり投げる。

「なんで照れるの？自分が付けておいてさ。なあ、ベル。可笑しいよね」

「アーシュが無頓着なんだよ。恥じらいは恋する者たちにとって大切な甘味料さ。無頓着は鈍感とも言える。アーシュはルウの繊細さを労わつてやれよ」

「はいはい、恋の指南役の助言は素直に受け取ることします」

服を調えたアーシュは、「あゝ、もう夕方じゃん。何も食つてないからお腹が空いてたまらないや。早く何か食わなきゃ飢え死にしまつよ」と、俺達には構わずにさつさと食堂へ向かう。

それを追っかける俺とルウは「全くもって、さつきの助言は役立

っていないらしいね」と笑う。

少しも変わっていない。

俺はいつもと変わらない三人でいられることに、胸を撫で下ろした。

彼らの関係に肉欲が増えたとしても、俺に対する距離や態度は変わった風もなく、むしろ信頼度は上がった気がする。

ふたりの間では交わされない話も、何故か俺には話しやすいと言い、それぞれの愚痴を聞いてやるのも俺の役目らしい。

結局は惚気になるんだが、無視されるよりはこうやって何でも隠し立てなく話してくれる関係はありがたかった。

「ベル、いる？ちよつといいかな？」

森の中にある廃屋の薪小屋を三人で手を居れ、秘密基地にしていた。その小屋の天上から吊ったハンモックに寝そべって本を手に半分うたた寝していたところに、アーシュがやってきた。

「…な、に？」

上半身を起して、アーシュを見る。

季節は夏が始まったが、上着を着ていても汗ばむことはなく、夜が遅くなる白夜が始まる。

アーシュは上着は着ずに、シャツのリボンを弛めながら、近づいた。

「走ってきたから汗掻いちゃった」

俺が持ってきた水筒の水をゴクゴク飲んで、大きく息を付く。

俺は汗を拭くようにと手元のタオルを投げた。

「汗を掻くほど急ぎ用があったのかい？」

「いや、雨雲に追っかけられた。すぐに雨が降るよ」

アーシュの言葉が終わらないうちに、部屋が一瞬のうちに暗くなり、大粒の雨が音を立てて、降り始めた。

「ほらね」

開けっ放しを窓を閉めて、アーシュは得意げに目配せする。

「通り雨だから、すぐに止むと思うけれどね」

本を伏せ、ハンモックから降り、水筒の残りを確かめて、それを飲み干す。

ふと、間接キスじゃないかと思ったり…つまらないことに喜びを見い出す自分に苦笑せずにはおれなかった。

「ひとりで来たの？ルウは？」

「さあ、たぶん図書館じゃないのかな」

「ちよつと前までは君の方が入り浸りだったのにね。面倒なレポートでも出たの？」

「色々調べたくなる年頃だよ、俺達は」

「…」

どしゃぶりの雨を眺めながら言うアーシュの横顔に見惚れ、その言葉の意味を追求しなかった自分を後になって思えば愚かだった。

「ねえ、ベル。変なことを聞くようだけど、君は色んな奴と寝ているだろう？」

「え？…ああ、まあ…褒められた話じゃないけれど…ね」

急に何事かと、一瞬戸惑ったが、真面目なアーシュの言い回しに、冗句でかわすわけにはいかない気がした。

「セックスしてて、官能…s e n s oの力を感じることもある？」

「s e n s o…か。つまりエクスタシーの頂点に行き着く時にそれを魔力に変えるってことだろう？でも具体的にどんな力になるのかは、わからないし、試したこともないよ」

「何故試さない」

「何故って…やってる時に魔力を使う状況に陥ったことはないし…
第一、好きだからセックスしたいって言う奴としてさ、相手は快感しか求めていないのに、魔力云々って…俺はあまり考えられないんだ」

「…バカ、クソ真面目」

手加減の無い言い回しにさすがにムツとする。

「ホーリーほどの力の備わったおまえが、力の使い道ぐらい考えてセックスしろよ。俺達は力だけは普通の奴らよりも充分に備わっているんだから、後は目的によっていかに使いこなせるかだ。それを自分のものにしなきゃ宝の持ち腐れなんだよ。ベルが将来、実業家になるのは勝手だが、だからって魔力を使わないって手はない。それに *sensō* は交わる相手との相性が大きいんだ。いい相手を探すのも重要だ」

「…どうしたんだよ、アーシュ。急に魔力の話なんて。確かに俺達はハイアルトの中でも選ばれたホーリーではあるけれど、その使い道さえ教わっていないんだぜ。どうやって力を自分のものに出来る」

「教えないのは、イルトとの密約があるからだ。無駄に力を鼓舞してイルトを押さえつけたら事だしな。だが勝手に学ぶ事を禁止してはいない。ワザとだよ。学長は勝手に学べと言っているんだ。セキレイが図書館に通うのも、自分が欲しい力の使い道を知りたいからだ。力は自分の望む形になる。俺とセキレイは、セックスをして何度か、違う次元にトリップした。夢でも幻想でもなくて、リアルにワープしたんだ。それが *sensō* の力だ。けどね、好き勝手に行けるわけでもない。それを自在に操る技量をこっちも持たなきゃ、何の意味もない。俺達の力ってそういうものなんだよ。目的を持つてはじめて意味を為す」

「だから…」

「だから…相手を探すことにした」

「え？」

「経験だよ。相性のいい相手と寝てみて、どれくらいの s e n s o
が確かめる必要がある」

「何の為に？」

「…自分の為…かな」

「それって…メルと寝るってこと？」

「そういう事になるのかもしれないし、メルに限ったことでもない」
「ルウは知ってるの？」

「…セキレイは彼なりに努力している。でも彼ではできない事もある。それを導くのは恋人の俺の役目だろうね」

「…アーシュ、君は一体何をする気なんだ」

「冒険…したよね、三人で。ずっと続けばいいなって思っているよ」
「…」

アーシュが何を求めているのか、俺にはわからなかった。

「ベル。俺はね、自分よりも君のことを信用しているんだ。君の魂
って、昔と変わらずとっても綺麗なままなんだもの」

「アーシュ、メルと寝ないでくれ。ルウも…俺も辛いよ」

「メルは案内人だよ。絶対に彼の力が必要なんだ」

「…俺では、駄目なのか？」

アーシュは一瞬驚いた顔を向け、そして心から嫌そうな顔を見せた。

「ベルと寝るなんて、ご免だよ。言っただじゃないか。君は俺の一番
綺麗な場所に住む親友だよ」

「アーシュ、俺は…」

「もし…君がセキレイと寝ても、俺は裏切られたとは思わないよ。
俺達は君を愛しているからね。あ、雨が止んだ」

窓を開け、明るくなった空を仰ぐアーシュの横顔は、昨日よりも
大人びて見える。

一学年が終わり、夏季休暇が始まる。

叔父の家へ行く俺に、ルウとアーシュが揃って見送りに来る。

「暇が会ったら、うちへおいでよ。学長に許可を貰えば一週間ぐらい外出は大丈夫だろう」

「うわ、それいいね」

「ベルの叔父さんに会えるの？」

「一発殴ってそれから、仲直りのキスをしてやる」

「…アーシュは本気でやるよ。ベル、叔父さんに逃げるように伝えておいて」

「うん。じゃあ…待ってるから。それまでさよなら」

「元気で。ベル」

揃って両手を振るふたりを振り返りながら、この休暇中にアーシュはメルと寝るのだろうか…ルウはそれを知ることになるのだろうか…と、そればかりを考えていた。

見慣れた景色が目の前に広がる。

車が玄関に到着すると同時に俺は飛び出し、玄関の戸を開けた。

ホールで待ちわびていたエドワードの顔を見た途端、抑えていたぐちゃぐちゃな感情が溢れ出た。

驚いたエドワードが俺を抱きしめるから、益々甘えなくなる。

「お帰り、クリストファー。年々再会が待ち遠しくなるのは、私が歳を取った所為かな」

「エドワードが俺を本気で好きになったからだよ」

「そう…だろうね。どうした？会えて嬉しいにしては…冴えない顔だぞ」

「エドワード。俺、恋をしたんだ。本当の恋を…叶う事の無い恋なんだ。すごく…辛い」

「ナリはでかくても、春少年だね、クリストファー。なあに、簡単に叶う恋より苦しんだ恋の方が、数倍もの価値があるって思えばいいのさ」

そう言っ、て、幼子のように俺の髪を撫でるエドワードに涙が出た。

その夜、エドワードに抱かれ官能の波に飲まれながら、閉じた瞼の裏で繰り返し同じヴィジョンを見た。

メルに抱かれたアーシュが濡れた紺碧の両眼で、俺をじっと見つめていた。

> i 2 9 8 7 3 — 2 7 3 <

浄夜 3

3、

キリハラカラルとのセックスはいつでも刺激的で十分な満足感を得られるから好きだ。

彼は僕の初めての相手だった。

初等科の頃から気になっていたんだ。

淡黄白の肌に亜人の風貌とノスタルジックな空気を纏う彼は、「天の王」の住人の大方を占める僕達コーカソイドとは存在感が違っていた。

彼は教師の中でも高位のハイアルトであった。僕にとっては好都合。

彼に指南役を務めてもらうことが僕の願いでもある。

中等科になって図書館に通えるようになってからは日参し、キリハラに興味を持ってもらうように努力した。

僕からお願いして抱いてもらったのは一年の冬だった。

キリハラは生徒を相手にすることを躊躇しない。

誰でもいいとは言わないが、魔力への興味がある生徒には男にも女にも比較的寛大に条件を飲む。

キリハラには自国に奥さんも子供も居るが、もう会うことは無いらしい。何故なら、この「天の王」で残りの生涯を終えることを決めているからだと言う。

三十過ぎの男にしては悟りすぎだろうと責めてみたら、「奥さんに愛想を尽かされたんだ。私がいかにペシミストだったからね。ここへ着てからはそういう感覚も薄くなりつつある。若者の情熱の前ではこちらのつまらない悲しみなんて焼かれて灰になるしかない。それが繰り返されれば悲しむ暇も無いからね」

「じゃあ、先生は今は幸せなの？」

「そうだね。君みたいな綺麗な子を抱いているのだから、不幸とは言えまい」

「ああ…すごくいい」

キリハラカヲルは僕を天まで昇らせてくれる。そしてワープ。異なる世界へ行く。

「sensor」の力は行く距離を選ばない。だが好きな場所へ飛べるかと言うとまだ無理だ。

官能と感情は違う。バランスを取るのは難しい。

抑制と恍惚感をグルグルと巡り、辿り着くのは思い出の場所が多い。

緑色のトレーラーハウスが僕の家だった。

一定の場所を決めずに次元を渡り歩いた。僕らはそういう種族だった。

近くに静かな湖畔がある。

僕が両親と最後の夏を過ごした場所だ。

キリハラから身体を離してその家に近づいてみる。

「確かにここは僕と両親が住んでいたトレーラーだ。だがどうやってここへ来た？生まれた場所はここじゃない。どこを旅したのだろう…それを思い出せないんだ」

「記憶で辿るものじゃない。君に起こったことは記憶ではなく、時刻にある。知りたければ時間を遡ればいい」

「…それを知ってどうするの？僕は『天の王』に預けられた。両親が旅を続けるのに僕が邪魔だったからだ」

「両親の気持ちを知りたいのなら、本人達に聞けばいい」

「聞いたところで過去が変わるわけではない。それに…僕はもうとつくの昔に諦めてる。親を恨んだりすることを」

「メルの悪いところはペシミストになりがちな性格だね。この学園

に預けてくれた両親に感謝をしたらいいんだよ」

「…それをあなたが言うの？」

「今の私はオプチミストだよ。だからこうやって生徒たちとの情事を楽しんでいる」

僕を包んでくれる暖かい腕が、今の僕の欲しかったものだと思われる。

「アーシュから誘われたんだがね」

書庫でのいつもの情事の後、着物を整えながらキリハラ先生が呟いた。

「え？アーシュが？」

僕としては不本意。だってアーシュに粉をかけたのは僕が先だ。

「そう。『s e n s o』を体現したいから抱いて欲しいって。率直すぎて笑ったんだが」

「それで？」

美人好きのキリハラだからこちらも気が気じゃない。

「勿論断ったよ。あんなの…怖いじゃないか」

「怖い？…」

「その怖さに気づかないところが若さゆえだね。それに、横取りしてメルに憎まれたくないからね」

「良くわかってますね」

「あの子に必要な『s e n s o』は君の方だ」
「…」

闇の様な黒いまなこですべてを見透かされてしまう。

「僕は彼を導くことができる？」

「君の努力次第だよ、メル」

耳元で囁き、キリハラは書庫を後にする。

ねえ、僕らは何に導かれているんだろうね…

「メル、俺ね、セキレイとしちゃったんだけど」

中等科を卒業し、夏季休暇が始まっていた。

殆どの学生は帰省するが、僕らは帰る家が無いから寄宿舎に居残り組みだ。

高等科の寄宿舎への引っ越しも終えた僕は、図書館へ向かっていったところだった。

その途中でアーシュに会ったのだ。

「そう良かったじゃないか。上手くいった」

「そうだけどさ…ほら、前に言ってたじゃない。セキレイとしたら色々教えてくれるって。覚えてる？」

「…」

なんだ？そっちから誘ってくれるのか？

…いや待てよ。美味しい話には毒があるって言うじゃないか。それにこいつは僕よりも先にキリハラを誘っている。

キリハラにフラれたからってこちらがホイホイありがたがるなんて思われるのも癪にさわる気がする。

「僕でいいの？僕が君に教えられるのは多くないかも知れないよ」

「…？」

アーシュは立ち止まって首を傾げる。その様がなんともかわいらしい。…計算だろうか。

「なに？」

とうとうこっちも立ち止まって、問いかける。

「メルはもう俺を欲しがっていないのか？俺とセックスしたいと思わないの？」

「……」

その表情。

照れなんぞ一欠けらも見当たらない。

ああ、降参だよ、アーシユ。

思わず笑い声を上げた。

「したいに決まってるよ、アーシユ。僕はキリハラ先生に嫉妬したのさ。君が彼を誘ったと聞いたからね」

「だってキリハラカナルはあなたを夢中にさせているのだから、きつと上手いハズでしょ？」

「それは保証するけれど……彼は君が怖いんだって」

「へえ」

ニヤリと笑うアーシユにゾツとしながらも見惚れていた。

僕の中で欲情が渦巻く。

「……そりや益々興味深々だなあ」

そう言つて、急ぎ足で僕の横を追い越して図書館の玄関へ向かうアーシユの後を慌てて追いかけた。

僕は完全にアーシユに参ってしまった。

キリハラ先生になんぞ、君を渡してなるものか。

キリハラなんかよりも、ずっと君を満足させてやる。

きつとだ。

浄夜 4

4、

アーシュは迷う事無く、キリハラ先生を目指して突撃した。

カウンターの内側の自前の机の上で、いつものように古本を補修しているキリハラの姿が見えた。

アーシュは、手に持った本をわざと音が出るように、乱暴にカウンターのの上に置いた。

「すみません。返却期限に一日遅れました」

「…これからは遅れないように」

顔を向けたキリハラはアーシュを一瞥して、また自分の手元へ視線を移す。

「こちらを向いて欲しいんですが、キリハラ先生」

そう言われたキリハラは黙って回転椅子を回して身体と顔をアーシュ側へ向けた。

「先生。僕とセックスして欲しい」

さすがの僕も一瞬辺りを見回した。

普段でも静かな館内であり、休暇中の今、いつも以上に人気は無いのだから気にはしなくても良かったのだろうが。

「折角の申し出だけど、君とは出来ません」

「何故？あなたは頼まれたらどんな生徒でも相手にしてくるって聞きましたよ。そりや最後までしたかどうかは知らないけれど。けどあなたを悪く言う生徒なんか居ないんだから、上手いんでしょう？どうして僕では駄目なんですか？怖いから？どうして僕が怖いのか？理由を聞かせてよ」

畳み掛けるアーシュに気押されたのかキリハラはポカンとアーシュを眺めていた。

しばらくして我に返ったキリハラが困った顔を見せ始めた。

「…学長に念を押されているんだよ、アーシュ。君とは寝ないようにつてね」

「…は？」

予想もしなかったキリハラ言葉に僕も、呆気に取られた。

学長自ら、命令するなんて…その意味は、キリハラが大事なのか、アーシュが大事なのか…

悩むところだ。

「そんなの…トウエにわからないようにすればいいじゃない。秘密の場所はいくらだってある。僕はあなたとの『s e n s o』を確かめたい。これって行為の正当な理屈ですよ」

腕組みをして考えている僕とは違い、アーシュはまだ諦めないらしい。

「私は、この学園で働いているサラリーマンなんです。学長のひと言で私の職などどうにでもなる。不況の折、折角の居心地良い職場を失いたくはないんです。わかりますよね」

「だったらトウエに頼んでみる。あなたと寝る事を了承してもらおう」

「…アーシュ、そこまで私に拘る必要はない。君の欲しいものは、ほら、傍らにいるメルが持っているじゃないか。彼は私の良い愛人だよ。できうる『s e n s o』は彼に与えた」

キリハラは僕を指差し、アーシュに僕を選ぶように指示をする。

しかし黙って聞く奴でもあるまい。

その証拠にアーシュは納得できない顔でキリハラを睨んでいる。

「メルでは良くて、なんで俺じゃ駄目なんだ。メルに『s e n s o』を教えたなら、俺にだって教えるよ、ケチ」

「じゃあ、言わせて貰うが…私にだって選ぶ権利ぐらいある。君はまだまだ子供だよ。もう少し大人になってからなら考えてやってもいい」

「…」

辺りに響くぐらいにアーシュの齒軋りがぎりぎりとう鳴る。

「それより、アーシュ君。君は本の使い方が荒い。もっと丁寧に読んでくれなきゃ、困ります。補修も大変なんだ」

「あなたの仕事が無くならない様にしてやってるだけだろ。ありがたと思えよ。いくじなし！」

捨て台詞を吐いて、アーシュは図書館から出て行く。

後に残った僕とキリハラはアーシュを見送り、その背中が消える
と揃ってホツと息を吐いた。

「竜巻みたいな子だ」

「だからいいんじゃない。それより…さっきの話は本当なの？」

「何がだい？」

「学長の…」

「ああ」

「どちらに対しての牽制？」

「勿論アーシュだ。この世でトウエが一番大事なのは…彼なのだから」

「…」

「言っとくが、性的な意味ではないよ」

「そりゃそうだろう」

「私と学長には当てはまらないが…」

「どういうこと？」

「心を覗いてみたら、メル。それより、ね、したくないかい？ 今日
は控え室でやろうか。誰も居ないしね」

「うん」

いまいち納得できる回答が得られないまま、僕はカウンターの
中へ入り、控え室への扉を開けた。

服を脱いで簡易ベッドに寝転がる。すぐにキリハラが僕の身体に乗ってくる。

いつもよりも彼の欲情が強いことに気がついた。

その原因は僕ではなく、アーシュではないのだろうかとも…

彼はすぐに僕の口唇を奪い、幾分乱暴に身体を愛撫した後、繋がらせた。

酷くさせられるのが嫌いじゃない性質の僕は、こういうキリハラも悪くないと思いながら、楽しんだ。

そのセックスに「s e n s o」は要求しなかった。ただ欲望に身を任せることこそ、ピュアなセックスだとも言えるだろう。

終わった後、キリハラは少しだけ決まりの悪い顔を見せた。

冷静さを失わない彼を打ち崩した本人を恨んだに違いない。

僕はそういうキリハラにイジワルをしなくなった。

「ね、先生」

「なに？」

キリハラは腕枕に頭を寄せ、キリハラは黒髪と僕のアッシュの髪を絡ませる。その色合いを楽しむのが好きだ。

「あなたは本当にアーシュを抱きたくないの？子供だからって言うけれど、彼は充分すぎるぐらいに妖艶だし、すでにルウと交わっている。彼を避ける言い訳にしか聞こえないけどね」

「なんだい。妬いているんじゃないかなかったのかい？メルは」

「そうだけど…学長が絡むなんて…思わなかったから」

「勿論：アーシュは魅力的だし、彼に欲情したのは認めるよ。だが、あれは私が手を出すべきものではないんだよ」

「その意味を教えてください」

「どうしても知りたい？」

「勿論誰にも言わないし、あなたを裏切ることとは絶対にしないと誓うよ」

僕は胸で両手を重ね合わせ、そして祈った。

「ある人の枕話に聞いた作り話だ。そう思って聞きなさい」
キリハラはひとつ溜息を付き、目を閉じながら話し始めた。

昔、力のある召喚士がこの世の乱れを嘆き、肅清する力を持った魔者を呼び出そうと毎日食も取らず、寝ることも惜しみ、召喚を続けた。

何日もかけて複雑な魔法陣を黄玉の張り巡らされた床に描き、一心不乱に詠唱を唱えながら、来る者を待ち続けた。

そしてとうとうひとりの魔者を呼び出すことに成功した。

彼は稀に見る美貌であり、知らぬものは誰一人として居ないほど高名で、魔者の中でも最高位の力を持っていた。

だが彼は気まぐれでもあった。（魔者のほとんどが些細なことで意思を変えることは良くある）

召喚士は自分の命と引き換えに、この世が整然と美しく、また人々が豊かに暮せる未来を示して欲しいと、その魔者に願った。

魔者は頭を捻った。

平和や美しい未来など、今まで願われた事はなかった。皆、自分の名声や権力、金、不死、つまりはエゴしか求めなかったからだ。

変わり者の魔者はこの変わり者の召喚士を気に入った。

彼は召喚士にこう言った。

「おまえの望みは変わっている。平和な未来とはなんだ？ 今までの歴史に平和であったことがあるのか？ 一見平和に見えても、その実人間は平和など求めてはおらぬではないか。人間の、いや生きる者の宿命として、戦いやそれに伴うエゴは決してなくなる事はない。またそれが生きる者の本性ではないのか？」

「私が平和や安静を求めるのもエゴではありません。ただ、この

世界に魔法使いとそうでない者がいることが、近い未来の争いの種となることは必定。それを除きたいと願ってはいませんか？魔力は争いに使うものではなく、愛を奏でるものでなければならぬ」「お前達の言う『sensor』の世界を貪りつくしたいというわけか。この世のあらゆるものを欲するよりも最も傲慢な願いだ。だが…それがおまえの本性であるのなら、私も無碍にはしない。私こそが変わり者であるが故、おまえに委ねてみよう」「それでは、願いを聞き入れてくださいますか？」「そうだな…」

魔者は二タリと恐るべき笑みを漏らした。

召喚士はこの魔者を呼んだことを後悔し始めていた。魔者の震える程の美貌からは、同情すら見当たらない気がしたからだ。

魔者は魔方阵の中で、炎をチラつかせ、優雅に歩きながらもったいぶるフリを見せた。

「ああ、面白い趣向を考えた」

立ち止まった魔者は独り言のように呟いた。

「なんでしょう」

跪いたままの召喚士は、魔者の次の言葉を待った。できるだけ不運が少ないようにと願いながら。

「私は私を無垢の姿で生まれさせよう。魔が何かも知らぬ生まれたばかりの赤子の私をおまえが育ててみるがいい。上手く育てられれば、私はおまえの願いを叶えることができるだろう。で、なければ、私はおまえを…この世界を、破壊してしまうだろうね。この本性であるが故に」

「そんな…私があなただを育てる？…私が？無理だ。魔王を育てるなど、できるはずもない」

「想像しただけでも面白いではないか。赤子の私はさぞや美しかろうな。魔に魅入られるほどに…上手く育てるよ。おまえの望みが叶

う様に……」

「待っていてくれ……」

召喚士の言葉が終わらぬうちの魔方陣は炎に包まれた。

そして次第に炎は小さくなり、魔方陣の光は消え去った。

後に残ったものは生まれたばかりの光り輝く美しい赤子だけだった。

浄夜 5

5、

キリハラの話が真実なのか、ただの作り話なのか…すぐには判断できなかった。

もし…それが事実であり、魔王がアーシュだとしたら…

僕はそれを「へえ、興味深いね」と、笑って鵜呑みに出来る気分には到底なれない。

「先生、教えてください。…召喚士とは学長を指すの？」

「…」

「そして…魔王とはアスタロト。そして産まれた赤子はアーシュ…そういうことなんですか？」

「学長から聞いた話だよ。それが真実かただの作り話なのかは、私に言えるわけもなからう。私が見たわけではないのだから」

「だけど、そういう風にしか聞こえないし、捉えられないじゃないか。なぜ、そんな大事なことを僕に話したの？アーシュが魔王だなんて…」

驚きの感情は段々と憤りに変わっていく。

なんてことだ…

知らない方が良かった。

僕はもう引き下がれないほどに、アーシュに固執している。彼をものにしたいと思っている。それを今更、彼自身が魔王アスタロトなんて。

そんなのをおいそれと抱けるわけが無い。

「あなたを恨むよ。こんなの、聞かなきゃ良かった…」

ベッドから離れ、ガウンだけを羽織ったキリハラを、僕は思い切り恨んだ。

「知りたいと私に乞うたのは君だろう」

「酷いね。アーシュの目の前であれだけ焚きつけておいて。全部僕に責任を負わせる気なの？」

「責任か……」

キリハラはガウンの前を留めないまま、ベッドの端へ座り込み、僕の頬を撫でた。

「悪かった。だが、君に乞われなくても、いつかはメルに話そうとは思っていたんだ」

「……どうして」

「私は、今までに何度も想像したよ。学長が……トウエが目の当たりにした光景を。目の前に現れた魔王、アスタロトの事を。自分を育ててみると言い残して、赤子になった魔王を、彼はどれだけ見つめていたのだろうか。希望と絶望を愛らしい両手に握り締めている存在。いや、人間の未来を魔者に委ねること自体、正しきことではない。未来の為には、この魔王である赤子の命をひと思いに奪ってしまっただ方が良いのではないか。そうすれば、ひとりの残虐な魔者を退治したという事実が残る。……トウエはきつと悩んだと思うんだ。魔方阵の消えた床の上で、ただ泣き続ける赤子を腕に抱いた時、彼はその赤子の小ささに、温もりに泣かずにはおられなかったと言う。なにひとつ人間と変わらぬ無垢な者だったと。彼はとうとう決心をした。この赤子を自分の手で育てよう」と

「……」

「アーシュを、魔王の子として育てることも可能だったろう。だがトウエは学園の中の他の子供と同じように育てた。それはメル、一緒に暮してきた君が一番良く知っているはずだ」

「ええ」

確かにアーシュが特別扱いされた記憶はない。彼が特別秀でてい

た者だとしても、彼の容姿からしたら当たり前前の事だし、アーシュ自身、人として何かが違うと感じてはいない気がする。

「アーシュのことを知っている人は、どれくらいいるの？」

「さあ、学長はお伽話としか言わないし、もしこの話を聞いてもアーシュの事だと感じる者は少ないだろうね」

「じゃあ、なぜあなたは今僕に、それを言うのさ。それを聞いた僕が今までどおりにアーシュと付き合えると思う？どんな顔をして彼の前に立てばいい。僕は…彼を抱きたいとさえ思っているのに」

「そうすればいい」

「無理だ」

「何故？」

「アーシュが魔王なら…恐ろしくて、立つものも立たないさ」

僕は自嘲気味に笑った。

本当にそうだと思った。事実今の僕には彼への欲情なんか畏れ多くて微塵も沸いて来ない。

「トウエがお伽話にしてまで、この事実を話したかったのは自分ひとりで抱え込むには重大だし、恐ろしかったからなのかもしれないね。そして私もアーシュに誘われても、彼を抱く勇氣は無い。ただ君は違う。メルキゼテク。水先案内人だろ？アーシュは、彼は一人の人間としてこれまで育ってきた。彼を取り巻く様々なものが彼を育てている。そのひとりとして君の力が必要だと思っている」

「…それはトウエが？」

キリハラは黙って頷いた。

そうか…トウエがキリハラに語ったことも、キリハラが僕に話したこともすべて、トウエの計算なんだ。自分の願いを叶える魔王を育てることが彼の目的なのだろう。

それを叶える為に配置されたコマが僕なのか…いや、僕だけじゃない。

「ルウとベル…ホーリーたち。彼らもアーシュの為に選ばれた者なんだね」

「トウエだつてすべての未来が見えるわけでもない。アーシュだけにこの世界を背負わせる気でもないよ。彼を一人の人間として育てると決めた日から、トウエはアーシュを自分の子供だと思って接している。また魔王として生きてきた過去の記憶はアーシュには期待できない。潜在能力は未知数だが、魔王の育ち方を知らないんだから、どこでどう発動されるかわからないんだ」

「アーシュに言えがいい。『君は魔王アスタロトそのものだ』って」

「…君がそうしたいのなら、そうすればいい。誰にも本人に言うなとは言っていない。お伽話をしているだけだからね」

「…ずるいね」

「大人だからね。だけど君たちは違う。青春という季節は何が起こつてもファンタステックでセンチティブなエロティックなものだ。君の悩む顔を見ていたいと望むのも、大人の醜さと思ってくれ」

その後、卑怯者と散々罵ったが、キリハラは僕の口唇を力でねじ伏せ、嫌だというのに僕を犯した。

大人なんてロクな奴らじゃない。特に知識人って奴は。

三日後の深夜、そろそろ寝ようかと自室の灯りを消しベッドにもぐりこもうとした時、ベランダからゴトンと音が聞こえた。急いで駆け寄ってみると、パジャマ姿のアーシュが立っていた。

「こんばんわ、メル」

「アーシュ…ここは二階なのにどうやって？」

「ちようどいい具合に椋木があるだろ？それをよじ登って…あとは

勢いをつけてベランダに飛び込んだ」

彼に近づき、くせつ毛に絡みついた葉っぱを、僕は指先で取ってやる。その指が少しだけ震えていることにふと気づいた。

アーシュが僕のところまで来てくれたことに感動した僕の指先が勝手に震えているらしかったのだ。僕は自分の様におかしくて、そして自分にもこんな感情もあるのかと、口元が変な風に歪んでしまった。

「ルウは？ いいの？」

平常心を保とうと、話の矛先を変えてみる。

「ああ、ぐっすり寝ているよ。いつもは俺の方が寝つきはいいんだけど、今日は体育の授業は馬拉ソンでさ。15キロを走らされたんだ。だからセキレイはベッドに入った途端に寝てしまった。体力なら俺の方があるんだ」

「そう、じゃあ、今夜は君を独り占めしてもいいんだね」

「ん？...そういうことになるかもね」

そう言つて、少し顔を伏せて照れるアーシュがどうにもこうにも愛おしくてたまらない。

彼が魔王だつて？破壊神だつて？

目の前に立つ少年はまだ未発達の純情な少年でしかない。

「部屋に入ろうか」

「うん、あ、待つて。お土産がある」

彼はポケットに手を入れ、そこからそつと手を引き出し、僕の前でゆっくりと手の平を見せた。

手の平の中で、淡く青白い光がゆっくりと瞬く。

「ホタル...かい？」

「そう、ここに来る途中の森に綺麗な小川があるでしょう？あそこで掴まえたの。人の手に捕らえられるんでドジなホタルだ」

魔王に捕らえられるのなら、そのホタルも誇りに思うだろう…と、一瞬思っただけで、アーシュには自分が何者なのかって、本当はどうでもいいことなんじゃないだろうか…そんな風にも感じてしまった。

勿論これは僕の思いであって、彼が何を望んでいるかは知ることではない。

「あ、飛んだ」

アーシュの手の平から飛び立ったホタルは揺れながら森へと帰っていく。

「あんなに些細な生き物でも自分の帰る家を知っているなんてさ、本能ってのは記憶になくても身体に沁み込んでいるものなんだね」

「…そう、だね。さあ、ベッドに行こうよ、アーシュ。君を思い切り可愛がりたい」

「うん」

眼鏡の奥の黒いまなこがホタルのように淡く光る。

僕は彼の手を取って、部屋に導いた。

彼の服を丁寧に脱がせ、彼の眼鏡を外し、彼の身体をベッドに押し付けた。

サイドテーブルの仄かな灯りで、彼の身体のひとつひとつを確かめる。

スキャンスコープは僕の力のひとつだった。

驚くべきことに、アーシュにはたったひとつの黒子ほくろも雀斑そばかすも傷痕スティングマも見当たらなかった。

黒子や雀斑はともかく、心に傷のない人間なんて居ない。

彼は間違いなく魔王であろう。

「どうしたの？メル」

「いや…綺麗な身体だなんて思ってたね」

「そうかな？他人と比べた事がないから、俺にはわからないや」

彼に出生の秘密を打ち明けたとして、僕に何のメリットがある。
このカードはまだ見せない方が利口だ。

彼を僕のものにしておく為に、彼にはまだ、ただの人間で居ても
らおう。

その夜、僕はアーシュを頭の前から足のつま先まで思う存分味わ
った。

彼の身体は言わずもがな、すばらしい味わいだった。

> i 3 0 7 0 4 — 2 7 3 <

天使の樂園、悪魔の詩 9

9 .

夏季休暇もそろそろ終わる頃になって、やっとアーシュとルウが、エドワードの屋敷に来る事になった。

連絡をもらった俺は、一週間先の到着にも関わらず、あれこれと準備に勤しんでいた。

その様子を見て、エドワードが笑う。

「クリストファーの浮き足立った恰好は初めて見るよ。そんなに大事な友人なのか？」

「大事な親友だよ」

「嘘付け。その親友とか言う奴らのひとりはおまえの恋する相手なんだろ？」

「…違う」

「鏡で顔を見てみるよ。恋する者を待ち焦がれて心待ちにしている顔でしかなくろうよ」

わかつているなら、言うな。こっちはそれを言われただけで顔から火が出そうになる。

「まあ、楽しみにさせてもらおう。おまえに言う親友がどんなに美しいか：私より愛おしい男がどんな奴か、たっぷり拝ませて頂くよ」
「頼むから、エドワード。ふたりには手は出すなよ。まだ13にもならないんだからね」

「私も一応大人の貴族なのでね。身の程をわきまえているつもりだよ。もちろん向こうから頼まれたらその時はありがたく頂くがね」
「…」

改心したと思っていたのは僅かな期間で、エドワードは相変わらず手癖が悪い。それでも昔に比べれば、随分マシなのだが。

その日が来た。

駅まで使いを出し、車が着いたのは夕方近くだった。

俺は玄関先で車から降りるふたりを出迎えた。

ふたりとも慣れない長旅に疲れた様子だったが、俺の顔を見ると、たちまち相好を崩して、俺に抱きついてくる。

「アーシュ、ルウ、よく来てくれたね。待ち遠しかったよ」

「ベルく久しぶりく、会いたかった」

「ベルが居ないとなんかつまないんだよね。宿舎に居てもぽっかり穴が開いた感じ」

「それ、どーいう意味だよ、アーシュ。僕じゃ君の相手に不足ってわけ？」

「揚げ足取るな」

「おい、ここまで来てケンカはやめろよ。いいから家に入ってくれ。エドワードも待ってる」

「わ、実に楽しみだ。アーシュは叔父さんを殴るんだよね」

「セキレイのこういうとこ、子供っぽくて嫌になるよね、ベル」

「…そういうところがふたりとも子供だろ。エドワードはああ見えなくても武道も極めているから、非力なアーシュの腕じゃ、平手打ちどころか…」

「逆にベッドに押し倒されるってわけ？」

「それ、本人の前で言ってくれる？責任負わないからさ」

「…はは」

相変わらずの三人であることに、俺は舞い上がっていた。

貴族の儀礼に則って、礼儀正しく挨拶をこなしたエドワードだったが、影でこっそり「ベルの恋わずらいの相手は黒髪の方だろ？私は断然白金の方だね。見るよ、あの従順そうな顔とマッチしたプラチナブロンド。一度味わいたいものだね」と、好色をひけらかす。

「…」

始末に負えない輩ばかりだ。

「君達の部屋だけど…一緒にいいよね」

ふたりを二階のゲストルームに案内する。

「先にベルの部屋を見たいな」

「え？」

「ね、いいでしょ？」

ふたりに急かされた俺は、なんとなく嫌な予感のまま、自分の部屋に案内した。

「うわ、すげえ広いや」

「思ってた以上に凄い豪華だ。ベルってホントに貴族なんだね」

「そうかな…」

「椅子もすげえ。黒檀のアンティークに金細工って、聖堂でしか見たことないもん。それに…ベッドも広いじゃん」

「そうね、三人寝ても充分過ぎるくらい」

「と、いう事で、俺達の部屋ここでいいから」

「は？」

「ベルと一緒にこのベッドで三人で寝るのさ」

さすがにそれはないと焦った。だってふたりにいちゃつかれた姿を見せられたら、いくら俺だって、我慢できるものか。

「ちよつと待ってくれよ。君達…その…恋人同士なんだろ？俺が一緒に居たら邪魔だろ？」

「大丈夫だよ。ベルの目の前でセキレイとセックスしたりはしないよ」

「当たり前だろ、ばかアーシュ。聞いてよ、ベル。アーシュったらさ、僕をほったらかしてメルと寝たんだよ」

「…そう、なんだ」

やっぱりそうだったのか。あれは夢じゃなかったのか…

メルとセックスを試すとは事前にアーシュから言われていたから

覚悟していたが、こうしていざルウの口から聞くとズキズキと胸が痛んで仕方ない。

「それで翌日、何て言ったと思う？」

「…なに？」

これ以上、この話は俺にはキツイのだが、ルウの方がもつと辛いのだろうと、俺は不憫に思った。

「『メルとのセックスはめっちゃ良かった。セキレイとは快感が違う』ってさ。照れもなく僕に言うの。ひどくない？」

「…酷いね」

さすがに俺もアーシュを睨みつけた。

当の本人は自重する気など無いらしく知らんぷりと決め込んでいる模様。

「黙ってないで何か言ったらどうなのさ！」

「うるさいな。何回も言っただろ。あれは俺の反省だったの。セキレイをもつと気持ち良くさせてあげたいから、メルとして、勉強になったって言ってるんじゃないか」

「メルから学んだ性技で、僕を試すって、ホントにいやらしいんだから。どういう神経してるわけ？」

「そんなに意地悪言うのなら、他の奴で試すよ。それで君が後悔しても遅いんだからね、セキレイ」

「アーシュのバカ！」

ルウはベッドの枕をアーシュに向かって投げつける。

アーシュは上手くキャッチして、呆れた顔を僕に見せる。

「メルと寝てから、セキレイはずっとご機嫌斜めなんだ」

「そりゃそうだろうね。恋人が他の奴に寝取られりゃ、誰だって怒るよ」

「だって…仕方ないじゃないか。どうしてもメルの力が必要なんだもの」

「『sensor』の力がそんなに大事なの？アーシュは人を愛する
って意味を判ってないんだよ」

半泣き状態のルウは、そう言うベッドの毛布にうずくまってしま
った。

アーシュはそれを見て溜息を付き、カバンの中の服を出し、クロ
ーゼットに片付け始めた。勿論ルウの分も。

俺はその場に居づらくなって、「片づけが終わったら、食事だか
ら」と、言っで、部屋を後にした。

ふたりが片付ける問題なんだから、第三者の俺が口出すことじゃ
ない。

だけどアーシュがあそこまで「sensor」に固執する意味が俺
には理解できない。

ひょっとして、アーシュは本気でメルのが好きなんじゃない
のか？

あの男の胡散臭さ考えると、信用する気にはならないけれど、
もしアーシュが彼に「恋」をしているのなら、誰にも止めることは
できないんじゃないのだろうか…

ディナーはオートクイジーヌで慣れないふたりはテーブルに並
べられた銀食器にあたふたしていた。エドワードは「小さな貴賓客
にはとっておきのワインを」と言い、上等なワインをふたりに薦め
た。

ふたりとも酒にはめっぼう強く、あっという間に高級ワインを空
にした。

それを見たエドワードは流石に「今時のガキはなんというか…」
と、呆れて果てていた。

食事が終わり、別室でへ移動して、デザートを楽しむうちにアー

シュたちもエドワードへの気兼ねもなくなったらいい。表情が柔ら
いである。

「侯爵はうちの学園の卒業生とお伺いしましたが…」

「エドワードで結構だよ。アーシュ」

「では、エドワード。あなたはアルトだそうですね。『s e n s o』
はご存知ですよ」

「アルトである者が『s e n s o』を知らなかったら、よほど力の
ない者か、コピーだろうね」

「じゃあ、お聞きします。あなたは『s e n s o』をどうやって学
びましたか？あの学園は魔法使いを受け入れる学校でありながら、
魔法を教えたりはしない。勿論勝手に学ぶ事を禁止しているわけで
もないから、興味のあるアルトは色々と独学で学びますが、個
人で学習するには難しいんです」

「そうだね…私は中等科から編入したのだけれど、それまで力を使
ったことはなかった。だからその存在が怖くもあった。それを教え
てくれたのは、『倶楽部』だよ。秘密結社のようなものだね。力を
間違った方向へ使わせない為に集まった組織だ。学校側もうすうす
は知っていただろうが、何しろ結束が固いから、表に出ることはな
いんだよ。その組織のメンバーが私を誘ってくれたんだよ。今も学
園にいるんじゃないのかな」

「え？生徒として？」

「まさか。先生だよ。確か司書をしている。…キリハラカラルは私
の愛人だった」

「マジでー！」

素っ頓狂な声を出し、立ち上がったアーシュは持っていた紅茶を
床に零してしまった。

「あちい！」

「アーシュ！」

「アーシュ！、大丈夫か！」

俺は慌てて、ハンカチでアーシュの服を拭く。

「だ、大丈夫だよ、ベル。ゴメン。上等の絨毯に染みを作ってしまった」

「そんなの気にするな。それより…手が…赤くなってる。水で冷やした方がいいんじゃないか」

「大丈夫だよ。こんなの」

痛みは隠せないのか、赤くなった右手をふうふうと息で冷やしている。

「アーシュ、痛いの？大丈夫？」

ルウが心配そうにアーシュを見つめている。

「どれ、見せてごらん」

エドワードはアーシュの手を取り、赤くなった甲の皮膚に手の平を置いた。

エドワードが目を瞑る。すぐに手の平から淡い光が漏れた。

「あたたかい…」

アーシュが呟く。

しばらくして光は消えた。

「これで痛みは引いたと思うけど」

エドワードは覆っていた手を離れた。

アーシュの右手の甲の腫れは綺麗になくなっていった。

「凄い…エドワード。こんなことが出来るなんて…今まで言わなかったじゃないか」

俺は初めて見たエドワードの力に驚いた。

「『イルミナティバビロン』。私はそこで『sensor』を教えられたんだよ」

ニコリと笑うエドワードに、さすがのアーシュもお礼を言うのも忘れ、見惚れていた。

どっちへ転んでも、アーシュにとって俺への関心はエドワード以下らしい。

天使の楽園・悪魔の詩 10

10、

スタンリー家でのアーシユ達との休暇が始まった。

約束どおり、夜は三人でひとつのベッドにくっつきあって寝た。

俺の部屋のベッドは三人で寝ても充分な大きさではあったが、何故かふたりに囲まれて真ん中に寝る羽目になった俺は、毎晩、中々寝付けなくて困った。

俺の両側にふたりは寝ている。そのふたりの寝息を感じながら、なんとも形容しがたい空気を味わうことになる。つまり…

両側のふたりは恋人同士で、俺達三人は親友同士で、俺はアーシユに恋をしていて、アーシユは何も知らない。ルウは弟みたいにかわいいから傷つけないし、俺は俺で一人前の欲望はあるし…

もう、どの感情を選択していいのか、ついにはわからなくなってしまふ。

それでも…

右手と左手…重なり合ったふたりの温もりが愛おしくて、たまらないんだ。

翌日は彼らを馬術に誘った。

本物の馬も見たことがないと言う彼らは興味津々、おっかなびつくりで我が家の馬屋に並ぶ馬にブラシをかけている。

「まずスキンシップからだよ。馬に信用してもらわなきゃ、背中には乗せてもらえないからね」

「わかった」

元気のいい返事だ。

瞳をキラキラさせながらふたりは馬の世話を懸命に励む。そのおかげで三日後には二人揃ってひとりでも上手く乗馬できるようにな

った。

エドワードも感心した様子で、ならばと彼の先導で、遠出を楽しむことになった。

「ふたりとも才能があるんだな。それだけ乗りこなせばもう立派な紳士だ」

夏だけ使う小さなコテージで昼食を取る。

「ハイアルトだからかも知れないね。力を使わなくても、身に付いた感覚で動物の直感を瞬時に嗅ぎ分けられる。ふたりともホーリーならば、言わずもがなだ。おっと、失礼。クリスマスもホーリーだったね。魔王が三人も揃うとは、我が身の安全は保障されたも当然だ」

エドワードはふたりが来てから、何だかいつもより饒舌になった。しかも機嫌がいい。

「魔王は善にも悪にも転びますよ。あなたを地獄に突き落とすかもしれない」

皮肉屋のアーシュが、ホットコーヒーを差し出す。

「それはそれで面白そうじゃないか。アスタロトと一緒に地獄へ行くのなら、この身が焦がれても恨むまい」

「うん、いつでも突き落としてやるよ。でもその前に…このハムサンドうまい！」

サンドイッチにかぶりついたアーシュが目を細めて感嘆する。

「モルネーソースが決めてなんだって。持たせてくれた執事が言っていたよ。こちらのローストビーフもお奨めするよ」

「やっぱり学園の食堂とは違って高貴な味わいだね。ベルと友達で僕らは得したね」

ナイフで小さくカットしたローストビーフを口に入れたルウがにっこりと笑いかける。

「そんなことないさ。俺の方こそ…君らとこんな風に過ごせるなんて、夢みたいだ」

「…クリストファー」

「え？なに？エドワード」

「良かったな。本物の友達に出会えて。貴族であっても、金があつても私には得られなかったものだ。ひどく残念だよ」

「今から作ればいいんじゃないの、エドワード」

「え？」

ルウの言葉に驚いたようにエドワードがルウを見る。

「僕らが友達になるよ、エドワード。ねえ、アーシュ」

「は？ちよつと老けすぎてね？それにエドワードはすけべ爺だ」

「アーシュだつて助平じゃないか。変わりやしないよ」

「何だよ。まだ根に持っているの？まあ、セキレイがそう言うのなら…友達になつてやつてもいい。ローストビーフも美味いからね」
ふたりの言葉にエドワードは「じゃあ、一緒にベッドに寝るか」などと軽口を叩きながらも、瞳が潤んでいるようだった。

楽しい日々はあつと言つ間に過ぎる。

三人で学園に帰る日が明日になった。

部屋で荷物を片付けている時、メイドが「奥方様がいらっしゃいました」と、やってきた。

奥方様とは俺の母親であるナタリーの事だ。

この屋敷で会うなんて珍しいことだと、階下の応接間へふたりを連れ、挨拶へ向かった。

久しぶりに会う母親はいつものように美しく可憐で、少女めいた顔で俺を見る。

「あら、クリストファー。こんなところで会うなんて」

「クリスマスはいつも夏季休暇はここで過ごしているだろ？姉上はいつも忘れるのだからね」

「だって、興味が無いのだから。でも、変ね。クリストファーって
ますますエドワードに似ているわ」

「それもいつも言っている台詞だよ、姉上」

「そうだったかしら？」

アンティークの椅子に座り、品良く紅茶を頂く姿は、女優のよう
だと思う。

一体この人に年齢などあるのだろうか。幼い頃とほとんど印象が
変わらない。

これだけかわいらしいのに、母親としての自覚も愛情も薄い。

俺を親戚の子ぐらいしか思っていないのだから。

その彼女が俺の後ろにいるふたりに気づいた。

「あら、他に誰かいらっしゃるの？」

「あ、俺：僕の友人です」

「折角の夏季休暇だと思ってね、私が彼らを招いたのだよ。クリス
トファーが友達を連れてくるなんて素敵だろう。それに母親として
も彼らに興味がないかい？」

「別に……」

あまり関心のないナタリーに、ふたりが不機嫌にならないか心配
だったが、ルウとアーシュはそれぞれ、彼女に貴族的な丁寧な挨拶
をした。

彼女の目の前に立って膝を折り、自己紹介をする。

「ルウと言います。べ、じゃなかった。クリスにはいつもお世話に
なってます。スタンリー侯爵にも良くしていただいています……。あ
の、とてもお綺麗ですね。それに……いい匂いがする。こんな方がお
母さんなんてベルが羨ましいなあ」

「どうも。あなたも素敵なおプラチナブロンドね。私、好きよ」

「ありがとうございます」

ルウはおよそ人に嫌味を感じさせることのない笑顔で後ろに下が

り、アーシュの背中を押した。

「あ、え〜と、アーシュと言います。こんにちは〜」

「…」

「ベルのお母さんですよ。ベルから聞かされたけど…凄く若くて綺麗で…え〜と。僕、母親が居ないので羨ましいです。…あの、なにか？」

ナタリーはアーシュの顔をじっと見つめている。

「あなた、アーシュっておっしゃるの？」

「はい、そうです」

「眼鏡を外してくださる」

「は？」

アーシュは頭を捻りながらも、素直に彼女の言う事を聞いた。

眼鏡を外したアーシュは、雰囲気が一変する。揺らぎがなくなるのだ。際立った美貌に凄みが増す。

ナタリーは眼差しを背けず、アーシュを見つめ続けた。アーシュもまた目線を外さない。

「あなたは…アスタロト？」

「え？…いえ、ただのアーシュですよ。ただし、学長からもらったアスタロト・レヴィ・クレメントと言う『真の名』は持っています」

「私、あなたを観たことがあるわ。ねえ、エドワードは見覚えが無い？」

「え？…いや、アーシュとはこの屋敷で初めて出会っただけだ。手はつけてない」

「馬鹿ね、そういう意味じゃなくてよ。この子の顔、ああ、忘れるわけないわ。いつもおばあさまから聞かされた…そうだね。エドワード、画廊に案内して」

母は椅子から立ち上がって、真っ先に画廊に向かって歩き出した。

俺達も勿論後に続いた。

画廊には両サイドの壁に絵画がずらりと並べられている。どれも古くからスタンリー家にある逸材の絵画らしい。俺には絵の価値なんてわかるはずもないが。

「エドワード、奥の部屋を開けて」

前もって鍵を用意していたエドワードが、画廊の壁の絵画を避け、その後ろにある鍵穴に鍵を差し込み、秘密の扉を開けた。

「すごい、映画みたい」

能気なルウの声が、張り詰めた空気を和ませた。

俺でさえ入ったことは無い。

「我が家はニンジャ屋敷だって、言った奴がいる」

「ニンジャ？」

「キリハラ先生に聞いてごらん」

「キリハラもここに来たの？」

「まさか、この部屋には来ないよ。でも屋敷には招いたことがあるよ。恋人同士だったからね」

「やゝらしゝ言い方」

「うらやましそうな言い方」

ルウとエドワードは言葉遊びを楽しんでいる。ふたりはこちらが妬くほどに仲が良い。

「ねえ、エドワード。あなたは学園ではユーリと呼ばれていたんでしょ？キリハラは何て呼ばれてたの？」

「カヲルだよ」

「まんまじゃん」

「そういう生徒もいる」

「フーン」

「君だってアーシュの他に名前は持たないだろ？」

「確かにそうだけど」

二重になったカーテンを開け、淡い光が部屋の沢山の山の山を映し出した。

母は迷わず壁に作り付けの扉を開けた。

「これよ、これ」

重厚な額縁に守られた古い油絵があった。

40号ほどのさほど大きくない絵画だ。

中央に女性か男性が見極められない美しい裸体が背中を向けて横たわり、優美な顔を向け、こちらを見つめている。長い艶やかな黒髪が背に、横たえたシャツに絹糸のように散らばっている。

その顔をよく見ると……なるほど、アーシュに似ている。

輪郭も、鼻梁も、形の良い口唇も、絶妙な配置で美しく映え、際立った美を描いている。

「ホントだ。アーシュに似てる。ね、このモデルは誰？」

ルウの素直さが羨ましい。

「これはもうずっと昔……そうね、二百年ほど前の作品よ。誰が描いたかはわからないけど、この絵にはタイトルがあるの。『レヴィ・アスタロト』。それがこのタイトルよ」

「へえ、アーシュと同じ名前だね」

「アスタロトはどこにでもある神話の題材だ。別にこのモデルがアスタロト自身なわけではないでしょう」

アーシュの声音がどこことなく険しい。

いや声だけでない。

アーシュは眼鏡を外したままでいた。

研ぎ澄まされたその優美な顔は、この絵のアスタロトそのもののように見えた。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 1 \\
 & 3 \\
 & 9 \\
 & 7 \\
 \hline
 & 2 \\
 & 7 \\
 & 3 \\
 & <
 \end{array}$$

11、

「この絵はね、おばあさまがこのスタンリー家へ嫁がれた時に、肌身離さずに運ばれたものよ」

母は目を細めながらその絵を眺め、懐かしそうに話し始める。

「おばあさまはサマシテイから随分離れた小さな街の子爵の娘だったの。スタンリー家に嫁がれた時は15歳。勿論政略結婚だったわ。おばあさま…ティナは男の人なんかまるで知らない淑女だったのよ。恋物語に憧れを抱いた夢見る乙女ね。だから、結婚相手はずっとこの絵の中のアスタロトのような人と思い描いていたの。少女趣味でしょ？現実には…二十も離れたおじいさまの妻にならなければならなかった。無理矢理よ。誰も慰めてもくれない。どんなにかひとりぼっちで心細かったでしょうね。初めての夜はずっと泣いていたとおっしゃってらしたわ。我が身の屈辱と夢を捨てなければならぬ事実が辛かったのね。」

この絵はおばあさまが生まれた時からおばあさまの家に飾られていたそうよ。魔王アスタロトが一時の興に任せて、三日間だけ人間の娘と交わった。その時を過ごした姿を描いたと言い伝えられている絵がこの『レヴィ・アスタロト』。

…本当に今にも動き出しそうに瑞々しいし、比類の無い美しさね。それにとってもキュート。…ね、面差しがアーシュに似ているでしょ？」

そう言われた本人は、黙ってその絵を見つめ続けている。

母は話を続けた。

「おばあさまの一途な愛はこのアスタロトに一生涯注がれたの。現実がどんなに辛くても、この絵を見て、この方を想い続けていれば、

希望が持てるっておっしゃっていた。おばあさまの夢見がちな少女趣味は現実逃避でもあるけれど、自立できない女がこの家の中で生きていくしかないのなら、夢を見続けるくらい許せるでしょ？」

「…おばあさまは綺麗な人だったよ。私にもよく神話や童話を話しかせてくれたけれど、この絵の事は全く聞かされていないな。姉上だけが特別だったのかね」

エドワードは話を聞かされなかったことが心外だったらしい。むくれた顔で母を睨んでいる。

「女同士の秘密の話だったのよ。心から愛する人のことは、粗野な男の子には話せないわよ。侯爵様にも悪いでしょ？それに、あなた、口が軽いから、すぐ他人に話してしまいそうなもの」

「姉上は秘密主義ですからね」

ふふと笑いあう二人の眼差しには特別な親密さが伺えた。

エドワードと母の関係はまだ続いているのだろうか。それともそれを超越した絆があるのだろうか。

俺には何もわからないし、それこそ、ふたりだけの秘密なのかも知れない。

「これを描いた人は、実際にこの人を見たのでしょうか？それと…アスタロトと交わった娘と言うのは、本当にいるの？」

アーシュはふたりの関係などには全く興味がない様子で、絵を眺めたまま、質問した。

「両方とも実在すると言われているわ。その娘が書いたと言われる日記も残っているのよ」

「見たいな」

「残念だけどここには無いわね。話ではその娘は、王家へ嫁いだらしいのよ。貴人だったのね」

「…」

アーシュは諦めきれない様子で、絵の傍からから離れそうもなかった。

「ホントアーシュにそっくりだよね。もしかしたらその娘さんはアスタロトと言われるこの絵の人との子供を宿してて、アーシュに繋がっているかもしれないよね」

ルウの言葉にドキリとした。

ここにいる誰もが言いたいことをサラリと言う気質が今は恨めしい。

アーシュがどう思ったかと、俺は気が気ではない。

だがアーシュは、ルウの言葉に気に留める風でもなく「じゃあ、俺の『真の名』は、真正正銘の本物だね」と、笑った。

…心からの笑いではないことだけはわかった。

母はディナーも取らずに、屋敷から去った。

「たまたま寄っただけなのよ」

上質のシルクのコートをエドワードに羽織らせてもらう母を、ホールで見送る。

「では皆様、ごきげんよう」

「食事ぐらい一緒にしたかったのに。たまには母親の顔でクリスの時間を持てよ」

「ディナーの約束は別にあるの。それに…クリストファーにはエドワード、あなたがいるじゃない。あなた、鏡で自分の顔をご覧になれば？父親の顔をしているわよ」

「それは、卑下している？それとも…」

「褒めているのよ。でも老けたエドワードは嫌いよ。いつでも私の一番の弟でいらしてね」

「わかってるよ、ナタリー」

手の甲に口唇を押し付けたエドワードに、母は少しだけ切なそうな顔をした。

屋敷での夕食は、休暇の最後とあつて、豪華だったが、アーシュはあまり食も進まず、残しがちだった。

夜、寝ようと自分の部屋へ行くと、パジャマ姿のアーシュひとりで居ない。

「あれ？ルウは？」

「ああ、セキレイならエドワードの部屋だ。最後の夜だからエドワードと寝るってさ」

「…え？エドワードと？」

「変な勘違いをするなよ。寝るだけだよ」

「…いいのか？」

「何がさ。ほら、俺達も寝るよ、ベル」

先にベッドに横になったアーシュは毛布の端を持ち上げて、俺を誘った。

俺は不可解なまま、アーシュの隣りに寝そべり、毛布を引き上げた。

すぐにアーシュが身体をくっつかせ、手を絡ませる。彼はこういう甘え方をするのを好んだ。

彼のくせつ毛の髪が、俺の頬を掠めた。

同じシャンプーを使っているのに、アーシュからは淡い薄荷の香りがする。

「…いいのかよ」

顔をずらして、アーシュの顔を見た。

「何が？」

「恋人だろ？エドワードに任せて心配じゃないの？」

「ベルの叔父さんだろ？君が疑ってどうする」

「だって…」

「俺は心配して無いよ。エドワードがセキレイに感じている好意は父性愛だよ。それがわかってるからセキレイも彼に甘えている」

「そうだといいいけれど…」

「大丈夫だよ。エドワードは君を愛しているよ。父性愛ではなく、君を、愛してる。だから君を抱く」

「母親の代わりに？」

「それもあるだろうね。本当にベルのお母さんは綺麗なもの。エドワードはずっと見惚れっぱなしだったね」

「うん…」

「一生涯の愛を誓っているのかもしれないね。あのおばあさまのラストロトへの愛みたいに」

「そうかもしれない…」

エドワードの想いが尊く感じられた。

エドワードの優しさに母は報いてくれるのだろうか。それとも俺の知らないところでは、あのふたりはもうとつくに、尊い境地まで到達してしまっているのだろうか…

「俺も誓うよ。ベル、君に永遠の友情をだ」

アーシュは握り締めていない片方の手を、俺の胸の上に置いた。

胸の鼓動が早まるのを知られたくなくて、俺はその手をそっと押しやった。

そうやって誤魔化さないと、ふたりだけでこのベッドにいるのが辛くなってくるのだ。

「…ありがとう。でも、本当にいいのか？エドワードがルウに対して絶対欲情しないとも限らないぜ。彼は小さくて可愛い子が好きなんだから。ルウが心配だよ」

「セキレイがエドワードと一緒に居たがっている。俺は驚いているよ。セキレイがあんな風に他人に懐くなんてさ。セキレイが求めているのは俺じゃなくてエドワードなのかもしれないって思ったりした」

「まさか」

「そう、まさかだ。本当のところ…セキレイは親が欲しいんだよ」「え？」

「言わないけどさ。わかるんだ。…セキレイが両親を求めるのは、きっと記憶を失くす前の生活が親の愛情に満たされていたからだと思っただ。4歳の頃って君、何か覚えている？」

「うん…なんとなくだけど、印象的な事は記憶にあるよ」

「そうだよね…。今のセキレイにはそれが無い」

ルウは4歳の頃、ふいにこの街に表れ、アーシュに拾われたと聞く。それまでの記憶のすべては彼には残されていなかった。

「セキレイを見つけたのは俺だって言っただよ」

「うん」

「俺が望んで…彼が目の前に現れた。俺が…彼を呼んだのかもって召喚してしてしまったのかもって…きつと力の使い方を間違えたのだと思う。俺はセキレイが欲しくてそれまでのセキレイの記憶を消して、俺だけの『セキレイ』にしたくて…彼をずっと繋ぎとめてしまった…」

「そんなこと…アーシュの考えすぎだろ？」

「俺はね、ベル。自分が何者かとか自分の親が誰なのかとか、割とどうでもいいって思いこんでいるんだよ。だって、それを知ったところで自分が変わるとは思えない。でもさ、もし…あの絵の『アスタロト』が僕の父親だって思ったら…ね。すごく嬉しかったの。ああ、自分にも親がいるのかもしれない。この姿も力も親から与えられたのかも知れないって…なんとも表現できないくらい胸が熱くなったんだ。だから…セキレイだって、両親を求めるのは当たり前だろ？もし、僕が勝手に彼を欲しがって、両親の元から引き離れたのなら、僕の力で彼を帰さなきゃならない」

「ま、待ってくれ、アーシュ。それってどういう意味だよ。ルウを帰すって…ルウと別れるってことなのか？」

「この世界から離れるという意味ではそうなる。まだ彼の居た場所を探り当てていない。だけど『s e n s o』の力でセキレイの居た場所、両親の居る次元を探し出して、彼を送り届ける。…俺にはそ

の力がある」

「君は…その為に、ルウを帰す為に、メルと寝たりしたのか？」

「愛する者の望む事を叶える努力くらい、恋人なら誰だってするはずだ」

「ルウは…知っているのか？」

「いや、まだ記憶さえ取り戻していないんだ。親を探し出すって言っただって、見当もついてないんだから、言えないさ。それにどうせ反対されるに決まっている。あれはああ見えて、俺には天邪鬼なんだ。親に会いたいなんて絶対に言わないよ…僕の為に」

「…アーシュ」

「健気だつて言つてよ。誰も僕を褒めてはくれないんだから…ベルぐらいは褒めてくれ。僕だって、セキレイを失いたくはない…」

幼子のように身体を寄せるアーシュを強く、抱きしめた。

アーシュの心底からの決意が、俺の魂こゝろにシンクロした。

「アーシュ、何でも言ってくれ。君の為になら、どんなことだってやるよ。力になるよ。…大好きだよ、アーシュ」

今、アーシュが一番欲しいものが、あの絵のアスタロトだとわかっていても、俺にはなれない。なら、出来る限りのまっさらな愛情で、そして友情で、彼の痛みを癒したかった。

11

俺とセキレイは文字通り番いになることができた。

その後は、三日と空けず、ふたりして「sensor」を楽しむ事に没頭した。

するとある事に気づく。

セキレイとふたり、何回トリップしても同じ場所しか行けないのだ。

即ち、あの宇宙の果てみたいなふたりきりの世界が待ち受けている。

それはそれでロマンチックと言えるだろうが、同じ場所と言うのがどうも腑に落ちない。

「天の王」の図書館で調べ尽くした知識では、「sensor」は時間、場所、次元を超えて、関わった者の記憶のすべての場所へ移動できるはずだ。

勿論これは「sensor」の一部分の力の利用だ。

「sensor」は一般的な超能力とされるPSIサイよりは、遥かに高度で、かつ難解な魔術と言って良かった。

セックスで快感を得ることはお互いにとって大事な情感だ。

お互いがオーガズムを感じる時、大抵誰もが真っ白になると言う。その暗闇から光を差し込む暁闇こそが、エクスタシーの到達点であり、「sensor」が発動する。

甘美なまどろみに酔いながら、脳のある中枢の「力」を司るシナプスのネットワークを僅かな記憶のシグナルへと繋げる。しかも、リアルである「現身」うつしみをも、移動させる力と制御システムは相当な

魔力を使いこなす者で無いと到達することは難しいとされる。ハイアルトは「sensor」の力を潜在的に持った人間だ。それを使いこなせる力量は勿論、それぞれの意識にある。だから「力」とは潜在的な能力と、それを使いこなせる「精神力」を持たなければ、意味が無いと言えるだろう。

俺には目的があった。

セキレイを本当の両親の元へ還したい。

彼が望んでサマシテイに現れたわけじゃない。

もし両親が望んでこの街へ彼を導いたとしても、セキレイ自身はその理由が欲しいのではないか。

俺は彼に「セキレイ」と言う名を与えた。

トウエはそれを承知した上で「ルウ」と「真の名」を与えた。

何故、学長は俺の元に彼を置くことを承知したのだろう…

俺が望んだからか。セキレイが「ルシファー」だからなのか。

トウエはセキレイの本当の姿を知っているのではないだろうか。

俺はセキレイが自分の運命を自身で選んで欲しいと願っている。

俺に引きずられる事無く、自分で掴まなければ、彼はきつと後悔する。

俺を恨むかもしれない…そう感じていた。

そして、セキレイ自身、悩んでいることにも気づいていた。

俺達はもうすぐ13になる。

もう自分が何者か知ってもいい年頃だろう。

「ルシファー」と言う名が何の為に彼に与えられたのか、彼はそれを知リたがっている。

俺はといえば、自分の力を疑ってはいない。

その「力」がどこから来たのか。セキレイと同じく、両親は一体どんな奴らなんだろうとか…考えないわけでもない。

だからこそ「sensor」を自分のものにしたい。

自分だけではなく、セキレイの本当に還りたいと願う場所に辿り着きたい。

そこへ送り届ける事こそが、俺のセキレイへの愛情のような気がする。

また、それを乗り越えなければ、俺達は本物の番いにはなれないだろう。

大人になるには辛い事が山ほどある。

力があればその力にこそ、傷つくことだろう。

与えられた試練を楽しむ精神は、他人を傷つけても構わないぐらいに勇ましいものになる。

「悪」とは何だ。「善」とは何だ。

一方を救えば一方が倒れる。両方とも救おうなど、無理難題。

「光」とは何だ。「闇」とは何だ。

どちらが正しくて、間違いだと決められるはずもない。

神話では「アスタロト」は天界と魔界を行き来し、最終的には魔界の王となった。

彼はどうやって選択したのだろう…

もし、俺が「アスタロト」ならば、と考える。

即座に言えることは、俺は俺の大事な者を守る為に、どちらかを選ぶだろう。

それが俺の求める未来だからだ。

結局、セキレイとのセックスでは、求める場所を得られなかった。何故かはわからない。

俺のようにここで生まれた者には、生まれてからの記憶はすべて取り出すことが出来るのに、ここに辿り着くまでの4歳までのセキレイの生きてきた記憶は一体どこにあるのだろうか。

セキレイの脳に刻まれた記憶が、何かで封鎖されているとしたら考

えられなかった。

その鍵を俺が開けるしかないなら、力のある者と交わって「sense」の力を導き出すしか、方法が無いのではないのか。

「天の王」図書館の司書キリハラはエキゾチックな東洋人だった。彼は力のあるハイアルトだ。

この街では珍しい黒髪であることも、俺にはなんとなく親しく感じられたから、彼との接触を試みた。

即ちセックスをしたいと申し出たわけだ。だが彼はのりくらりと俺の誘いを断わりやがった。

その理由を聞いただと、「学長から止められている」と、言う。なんでトウエがキリハラとのセックスを止める。そんな勝手知ったことか！

それを責めると今度は「君はまだ子供だから」と、来やがった。隣りに居たメルがニヤニヤしている。

あんまりムカついたので、蹴りでも入れてやろうと思ったが、キリハラはカウンターの向こうで、知らんぷりを決め込んでいる。

捨て台詞を吐いて図書館から出て行った。

キリハラのパカ野郎！どうせ、すぐにメルとやるクセに。

テムエから頭を下げてきたって、絶対寝てやらねえからなっ！

頭に来たついでに、その足で隣りの聖堂へ向かった。

この時間なら、トウエはきっとここに居るだろう。

聖堂の重い扉を開けて、光を集めて煌くステンドグラスにしばらくまどろんだ。

何故か、ここに来ると懐かしい気持ちになる。

俺がここで生まれたからだろうか。

尖った心が穏やかになっていく。

「アーシュ、君なのか？」

「そうです」

トウエの俺を呼ぶ声はいつも暖かい。信用ならねえ奴と思いつつも、俺の心はいつだって、信頼を寄せているのだ。

「何か悪さでもしたのかい？」

「なんで？」

「反省の告解でもしに來たのかと思ったのだが…」

「俺が反省なんかするわけないでしょう。あなたの愛人のキリハラが俺に無関心を装うから、腹が立ってあなたに八つ当たりに来たんだ」

「…」

適当な作り話を、交えたつもりだが、否定もしないところをみるとまんざらホラでもなさそうな雰囲気だ。

俺はちよつとシヨックだった。父ちゃんを寝取られるってこんな気分なのかね。

「大体、学長はなんで俺とキリハラが寝るのを止めるんだよ。キリハラは求められれば誰でも寝てくれる良い先生なんでしょう？」

「アーシュは私の子供みたいなものだから駄目です。キリハラ先生にはあげられませんね」

「は？なんでだよ！あいつは、力の使い方を知っているハイアルトだ。どうしても俺は『s e n s o』の導きを知りたいんだよ。あいつと寝れば…」

「…ルウを還してあげたいのだね」

「…」

やっぱりトウエは知っているんじゃないか。だったら…

「キリハラが駄目なら、トウエだっていい。俺に『s e n s o』を教えてよ。セキレイの記憶を戻してやってよ。頼むから」

「…ルウは無意識のうちに自分で記憶を閉ざしている。それを戻すやり方は幾らでもあるが、これはアーシュにしかできないことだよ」

「なぜ？」

「君が彼を選んだからだ」

「…だから、俺が還さなきゃならないんだろ？…わかってるよ…」

トウエは真実しか言わない。それが辛かった。

「アーシュならやれる。君の力は無限に等しい。天にも地下へも君は行ける者だからね」

「トウエは口ばかりだ…俺が本物の『アスタロト』みたいに言うんだから」

俺は少し不貞腐れて、トウエを責める。

トウエは優しく見つめたまま、黙って頷いた。

12、

セキレイの機嫌がここところ良くない。

夏季休暇でベルが実家へ帰ってしまつて、愚痴を吐く奴が居なくなつた所為もあるだろう。

泣いたり怒つたりして俺を責めるならまだしも、拗ねて口を利かなくなる。

原因は…勿論俺にある。

メルと寝たからだ。

メルとのセックスは前もつて、セキレイにも了解を取っていた筈だつた。

納得はもらえてなかつたけどさ。

だって仕方が無い。セックスしなきゃ「sensor」の使い方はわかりづらいんだから。

歳を取つて、理屈と思考の幅を広げれば、経験しなくてもわかる。それでも想像力では決して補えないのが「sensor」だ。

セックスをすればお互いの行きたい記憶の場所へ確実に行ける。

それだけじゃない。もっと大きな魔法を扱えるんだ。

キリハラが駄目なら、メルに頼むしかなかった。

メルはキリハラ of 愛人であり、「sensor」を極めているひとりではあるが、彼は俺には触るまいと学長に誓っていた。

誓いはきつと永久に守られるだろう。ふたりの愛情が途切れぬ限り。

だったらメルと交わすしかない。

彼がカノープスなら、セキレイの求める場所を彼に示して頂く。

メルはずっと俺を欲しがっていたと言う。

願っても無い。こちらにもメルには興味がある。
勿論、この感情はセキレイともベルとも違う感覚だ。

メルが俺を欲しいと思うのは、俺を崇めたいと言う思いがあるからだ。

彼は俺を欲しがりながら、俺に示されたがっている。
こういう男は信用していい。

夏の始まりの夜に、俺はメルの寄宿部屋を訪れた。
俺を待ちわびていたメルは、喜んで俺を引き入れた。

初めてメルが俺を抱いた夜、メルは俺をとことん戒めた。
それは俺を自分に縛りつかせたいという抑圧的欲望から来ている。
セキレイ以外、セックスをしたことなかった俺はメルのやり方に
驚き、困惑したが、苦痛と言うものが快楽と繋がっている事実が面
白かった。

だが、それ以上に俺に溺れる事を躊躇わないメルが意外だった。
メルは本気で俺を好きなようだ。

次に寝た時、今度はメルは思い切り俺をあやした。
優しくジェントルに労わるように抱いた。またもや俺は驚いた。
こんなにも優しい愛撫ができるものなのか。もやは彼に肉親に近
い。

もつとも俺は肉親の情など知らない。

メルが俺への思いをどう整理しているのかはわからないが、この
時点でメルは俺に従おうと自分に科していたようだ。
彼は俺の膝元に跪く事を厭わない気にいる。

案の定、セキレイはメルと寝た俺を思いきり詰^なった。

「君を還す為だ」とは決して言うまい。

セキレイを還したいという思いは俺の自己満足に過ぎないからだ。

快樂を求めるセックスと愛するものと愛を営う形態は違はずだ。たとえ同じ行為でも、俺はセキレイとする時とメルとやる時では感情の重みや深み、何よりも姿勢が違う。

それを説明しても結局は言い訳にしか聞こえないだろうから、セキレイの怒りを黙って聞く。

それがまた気に食わないセキレイは腕を組んだ仏頂面で俺を睨む。そういう彼に俺はいたって真面目な顔で言う。

「君への愛は誓って永遠に変わることは無い。信じる」

「舌先三寸って言葉知ってる？君にぴったりだ」

「十センチぐらいはあるかもしれない。が、俺はセキレイに嘘は言わない」

「知ってる。だから腹が立つんじゃないか。少しぐらい僕に気を使つて、僕とのセックスの方が良かった、とか嘘でも言ってくれりゃいいんだ」

「セキレイとのセックスの方が俺にとっては極めて重要だ。…これでいいかい？」

「…うん、納得…できるか！バカアーシュ！…もう…本当に君ってさ」

呆れたのか諦めたのか、セキレイは俺の胸に身体を寄せる。

俺はセキレイの頭を撫でた。

「俺のすることが君の苦しみになるのなら、俺を嫌ってもいいよ」

「そんなの…できるわけもないだろう？わかっているクセに…もう、くやしいよ。こんなにも嫌いになれないものがあるっていう事実に驚愕してるよ。全くもって『愛』は偉大だ。むかつくけどさ」

「君以上に俺が君を愛していることを忘れないでよ」

「馬鹿言わないでくれ…それだけは、君に負けたくないね」

俺達の愛は多分同じ色をしている。

愛してると言う前に身体を寄せ合い同化する。

気がつけば、ふたり身体を重ねている。

お互いが一番の安らぎだと知っているから…。

学長の了解も取り、誘われていた遠出を実行する。

即ち、ベルの待つスタンリー侯爵家へ行くんだ。

学園以外での宿泊なんて、今まで一度だってないものだから、俺もセキレイも浮かれっぱなしで、邸宅に着くまで、ずっと窓の外をキョロキョロしどうしたった。

本やテレビでしか見たこと無い（もつともテレビだってそんなに見ることもないのだが）田舎の景色が広がると、思わず声を上げた。あっちもこっちもそっちもと、ふたつの目じやたりないくらいに眩しくて、ベル宅へ着く頃にはぐったりしていた。

大歓迎のベルの姿に、こちらも思わず抱きついてしまったが、後から考えたら、幼い子供のはしゃぎ様は恥ずかしかった。

スタンリー家のお屋敷は侯爵家の気品と豪華な装飾に溢れていて、別世界に來た気分だった。

だがこういう飾られた作り物なんて三日もすりゃ飽きるってもんだ。

人間だけが、一生飽きる事無い俗物だと俺は考えている。

その俗物の権化とも言えるベルの叔父のエドワードは、ベルから聞かされていたよりも随分マトモな人間だった。

と、言うよりその容姿に驚いた。

だって大人になったベルが立っている気がしたのだから。

真っ直ぐに伸びたゴールデンブロード。サファイアの青い瞳。品の良い身のこなし方。響くテノールの声音。

ああ、肉親とはこういうものなのか…と、思い知らされる。

叔父、甥の血の繋がりとはい、ここまで似るものなのか…

肉親の居ない俺にとって、それは未知の感動だった。

ベルとエドワードは、何があっても決して繋がりを解くことはできないのだ。

思惑など少しも無く、お互いの悲しみは自分のものに、喜びもまた自分のものにできるのだろう。

貴族の様式での慣れない食事の間、ベルとエドワードのふたりに流れる当たり前の情感に羨ましい気がしていた。それはセキレイも同じだったのだろう。

後で「ベルが羨ましいね」と、何回も俺に耳打ちしたんだ。

捨て子の俺達は「天の王」学園に恩がある。

知らぬうちにそれが身に付いて、我儘を言ったりはしない。

保育所育ちの子は皆、一応に同じだ。乱暴や不良を働く生徒は少ない。

だって、帰る場所がない子に、学園から出て行く勇気などあるはずもないじゃないか。

大方の保育所育ちの子は、皆、学園を卒業するまで、素直でいい子のフリをしている。

あくまでフリね。

俺とセキレイは生まれて初めての外の空気に触れ、自由を感じていた。

同時にこの見知らぬ土地では、俺達ふたりが他に気を使ったり、気兼ねする必要はないのだと感動していたんだ。

セキレイは俺とは違う見方で、エドワードへの思慕を募らせた。彼に肉親への愛を求めていたのだ。

セキレイのそれは憧れになっていた。

咎めたりはしなかった。俺にはセキレイの気持ちが嫌になるほどわかる。

俺とセキレイの間で、肉親の情を求める事は無い。

俺達はその前に、同化してしまう。

甘えることさえ知らないのだ。

「ルウはエドワードが気に入ったようだね」

セキレイのいない処で、ベルが言う。

「妬ける？」

「え？…いや、それはないけど。それよりもルウがエドワードに甘えているのが何だかおかしくてね」

「俺達には甘える親が居ないからね。ベルが羨ましいんだよ」

「…ごめん」

「君が謝る必然性が、どこにあるのかわからないね。と、言うかねえ…俺もベルに甘えたいんだけどね」

「え？」

そうだ、俺はベルに甘えたがったのだ。

俺にとって、ベルは他の奴とは全く違う。

幼い頃から、俺が何をして俺を心配する奴は周りにいなかった。何故なら俺には力があるし、俺自身が弱音を吐かないからだ。

だが、ベルは俺が何をするにも心配してくれる。

「アーシュ、大丈夫か？」と、自分のこと以上に俺の心配をするベルにうざいと無視したり、強がりと言ったりするけれど、本当はベルの感情が嬉しかった。

ベルの優しさが肉親の居ない俺にはそれに近い感情に思えたりするのだ。

「俺でよかつたら…君の為なら、何でもするよ。ホントだからね」

と、ベルが言う。

ばか、嘘だと思っもんか。

君の言葉は誰よりも、心に響くんだよ、ベル。

13、

夏季休暇は俺とセキレイにとって、驚きと高揚の連続だった。

貴族の生活とやらの疑似体験なんか、滅多なことでは出会わない話だ。こんな生活、本の世界だけだと思っていたのに。なんだかこのお屋敷だけが時間が止まっているみたいだ。

だが、楽しい日々はあつという間に過ぎる。

夏の一日は陽の長さで反比例でこんなにも早かつたんだ。

明日は学園へ戻る日になって、ベルの母親が姿を見せた。

別に俺達に会いたかつたわけではなく、単なる私用ではあつたのだが、俺もセキレイもベルの家族には興味があつたから、内心少しだけ胸が高鳴つた。

それが別の意味で予想以上であつたことも、俺にとっては導きたる何かが含まれていたのかもしれない。

ベルの母親は、俺にそっくりだという古い絵画をみせてくれたんだ。

侯爵家で大事に受け継がれていた絵画は「レヴィ・アスタロト」と、言つた。

確かにその絵のモデルは、俺に生き写しというぐらいにそっくりで……まあ、所詮絵なのだから、どこまでが写実的なかは知らないが……驚いたのなんのって。

俺に似たその「レヴィ・アスタロト」と言うモデルが本当にいたのなら、俺はもしかしたらこのモデルとどこかで血が繋がっているのかもしれない……なんて、絵空事みたいな感傷に浸ってしまった。

血の繋がりのや、両親のことなんて、あまり考えた事なんてない。生まれた時から、あの学園で育った俺に、自分を産んでくれた親のことなんてあまり考えても意味が無いように思えた。

もし、俺の親が目の前に現れたとして、俺はそれに対して何か思うことがあるのだろうか。

「自分を産んでくれてありがとう」と、礼のひとつでも言うべきなのだろうか…

俺は自分の血の繋がりのよりも、今の自分自身の事しか興味が無い。身体の中に脈々と流れる魔の力が、俺を産んでくれた両親のおかげであろうと、彼らに頭を下げる気などには到底なれない。

…と、いう事は俺はどこかで俺を捨てた両親の事を恨んでいるのだろうか…

セキレイは…どう思っているのだろう。

4歳までの彼の記憶。彼の生きてきた時間。育ててきた家族との生活。彼はそれを取り戻したくはないのだろうか…

どんなに複雑でも、辛いことがあったとしても、その四年間がセキレイが過ごした時間であるなら、彼はそれを知るべきではないのだろうか。

そして、彼が俺よりも家族を選んだとしても、それは当たり前なことではないだろうか…

その夜、セキレイはエドワードの寝室で休んだ。

彼がそう望んだからだった。

セキレイはエドワードを家族のように慕っている。

俺には与えられない愛を、彼は求めているのだと、改めて知った。

翌日、スタンリー家を離れる日が来た。

ベルとセキレイが既舎へ、可愛がっていた馬達とのお別れに行つたのを見計らつて、書斎にいるエドワードへ挨拶と言う名目で会いに行つた。

エドワードは仕事をしていたが、俺が来るのを拒まなかった。

「ちようどお茶にしようと思つていたんだ」

そう言つて、使用人にお茶を用意させる。

「君達が居なくなつて、この屋敷が静かになると思つと、寂しくて仕方ないね。いつだつて、去る者より、置いていかれる方が辛いからね」

「そうですね…でも、なんだろう。俺には故郷つていうもんがないのに何だかねえ…。そもそも学園から外に出るのも初めてなんだ。

こんなに長居させてもらつて、何から何まで初めての経験でさ…ここに来て良かったよ」

「僕も君達に会えて嬉しかったよ」

「ホント？」

「貴族つて奴は嘘も真実も絶妙ないい回して物事をあやふやにするのが得意なんだが、君達と居る時は、こちらも純粹だった少年時代に戻る」

「エドワードの子供時代が純粹だったとは…想像しにくい」

「そういうあげつらう辛辣さも、綺麗な少年であれば、魅力的に感じる。いい歳になつたもんさ」

「貴族つて楽そうに見えるけどね」

「昔の貴族的特権なんて、もう無いよ。貴族なんてのは名前だけ。時間に置いていかれた時代錯誤の遺物だよ。どの貴族も自分の体裁を守る為に、借金をこさえて火の車が実情さ。この家だつて、ベルの父親の援助がなければ、とつくに誰かの手に渡っていた…」

「あなたの姉上がベルの父親に嫁いだから、スタンリー家は没落せず済んだんでしょう。…感謝してる？」

「残念ながら…しているよ。僕の方じゃどうにもならない話だったからね。あの結婚は間違いではなかったと…今では思っている」

「ベルがあなたにそれを見せているんだね」

「…アーシュは頭が良いね」

エドワードは観念したように、俺に笑いかけた。少し寂しい笑いだった。

俺もエドワードも近づいた別れが寂しくて、感傷的になっている。

「私に話があるの？アーシュ」

「話というより…なんかエドワードと一度、二人だけで話したかったんだ」

「そう。私も君とルウには正式に、お礼を言いたかったんだ。クリストファーの友人になってくれて本当にありがとう」

「…なんだかさ、あなたってベルから聞いた印象と随分違うんだよねあ。だってベルをレイプしたのはあなたじゃないか。あの時のベルがどんなだったか…見てもらえないくらいだったんだから。俺は本当にあんたをぶん殴りに行こうって思ったんだ」

「それは、…悪かったと思っっているよ。あの時は、僕自身荒れていてね。誰かを傷つけたくて仕方なかった。充分大人だったけれど、大人気なかったよ。クリスが愛しくても、表現方法を知らなかったのもひとつだった」

「で、今は充分大人になったの？」

「…僕は屈折しているんだよ。貴族のくせにアルトだろ？風当たりが強いというか…仲間内では異端者なんだよ。貴族には魔力が無いのが、昔からの彼らの誇りだと伝えられていたからね。魔力を持つ者は、穢れた血の末裔だつてさ」

「そんなの、聞いたことない」

「まあ、この街は魔法使いに寛容だしね。それでも力を持つ貴族のほとんどは、表立ってその力を使わないもんさ。だから、強力な魔

術師が彼らを補佐する。貴族だけではないよ。実業家でもなんでも、トップには影のように寄り添う魔術師が必ずひとりは居るものさ」

「へえ、あなたにも？」

「言つたろ？僕は異端者だからね。力を隠そうともしていないし、まあ、必要ならば魔術師とも付き合うけれど、今のところ、彼らのお世話になることもない。それにクリストファーがこのスタンリー家を継ぐのなら、益々術者はいらない。なにせ彼はホーリーだからね」

「じゃあ、俺の力も必要になる時は言つてよ。あなたの味方になつてあげる」

「心強い限りだ」

「セキレイを可愛がつてくれたお礼だよ」

「え？」

「セキレイは本当に嬉しがつていたよ。彼には家族の記憶がない。あなたを…父親みたいに思っているんだ」

「ルウから聞いたよ。この街に来るまでの記憶がないのだと。だけど、君が傍にいてくれたから、寂しくはなかったって、言っていた」

「うん、それは俺も一緒だ。俺にも家族はいないしね」

「…アーシュ、あの絵の事が気になるかい？」

「…少しだけね」

「調べておくよ。私もあの絵にまつわる話には興味がある」

「ありがとう」

「それと…クリストファー…ベルの事だが…」

「なに？」

「彼は恋をしているそうだ。できるなら彼の力になつてくれたまえ」

「ベルが？…そんな話は聞いて無いけど…彼、男にも女にもモテるからねえ、誰だろ」

「…」

意味ありげな眼差しで俺を見るエドワードに、俺は首を傾げた。

窓の外の向こう、駆け寄ってくるベルとセキレイが見えた。
俺とエドワードは彼らを迎える為に同時に立ち上がった。

「また、次の休暇にはここへ来るといい。いつでも歓迎するよ」
「ありがとうございます」

エドワードは美しい貴族だ。
彼にはベルが、ベルには彼が居る限り、この家が輝きを失うことはないだろう。

新学期が始まった。

俺達は中等科二年、即ち八年生になった。

学校が始まると俺はすぐに図書館へ向かった。

いつものようにすました顔で、カウンターで仕事をこなしている
キリハラにまっしぐらに向かった。

「こんにちは」

「…ごきげんよう、アーシュ」

彼は下を向いたまま、俺の顔を見ようともしない。

「聞きたいことがあるんだけど…」

「聞けないこともあります」

「そう警戒すんなよ。もうあんたとセックスしたいなんて言わない
から」

「そう願います。で、何の質問ですか？」

「イルミナティ・バビロンについて、詳しく教えてくれ」

「…」

下を向いたままのキリハラの顔がゆっくり俺の方を向いた。

誰に聞いたかとも言いたい顔だった。

「あなたの親友のエドワード…じゃなかった、ユーリから聞いたんだ。この学園の秘密結社であるイルミナティ・バビロンの事。昔はあなたもユーリもその組織に一員だったって事。今でも存在するのでしょ？一体どういうモノなのか。何を目的にしているのか。どこに行けば接触できるのか…色々知りたいの。教えてくれませんか？キリハラ先生」

精一杯の愛嬌全力投球で、彼に微笑んでみせた。

キリハラはゾツとしたように身体全体で俺から背けるフリをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6721s/>

sensio

2011年10月8日03時17分発行